

首都圏中央連絡自動車道 埋蔵文化財調査報告書21

－ 市原市番後台遺跡・山口城跡・大和田遺跡群 －

平成 25 年 3 月

国 土 交 通 省
公益財団法人 千葉県教育振興財団

首都圏中央連絡自動車道 埋蔵文化財調査報告書21

いち ほん し ばん ごと たい やま ぐち じょう おお わ だ
- 市原市番后台遺跡・山口城跡・大和田遺跡群 -



序 文

公益財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的とし、昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第704集として、国土交通省による首都圏中央連絡自動車道建設事業に伴って実施した市原市高滝湖北部に所在する番後台遺跡、山口城跡、大和田遺跡群の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、市原市高滝湖周辺の縄文時代、古墳時代、中世の様相が明らかとなり、約30年前の番後台遺跡、大和田遺跡の調査に続いて、養老川中流域の歴史に、新たな1頁を付け加えることができました。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また地域の歴史解明の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成25年3月

公益財団法人 千葉県教育振興財団
理事長 渡 邊 清 秋

凡 例

- 1 本書は、国土交通省による首都圏中央連絡自動車道建設事業（千葉県）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡の所在地と遺跡コードは、以下のとおりである。

番后台遺跡	市原市養老番後740-3ほか	(遺跡コード219-005)
山口城跡	市原市山口字後田254-1ほか	(遺跡コード219-087)
大和田遺跡群	市原市大和田字緑岡378-19ほか	(遺跡コード219-089)
- 3 発掘調査から報告書刊行に至る業務は、国土交通省の委託を受け、公益財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査および整理事業の組織・担当者および期間は、本文中に記載した。
- 5 本書の執筆・編集は、主任上席文化財主事 森本和男が担当した。
- 6 発掘調査から報告書刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、国土交通省関東地方整備局千葉国道事務所、市原市教育委員会のご指導、ご協力を得た。
- 7 本書で使用した地図は、下記のとおりである。

第1図	国土地理院発行	1/25,000	地形図「鶴舞」	NI-54-19-16-2
第2・30図	市原市発行	1/2,500	市原市基本図	N-6、N-7、O-6、O-7、O-8
- 8 図版1の周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による昭和45年撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。測量成果は世界測地系を使用した。
- 10 本書で使用した遺構番号等は、基本的に調査時の番号を踏襲した。

本文目次

第1章	はじめに	
第1節	調査の経緯と経過	1
1	調査に至る経緯	1
2	首都圏中央連絡自動車道（圏央道）関係遺跡の調査	1
第2節	遺跡の位置と環境	2
1	遺跡の立地と沿革	2
2	周辺の遺跡	3
第2章	番后台遺跡	10
第1節	調査・整理の方法と概要	10
1	調査の経過と調査方法	10
2	基本土層	15
第2節	縄文時代	17
1	遺構	17
2	遺物	28
第3節	古墳時代	29
第4節	中世	31
1	遺構	31
2	遺物	38
第5節	まとめ	43
第3章	山口城跡	46
第1節	調査・整理の方法と概要	46
1	調査の経過と調査方法	46
第2節	遺構と遺物	49
1	遺構	49
2	遺物	49
第3節	まとめ	53
第4章	大和田遺跡群	54
第1節	調査・整理の方法と概要	54
1	調査の経過と調査方法	54
2	基本土層	59
第2節	縄文時代	60
1	遺構	60
2	遺物	64
第3節	古墳時代	69
1	横穴	69

2 遺物	72
第4節 まとめ	72

報告書抄録	巻末
-------	----

挿図目次

第1図 周辺の遺跡	4	山口城跡	
番後台遺跡		第25図 山口城跡年度別調査範囲と グリッド設定図 (1:2,500)	47
第2図 番後台遺跡・山口城跡周辺地形図 (1:6,000)	11	第26図 山口城跡確認調査 (1:2,500)	48
第3図 番後台遺跡周辺地形図 (1:2,500)	12	第27図 土器集中地点 (1:1,000)	50
第4図 番後台遺跡 (2)・(3) 年度別調査範囲と グリッド設定図 (1:1,000)	13	第28図 土器集中地点	51
第5図 番後台遺跡 (2)・(3) の確認調査と 遺構配置図 (1:1,000)	14	第29図 土器	52
第6図 番後台遺跡の土層	15	大和田遺跡群	
第7図 番後台遺跡 (2)・(3) 中央付近の 遺構分布図 (1:200)	16	第30図 大和田遺跡群周辺地形図 (1:5,000)	55
第8図 小竪穴 (1)	20	第31図 大和田遺跡群の調査範囲と グリッド設定図 (1:2,000)	57
第9図 小竪穴 (2)	21	第32図 大和田遺跡群の確認調査と 遺構分布図 (1:2,000)	58
第10図 小竪穴 (3)	22	第33図 大和田遺跡の土層	59
第11図 土坑	24	第34図 本調査A区	61
第12図 土坑・陥穴	25	第35図 本調査A区土層	62
第13図 土器	26	第36図 土坑・炉穴	63
第14図 石器	27	第37図 炉穴	64
第15図 方形周溝状遺構	30	第38図 本調査B区	65
第16図 中世の土坑	32	第39図 土器・鉄製品	66
第17図 土坑 (1)	33	第40図 石器	67
第18図 土坑 (2)	34	第41図 大和田遺跡 (1986年調査) と 大和田遺跡群 (2)	70
第19図 土坑 (3)	35	第42図 大和田遺跡群 (2)	71
第20図 土坑 (4)	36	第43図 大和田遺跡の横穴群	74
第21図 土坑・溝	39	第44図 大和田横穴群の横穴と出土土器	75
第22図 溝 (1)	40		
第23図 溝 (2)	41		
第24図 溝 (3)	42		

表目次

第1表 周辺の遺跡……………	5	大和田遺跡群	
番後台遺跡		第7表 大和田遺跡群の調査……………	54
第2表 番後台遺跡遺構一覧……………	17	第8表 本調査A区遺物包含層の遺物組成…	61
第3表 番後台遺跡出土土器……………	28	第9表 大和田遺跡出土縄文土器……………	68
第4表 番後台遺跡出土土器……………	29	第10表 大和田遺跡出土石器……………	68
		第11表 大和田遺跡出土土器……………	68
山口城跡			
第5表 山口城跡出土縄文土器……………	52		
第6表 山口城跡出土土器……………	52		

図版目次

図版1 遺跡周辺の航空写真 (約1:10,000、昭和45年)	図版8 043土坑 SK002土坑 SK001土坑
番後台遺跡	図版9 SK003土坑 SK004土坑 056a陥穴
図版2 番後台遺跡(2)調査前風景 トレンチ調査 中央付近の遺構	図版10 SM001方形周溝状遺構 019土坑、018土坑 017土坑、016土坑
図版3 009小竪穴 057小竪穴 028小竪穴	図版11 006土坑、007土坑、008土坑 030土坑、031土坑、038土坑、040土坑、 045土坑、028小竪穴、029土坑 012土坑、013土坑、014土坑
図版4 004小竪穴、005土坑 055小竪穴 001小竪穴	図版12 049土坑 021溝 020溝
図版5 002小竪穴 041小竪穴 053小竪穴	図版13 061溝 059溝 048溝
図版6 011小竪穴 010小竪穴 062小竪穴、063小竪穴	
図版7 003小竪穴 046小竪穴 042土坑	山口城跡 図版14 山口城跡遠景

トレンチ調査 土器集中地点	大和	図版18	本調査B区 大和田遺跡群（2）調査前風景 001横穴
大和田遺跡群		図版19	001横穴奥壁 002横穴 横穴群
図版15 大和田遺跡群遠景 大和田遺跡群（1）トレンチ調査 大和田遺跡3トレンチ			
図版16 本調査A区 SK001 SK002			遺物 図版20 番後台遺跡出土土器
図版17 SK003 SK004 SK005			図版21 番後台遺跡、山口城跡、大和田遺跡群（2） 出土遺物 図版22 山口城跡、大和田遺跡出土遺物

第1章 はじめに

第1節 調査の経緯と経過

1 調査に至る経緯

今から約半世紀前、昭和33年に首都圏基本計画が策定され、東京オリンピックの前年にあたる昭和38年に首都圏の道路交通の骨格として3環状9放射の道路網が計画された。都心から放射状にのびる東名高速道路、中央自動車道、関越自動車道、東北自動車道、常磐自動車道、東関東自動車道、館山自動車道、第三京浜道路、東京湾岸道路の9路線と、それらと環状につながる、都心から半径約8kmの位置に計画された首都高速中央環状線（中央環状線）、都心から半径約15kmの位置に計画された東京外かく環状道路（外環道）、都心から半径約40km～60kmの位置に計画された首都圏中央連絡自動車道（圏央道）の3路線である。

放射道路の工事は次々に進められ、昭和42年に中央自動車道、昭和44年に東名高速道路が開通して、1990年代中頃に9放射線道路のほとんどが完成した。環状道路の整備はその後から本格化した。高度経済成長期には、東京と地方の諸都市を結ぶ幹線交通が優先されたからである。

首都圏中央連絡自動車道（圏央道）は、都心から半径約40km～60kmの位置に計画された延長約300kmに及ぶ環状の自動車専用道路である。圏央道の整備により、首都圏の道路交通の円滑化、沿線都市間の連絡強化と、沿線の地域づくりの支援・活性化、災害時などの代替路としての機能、年間CO₂の削減など環境改善といった役割を担う。千葉県内の全体延長は約95kmで、車線数は4車線だが、当面は2車線で設計速度は100km/hと計画された。

千葉県区間のうち茂原～木更津間は28.4kmで、平成元年8月に基本計画区間となり、平成7年3月に都市計画決定され、平成9年2月には整備計画区間となった。平成10年度から用地買収、平成12年度から工事が着手された。このうち、木更津JCT～木更津東IC間（約7.1km）は平成19年3月21日に開通した。

事業地区内の埋蔵文化財の取り扱いについては、関係諸機関と協議した結果、事業計画の変更等が難しいことから、止むを得ず、記録保存の措置を講ずることになった。事業主体である国土交通省は、千葉県教育委員会の指導により、調査機関の指名を受けた公益財団法人千葉県教育振興財団と委託契約を締結し、発掘調査を実施することになった。

2 首都圏中央連絡自動車道（圏央道）関係遺跡の調査

公益財団法人千葉県教育振興財団による圏央道関係の発掘調査は、平成13年3月に木更津工区から開始され、現在も継続中である。調査された遺跡の報告書は、平成23年度までに18冊が刊行されている⁽¹⁾。財団法人君津郡市文化財センターが刊行した報告書も合わせると⁽²⁾、合計20冊になる。

これまでに刊行された圏央道関係の調査報告書は、おもに木更津市と袖ヶ浦市に所在する遺跡のものである。市原市およびそれよりも東側に位置する茂原市、東金市などに所在する遺跡の調査、整理、報告書の作成は、現在も進行中である。

本書で報告する番后台遺跡、山口城跡、大和田遺跡群は、市原市の南側、木更津市との市境に近い高滝湖北側に所在する。高滝湖の東側を南北に国道297号線が通り、高滝湖の北側を圏央道が東西に走り、両者の交差する地点では市原南IC（仮称）の建設が進んでいる。

高滝湖は、房総半島を南北に流れる養老川をせき止めて、平成2年に竣工した人造湖である。周辺には

旧石器時代、縄文時代の遺跡が数か所分布し、狩猟採集時代には居住に適した良好な環境が備わっていたと考えられる。一方、国道297号線を境に東側は山間となり、平地が少ない。山間で調査された遺跡は横穴や塚など、生活とは直接関係しない遺跡が多かった。わずかながらも平地のある高滝湖周辺とは環境が相違し、異なった性格の遺跡が形成されたのであろう。

高滝湖北側湖畔を通過する圏央道の工事で、西から東へ山口城跡、番後台遺跡、久保堰ノ台遺跡、緑岡古墳群、大和田遺跡群、高滝陣屋跡の遺跡調査が実施された。山口城跡は、養老川をせき止める高滝ダム西側の独立丘陵上に位置し、番後台遺跡と久保堰ノ台遺跡は、高滝ダム周辺の河岸段丘にある。久保堰ノ台遺跡は平成23年度に調査され、縄文時代の竪穴住居跡、小竪穴、土坑などが多数検出され、大量の土器が出土した。その東側には小規模な独立丘陵があり、緑岡古墳群が位置する。緑岡古墳群も平成23年度に調査され、丘陵上に古墳、土坑墓、裾部分に縄文時代の住居跡、小竪穴が検出された。

高滝湖の北東側の独立丘陵に大和田遺跡群が所在する。圏央道の工事計画によると、高滝湖を見下ろす大和田丘陵上にサービスエリアが造営されるとのことで、それにともない丘陵上の広い面積にわたって調査が実施された。平成18年度から調査が行われ、その結果、大量の礫や土器が出土した。旧石器時代末期の細石刃核、縄文時代の土器・石器、前期の垂飾品、勾玉などのほか、古墳時代の横穴、奈良・平安時代の住居跡も検出された。本書で報告するのは、平成18年度調査の大和田遺跡、平成20年度調査の大和田遺跡群（1）、平成21年度調査の大和田遺跡群（2）の3か所である。

大和田遺跡群の東側に隣接する丘陵に柏野遺跡があり、平成20年度～平成22年度に調査が実施された。旧石器時代の遺物集中地点、縄文時代の遺物集中地点、古墳、奈良・平安時代住居跡などが検出され、旧石器時代の尖頭器が多数出土した。現在整理作業が進んでいる。さらにその東側では、圏央道工事によって山小川遺跡、関尻遺跡、竹ノ下遺跡が調査され、縄文時代の遺物包含層、埋甕炉をともなう住居跡、中世の集落跡などが検出された⁽³⁾。関尻遺跡と竹ノ下遺跡が所在する場所は、圏央道と国道297号線が交差する市原南IC（仮称）の予定地に相当する。

第2節 遺跡の位置と環境

1 遺跡の立地と沿革

房総半島は、北部の下総台地、南部の上総丘陵、安房丘陵の山間地からなる。下総台地は更新世後期から完新世にかけて出現した。約12万年前の最終間氷期に古東京湾の浅い海が干し上がってできた台地で、その後、富士山などの火山灰を起源とする関東ローム層が堆積した。台地を囲む低地には発達した沖積層が形成されている。一方、南部の山間地帯は、中新世から島孤変動という地質学的構造運動により房総半島南部が隆起した結果、複雑な地形が形成された。

山間地の房総半島南部を、河川延長75kmの養老川が南から北へ流れ、東京湾に注いでいる。市原市高滝湖は東京湾から約20km離れた房総半島のほぼ中央に位置し、蛇行する養老川中流をダムでせき止めてできた人造湖である。ダムの築造以前には、洪水と家屋浸水の被害がたびたび起きていた。また高度経済成長にともない、京葉臨海工業地帯の工業用水と人口増加による生活用水の確保が急務となっていた。そこで千葉県では、養老川総合開発事業の一環として養老川の治水、生活・工業用水の供給などを目的に高滝ダムの建設を計画した。ダム建設には集団移転がともない、ダム予定地に隣接する移転先に所在していた番後台遺跡が消滅することになり、昭和54年4月から翌年7月まで調査が実施された。

2年間にわたる番後台遺跡の調査で、弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居跡100軒以上からなる集落跡が検出された⁽⁴⁾。同じ頃に養老川下流域の台地上でも大規模な発掘調査が行われ、原始古代の集落が次々に姿を現していた。下流域と同様に中流域でも、100軒を越す住居跡で構成される大きな集落跡が調査されたことで、番後台遺跡は注目をあびた。

近年実施された圏央道工事にとまなう番後台遺跡の調査は、約30年前ダム建設にとまなう集団移転先となった調査地点から、北東へ約250m離れた場所で実施された。新たな調査では、以前の調査で検出されたような竪穴住居跡からなる集落跡は見つからず、縄文時代の小竪穴や中世の土坑などが検出された。同一丘陵上で、少し距離を隔てた地点で異なる生活痕跡が残されていた。

高滝湖の東北側に標高約80mの独立丘陵があり、その麓に大和田集落がある。高滝湖の北側から南東へ市道7253号線が大和田集落を抜けて通っている。この市道は高滝ダム建設にとまなう周辺整備対策の一環として建設された。そしてその道路建設の際に、丘陵西端に所在した大和田遺跡が、昭和61年7月から翌年3月まで調査され、古墳、横穴、須恵器窯などが検出された⁽⁵⁾。圏央道はこの市道付近を通過することになり、25年前の調査地点に隣接して、圏央道建設にとまなう調査が実施された。

養老川下流域と異なり、中・上流域では大きな公共事業にとまなう大規模調査例は少なく、これまで実施された唯一大きな調査は、高滝ダム建設にとまなう発掘だった。圏央道工事による発掘調査は、ダム建設に関連して20年以上前に得られた調査成果に新たな知見を付け加えることとなった。

なお山口城跡は高滝ダムの西側に隣接しているが、ダム建設にとまなう調査は実施されていない。この遺跡は、平成2年度から5年度にかけて実施された千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査で新たに発見された城跡で、平成11年発行の『千葉県埋蔵文化財分布地図(3)』（改訂版）に遺跡として明示された。平成19年に県道工事にとまなう狭い範囲で調査が実施されたが、明確な遺構は検出されなかった⁽⁶⁾。

2 周辺の遺跡（第1図、第1表）

養老川流域の調査は、東京湾に流入する養老川下流域の平野部を中心に進んだ。養老川下流右岸の市原市役所のある国分寺台周辺では、縄文時代から奈良・平安時代にかけて著名な遺跡が多数分布し、大規模な発掘調査が長年にわたって実施された。しかしながら中・上流域に関しては、小規模な調査が行われただけで、歴史文化的様相はさほど明らかになっていない。ここでは市原市高滝湖周辺に限定して、遺跡の様相を見てみよう。

調査された旧石器時代の遺跡はほとんどない。大和田丘陵上のやや内側に位置する大和田遺跡（5）から、旧石器時代の遺物集中地点が検出され、出土した礫・石器に細石刃核が含まれていた。また大和田丘陵東側に隣接する丘陵上に柏野遺跡があり（①）、数年前から圏央道工事にとまなう発掘調査が始まり、旧石器時代の遺物集中地点が検出された⁽⁷⁾。大和田遺跡（5）および柏野遺跡の調査成果は、近いうちに刊行される予定である。

大和田遺跡群から南東へ約2.5kmの地点にある新井花和田遺跡からは（②）、旧石器時代の尖頭器や石核が、縄文時代早期の遺構・遺物に混入して出土した⁽⁸⁾。また北西の平蔵川と養老川との合流点より少し下った段丘上の南総中学遺跡で（③）、ナイフ形石器、彫器、搔器、尖頭器などが表面採集された⁽⁹⁾。これらの遺跡以外に、養老川中・上流域周辺で旧石器時代の遺跡は報告されていない。

養老川流域の旧石器時代の遺跡は武士遺跡、福増遺跡、西広遺跡など、東京湾に近い下流域右岸に分布する。養老川の北側を流れて東京湾に流入する村田川流域、また南側を流れる椎津川流域でも旧石器時代



第1図 周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡

	遺跡名		遺跡名		遺跡名
A	番後台遺跡	⑨	池和田古墳群	⑳	永田・不入窯跡
B	山口城跡	⑩	稲荷台古墳群	㉑	石川窯跡
C	大和田遺跡群	⑪	中岱古墳群	㉒	本郷堀ノ内館跡
①	柏野遺跡	⑫	真福寺台古墳群	㉓	本郷明金城跡
②	新井花和田遺跡	⑬	藪八幡神社古墳群	㉔	池和田城跡
③	南総中学遺跡（江子田古墳群）	⑭	牛久古墳群	㉕	下矢田城跡
④	緑岡古墳群	⑮	佐是古墳群	㉖	牛久城跡
⑤	久保堰ノ台遺跡	⑯	宮原横穴群	㉗	佐是城跡
⑥	鶴舞遺跡	⑰	戸部田ヤツ横穴群	㉘	高滝陣屋跡
⑦	雪解沢遺跡	⑱	岩横穴群		
⑧	大和田新谷古墳群	⑲	藪横穴群		

の遺跡は、おもに東京湾に近い台地上に点在していた。東京湾の沿岸地帯と房総半島南部の山間地帯とでは旧石器時代は環境が異なり、遺跡の形成にも違いが生じたのかもしれない。

縄文時代の遺跡も少ない。養老川上流の遺跡として、寺ノ台遺跡と石神台遺跡がある。高滝湖から約5km南へ離れた市原市月崎に寺ノ台遺跡があり、平成6年と平成22年に調査され、おもに縄文時代中期の竪穴住居跡、土坑などが検出された。さらに南東へ約1.5km離れた石神台遺跡では、縄文時代後期から晩期にかけての竪穴住居跡、溝などが調査された¹⁰⁾。

大和田遺跡群の南東にある新井花和田遺跡は、標高約130mの独立丘陵上にあり、縄文時代早期の子母口式前後の住居跡12軒と炉穴24基が検出された。住居跡が環状に配置された類例の少ない古い時期の集落遺跡であった。圏央道工事にとまなう調査で、大和田丘陵の南端に位置する番後台遺跡群（4）からは、縄文時代早期・前期の遺物包含層が検出された。大量の土器や礫とともに、牙玉や丸玉などの装身具が出土した。大和田遺跡群の東に位置する柏野遺跡からは、縄文時代早期の炉穴、遺物包含層が検出された。さらに柏野遺跡の東に位置する山小川遺跡では、縄文時代中期の埋甕炉をとまなう住居跡が検出された¹¹⁾。

大和田遺跡群の西側には緑岡古墳群(④)、久保堰ノ台遺跡(⑤)、番後台遺跡と遺跡が連続して分布している。圏央道建設にとまなう近年の調査により、それぞれの遺跡で縄文時代の遺構が検出された。緑岡古墳群では縄文時代中期の住居跡と小竪穴、久保堰ノ台遺跡でも縄文時代中期の住居跡と小竪穴の調査が行われた。番後台遺跡は約30年前に調査され、弥生時代から古墳時代にかけて多数の住居跡が検出された集落遺跡である。1軒だけ縄文時代中期の加曽利E式の竪穴住居跡が検出され、その他に縄文土器と石器も出土した¹²⁾。

市原市山小川から北へ約2.5km離れた平蔵川右岸の段丘上に鶴舞遺跡があり(⑥)、縄文時代中期の小竪穴が検出された¹³⁾。平蔵川と養老川との合流地点のやや北側に位置する南総中学遺跡では、縄文時代前期の関山式期と中期の加曽利E式期の住居跡と、小竪穴が検出された¹⁴⁾。さらに養老川を下り、牛久市街地北側の台地上に奉免上原台遺跡があり、縄文時代早期の貝殻条痕文系土器をとまなう炉穴が136基も検出された。前期の関山式期の住居跡6軒、中期の加曽利E式期の住居跡1軒、そして陥穴が30基以上検出された¹⁵⁾。奉免上原台遺跡のやや下流の段丘上に土宇遺跡と呼称された馬立塚ノ台遺跡が位置する。この遺跡からは縄文時代中期の加曽利E式期の住居跡20軒と、多数の土坑が検出された¹⁶⁾。

これより下流の養老川兩岸の台地上には、山倉貝塚、西広貝塚、武士遺跡（土器石貝塚）など、縄文時

代の大規模な遺跡が多数分布している。旧石器時代遺跡の分布と同様に、東京湾に近い下流域の台地上に多くの縄文時代遺跡が分布し、中・上流域の山間地帯では、遺跡分布の少ない傾向がうかがえる。

弥生時代についても、中・上流域の山間地帯で遺跡は少なく、東京湾に面する下流域の台地上で、環濠をともなう大規模な集落遺跡が多く形成された。養老川中流域の高滝湖の北側台地上に番後台遺跡がある。弥生時代後期を主体とする住居跡が30軒検出された集落遺跡で、さらに古墳時代にも継続して集落が形成された。養老川を下って右岸台地上に南総中学遺跡がある。この遺跡は環濠をともなう台地上の集落で、住居跡39軒、方形周溝墓23基、甕棺墓3基が検出された。墓と住居が別個な空間に配置されていて、集落構造を示す遺跡として有名である。平成2年度の周辺調査により、墓域が西側にも広がることが判明した¹⁷⁾。南総中学遺跡の南方約1kmに雪解沢遺跡があり(⑦)、弥生時代後期の壺棺墓が検出された¹⁸⁾。さらに川を下ると馬立塚ノ台遺跡があり、弥生時代後期の住居跡が85軒検出された。番後台遺跡と同様にこの遺跡も古墳時代に継続して大規模な集落が形成された。

古墳時代の集落については、番後台遺跡や馬立塚ノ台遺跡のように、弥生時代からそのまま継続して営まれた遺跡が見受けられる。両遺跡ともに古墳時代前期から後期にかけての住居跡が検出された。しかし奈良時代の住居跡は検出されず、古墳時代で集落は終焉している。

両遺跡の中間に位置する南総中学遺跡周辺でも、弥生時代から古墳時代にかけて集落が営まれたと想定されている。南総中学遺跡では古墳時代の住居跡が少数検出された。雪解沢遺跡では確認調査で、弥生時代後期から古墳時代前期に比定される住居跡が複数存在することが判明した。その近隣で実施された小規模な発掘調査でも、古墳時代の住居跡が複数検出され、台地上で古墳時代前期から後期にかけて集落が展開したと推測されている¹⁹⁾。

古墳や横穴群は多く分布している。高滝湖の南端付近に位置する皿郷田茂遺跡では、古墳時代前期の住居跡1軒と円形周溝墓1基、方形周溝墓7基が検出された²⁰⁾。高滝湖北側の番後台遺跡に近接して緑岡古墳群と大和田遺跡があり、約25年前の市道7253号線建設工事により大和田遺跡で円墳1基と方墳2基、また近年の圏央道建設にともなう工事により緑岡古墳群で円墳1基が調査された。大和田遺跡のある独立丘陵北側の谷部に大和田新谷古墳群(⑧)があり、養老川と平蔵川の合流付近に池和田古墳群(⑨)がある。

古墳時代集落の存在が推定される南総中学遺跡周辺では、多量の副葬品の出土により有力者の墓と目される金環塚古墳(瓢箪塚古墳)²¹⁾を含む、多数の古墳からなる江子田古墳群がある。江子田古墳群の北側台地には稲荷台古墳群(⑩)、中岱古墳群(⑪)、真福寺台古墳群(⑫)、境部田岱古墳群がある。さらに牛久市街をはさんで西側に藪八幡神社古墳群(⑬)、牛久古墳群(⑭)、佐是古墳群(⑮)があり、養老川中流域で比較的古墳の集中する地域である。

横穴は、高滝湖西側台地斜面に宮原横穴群(⑯)、北側台地斜面に大和田横穴群があり、約25年前に実施された大和田遺跡の調査で16基の横穴が検出された²²⁾。養老川を下って左岸に戸部田ヤツ横穴群(⑰)、岩横穴群(⑱)、藪横穴群(⑲)が並列して分布している。平蔵川流域では、池和田古墳群の近辺に池和田横穴、池和田城横穴がある。江子田古墳群には江子田横穴があり、その北側台地に稲荷台横穴、境部田岱横穴群、真福寺前横穴群、やや離れた東側に真ヶ谷殿部田横穴群がある。古墳と横穴は近接して分布する傾向が見られ、両者の関連性がうかがえる。

なお集落や古墳・横穴などの通常の遺跡では見られない特殊な性格を示す須恵器窯跡が、大和田遺跡で検出された。この窯跡は古墳時代後期に属し、千葉県内で最古の窯とされている。

奈良・平安時代になると養老川下流域では上総国の国分寺、国分尼寺が建立され、近くには国府推定地もある。下流域の台地上には同時代の大規模な集落遺跡や、国家的工事に関連した瓦窯跡などの生産遺跡が多数分布している。しかしながら殷賑をきわめた下流域に対して、中・上流域では奈良・平安時代の遺跡が僅少である。牛久市街地北側の奉免上原台遺跡では、奈良時代の方形周溝状遺構が検出され、また瓦片も出土した。その他に須恵器を製作した永田・不入窯跡(20)と石川窯跡(21)などの遺跡があるが、集落遺跡の調査例はない。中・上流域で人々の暮らす拠点がどこにあったのか、今のところ不明と言わざるをえない。

養老川中流域の中世遺跡として、市原南IC(仮称)付近に位置して、圏央道工事で調査された関尻遺跡があげられる²³⁾。13世紀～14世紀の龍泉窯系青磁が出土し、小規模で質素な掘立柱建物跡が15棟検出された。養老川中流域における鎌倉時代の開墾を示唆する村落であった。

戦国時代の城館跡と比定された遺跡が養老川中・上流域に多く分布している。山間の地形を応用して、軍事的防備に適した城館を築造しやすかったためだろう。養老川中・上流域に分布する城館跡は、ほとんどが戦国時代の16世紀に築造されたと考えられている。文献に記載されたり、あるいは実際に調査が実施されて、実態の判明した城館跡は少ない。またそれ以前の、鎌倉時代や室町時代の遺跡調査例も少ない。

高滝湖南端から南へ約5kmの養老川上流域に琵琶首館跡がある。この館には、天正6年(1578)の里見義弘の死後の家督争いに敗れた梅王丸の母と妹が幽閉されたという伝承がある。館の周辺には月崎城ノ越城跡、月崎みさご城跡がある。いずれも少数の堀切や郭からなる比較的単純な構造の城館跡で、連結するような配置となっているが、詳細な点は不明である。

養老川を下って、高滝湖南端の南北700m～800mの細長い尾根上に大羽根城郭跡があり、曲輪、腰曲輪、空堀が直線上に配置されていた。16世紀に里見氏の支城として築造されたという伝承があるが、城の年代や城主などは特定されていない。昭和61年の調査成果から、臨時的な砦ではなく本格的な中世山城という認識に改められた²⁴⁾。大羽根城郭跡の北側に隣接して本郷堀ノ内館跡(22)、さらに本郷明金城跡(23)が連なっている。

高滝湖北端の高滝ダム西側に隣接して山口城がある。付近に「駒込」、「馬場」、「弓寄」、「矢留田」、「馬坂」、「小榊輪」という関連地名があり、また郭、空堀、土塁、虎口、井戸などの遺構が残っているとして、城館と認定された²⁵⁾。

養老川をさらに下ると、支流の平蔵川が東側から流入している。平蔵川上流域には平蔵城跡があり、居住域に相当する字根古屋の部分で平成19年に調査が実施され、溝が検出された²⁶⁾。平蔵川をはさんで平蔵城跡の北東に、国の重要文化財に指定された西願寺阿弥陀堂がある。

さらに平蔵川流域には山小川城跡、池和田城跡などがある。池和田城跡(24)は庁南武田氏の勢力下にあった城で、房総半島で戦国大名の里見氏と北条氏による抗争が繰り広げられるなか、攻守のドラマが軍記物や古文書に登場する城である。戦国時代末の豊臣による小田原攻めの時には、北条氏側の庁南武田氏抱えの城になっていたという²⁷⁾。

平蔵川と養老川との合流地点よりやや下ったところに、下矢田城跡(25)がある。河川を堀として利用し、その中に主郭、二の郭、三の郭を形成するとして城跡と認定された。平成8年に主郭の一角が調査され、土塁とされた遺構は土手であることが判明し、また城に関係する建物などの施設は検出されなかった²⁸⁾。

牛久市街地西端に牛久城跡(26)があり、さらにその西側の養老川左岸に佐是城跡(27)がある。佐是城跡

は台地上にⅠ～Ⅴ郭が並び、それぞれの郭の間に堀が設けられていた²⁸⁾。16世紀の築城とされているが、築城した人物、経緯などは不明な点が多い²⁹⁾。

江戸時代の遺跡として、高滝湖北側丘陵裾部に高滝陣屋跡がある⁽²⁸⁾。高滝藩は、天和三年(1683)に板倉重宣が2万石を受領して立藩し、その後二代16年で廃藩となった。重宣の領地は3か所に分かれ、信州伊奈郡31ヶ村石高16,000余石、佐久郡12ヶ村石高3,000石、上総国市原郡4ヶ村石高765石余りであった。高滝郷大和田村に高滝藩の陣屋があったと伝えられ、圏央道建設工事にともない平成23年度に調査が行われたが、遺構は検出されなかった。高滝藩に陣屋はなく、大和田村の光厳寺が宿陣になったという説もある³⁰⁾。

注

- (1) 『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書1』千葉県文化財センター調査報告第497集 2004年
『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書2』千葉県文化財センター調査報告第511集 2005年
『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書3』千葉県教育振興財団調査報告第526集 2005年
『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書4』千葉県教育振興財団調査報告第546集 2006年
『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書5』千葉県教育振興財団調査報告第558集 2006年
『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書6』千葉県教育振興財団調査報告第574集 2007年
『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書7』千葉県教育振興財団調査報告第583集 2007年
『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書8』千葉県教育振興財団調査報告第597集 2008年
『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書9』千葉県教育振興財団調査報告第612集 2009年
『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書10』千葉県教育振興財団調査報告第638集 2010年
『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書11』千葉県教育振興財団調査報告第654集 2011年
『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書12』千葉県教育振興財団調査報告第655集 2011年
『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書13』千葉県教育振興財団調査報告第672集 2012年
『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書14』千葉県教育振興財団調査報告第676集 2012年
『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書15』千葉県教育振興財団調査報告第681集 2012年
『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書16』千葉県教育振興財団調査報告第682集 2012年
『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書17』千葉県教育振興財団調査報告第683集 2012年
『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書18』千葉県教育振興財団調査報告第684集 2012年
- (2) 『首都圏中央連絡自動車道〈木更津-東金〉埋蔵文化財調査報告書1』君津郡市文化財センター発掘調査報告書第187集 2004年
『首都圏中央連絡自動車道〈木更津-東金〉埋蔵文化財調査報告書2』君津郡市文化財センター発掘調査報告書第196集 2005年
- (3) 『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書15』千葉県教育振興財団調査報告第681集 2012年
- (4) 『市原市番後台遺跡・神明台遺跡』千葉県文化財センター第46集 1982年
- (5) 『大和田遺跡』市原市文化財センター調査報告書第25集 1988年
- (6) 『市原市山小川遺跡・柏野遺跡・山口城跡』千葉県教育振興財団調査報告第624集 2009年
- (7) 『千葉県教育振興財団文化財センター年報No.35-平成21年度-』2010年
- (8) 『市原市新井花和田遺跡』市原市文化財センター発掘調査報告書第74集 2001年
- (9) 『千葉・南総中学遺跡』駒澤大学考古学研究室 1978年
- (10) 『月崎寺の台遺跡』『市原市文化財センター年報 平成6年度』1997年
『市原市寺ノ台遺跡第2次』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第21集 2012年
- (11) 注(3)と同じ
- (12) 注(4)と同じ
- (13) 『鶴舞子来遺跡』『平成7年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会 1996年

- (14) 注(9)と同じ
- (15) 『奉免上原台遺跡』市原市文化財センター発掘調査報告書第43集 1992年
- (16) 『土宇』日本文化財研究所文化財調査報告6 1979年
- (17) 「安久谷向ノ岱遺跡」『平成2年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会 1991年
- (18) 『市原市雪解沢遺跡』千葉県文化財センター 1984年
- (19) 『市原市江子田遺跡』千葉県文化財センター調査報告第516集 2005年
- (20) 『皿郷田茂遺跡』市原市文化財センター 1984年
『皿郷田茂遺跡-第2次-』市原市文化財センター発掘調査報告書第24集 1988年
- (21) 『江子田金環塚古墳発掘調査報告書』市原市教育委員会 1985年
- (22) 『大和田遺跡』市原市文化財センター発掘調査報告書第25集 1988年
- (23) 注(3)と同じ。
- (24) 『大羽根城郭跡』市原市文化財センター 1986年
- (25) 『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ』千葉県教育委員会 1996年
- (26) 『市原市平蔵城跡』千葉県教育振興財団調査報告第588集 2008年
- (27) 『千葉県中近世城跡研究調査報告書 第14集』千葉県文化財センター調査報告第256集 1994年
- (28) 「下矢田城跡」『市原市文化財センター年報 平成8年度』2000年
- (29) 『千葉県中近世城跡研究調査報告書 第6集』千葉県文化財センター 1985年
- (30) 小高春雄『市原の城』1999年
- (31) 小幡重康「高滝藩に陣屋はなかった」『上総市原』第八号 1992年

第2章 番後台遺跡

第1節 調査・整理の方法と概要

1 調査の経過と調査方法（第2～5図、図版1・2）

番後台遺跡は、高滝ダムへと向かって蛇行する養老川の本流をとどめた高滝湖の北側に位置している。首都圏中央連絡自動車道（圏央道）は、高滝湖の北岸を東西に走り、湖と南北に並行して通行する県道81号市原天津小湊線および小湊鉄道と、直交することになる。圏央道と県道81号線の交差する西側台地上に番後台遺跡があり、その東側に久保堰ノ台遺跡が隣接している。また西側の独立丘陵には、山口城跡が位置している。

高滝湖は、養老川を高滝ダムでせき止めてできた人造湖である。高滝湖が出現する以前は、番後台遺跡の周囲を養老川が大きく周回するように蛇行していた。ダムの本格的工事は昭和61年に始まり、平成2年に竣工した。ダムの本格工事の前に、集団移転地にあたる番後台遺跡の調査が昭和54年度～昭和55年度に実施された。この時の調査対象面積は23,270㎡、縄文時代から古墳時代にかけての住居跡130軒、方形周溝遺構2基、土坑9基、溝状遺構4条、方形遺構9基、さらに住居跡と考えられるピット群、土器の集積1か所が検出された。これらの遺構にともなって多数の土器、鉄器、石器が出土した。

この時の調査で、弥生時代から古墳時代後半にかけての集落遺跡が、養老川中流域にも存在したことが確認された。また櫛描文やタタキ目のある弥生時代の東海系土器が出土した点でも、注目をあびた。圏央道の道路建設で調査の対象となった部分は、前回に調査された地点から北東へ約200m離れた同じ台地上に位置する。高速道路の形状にしたがい幅約60m、長さ約300mの細長い調査範囲で、標高は約50mである。調査前は水田、山林、荒蕪地であった。

調査の経過 発掘調査は平成17年度に西側、平成18年度に東側をそれぞれ番後台遺跡（2）、番後台遺跡（3）と命名して実施された。調査面積は、平成17年度の番後台遺跡（2）が7,892.61㎡、平成18年度の番後台遺跡（3）が5,080㎡あり、合計12,972.61㎡であった。整理作業と報告書作成を平成24年度に行った。発掘調査から整理作業・報告書刊行にいたるまでの調査組織、担当者および作業内容は以下のとおりである。

発掘調査

平成17年度 調査期間：平成17年11月1日～平成17年12月22日

調査対象面積：7,892.61㎡

確認調査面積：上層886/7,892.61㎡、下層16/7,892.61㎡

本調査面積：上層1,600㎡

組織：調査部長 矢戸三男、南部調査事務所長 高田 博、担当：上席研究員 福田 誠

平成18年度 調査期間：平成18年11月6日～平成18年11月27日

調査対象面積：5,080㎡

確認調査面積：上層480/5,080㎡、下層52/5,080㎡

本調査面積：上層200㎡

組織：調査研究部長 矢戸三男、南部調査事務所長 高田 博、担当：上席研究員 小高春雄



山口城跡

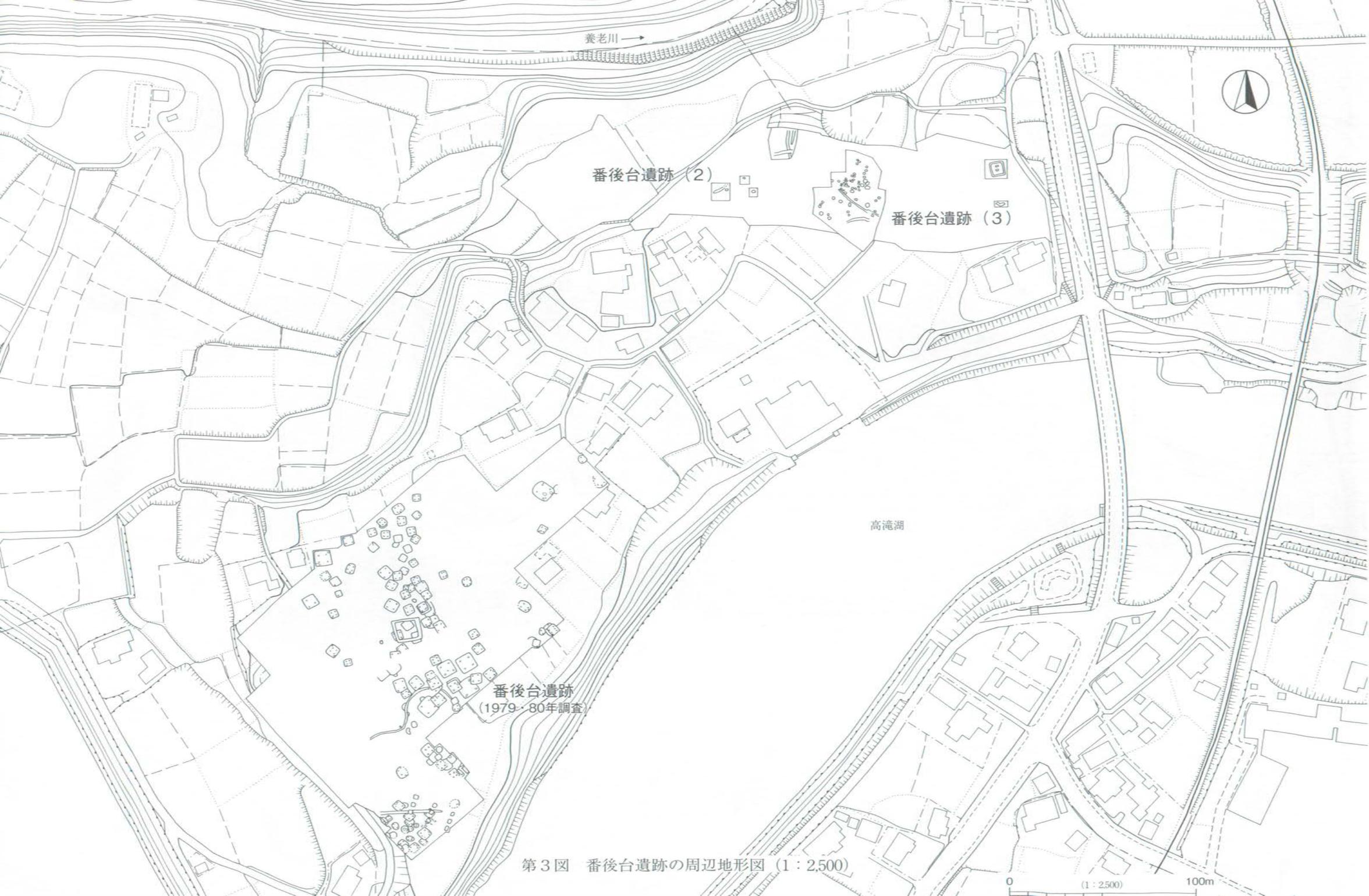
番后台遺跡 (2)・(3)
(2005・06年調査)

久保堰ノ台
遺跡1

番后台遺跡
(1979・80年調査)

第2図 番后台遺跡、山口城跡周辺地形図 (1 : 6,000)

0 200m
1:6,000



養老川 →

番後台遺跡(2)

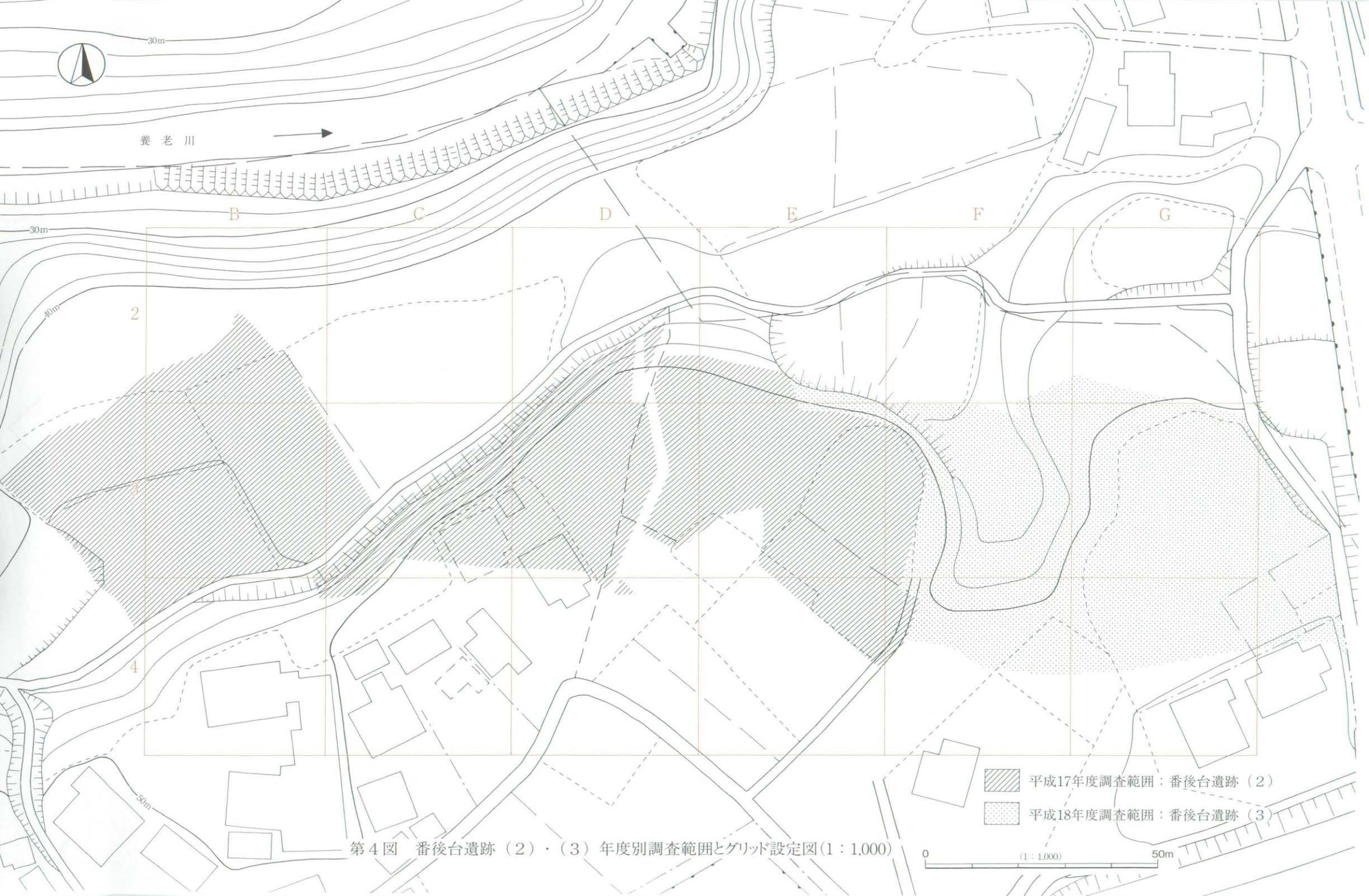
番後台遺跡(3)

高滝湖

番後台遺跡
(1979-80年調査)

第3図 番後台遺跡の周辺地形図 (1:2,500)

0 100m (1:2,500)



養老川

30m

30m

40m

2

3

4

B

C

D

E

F

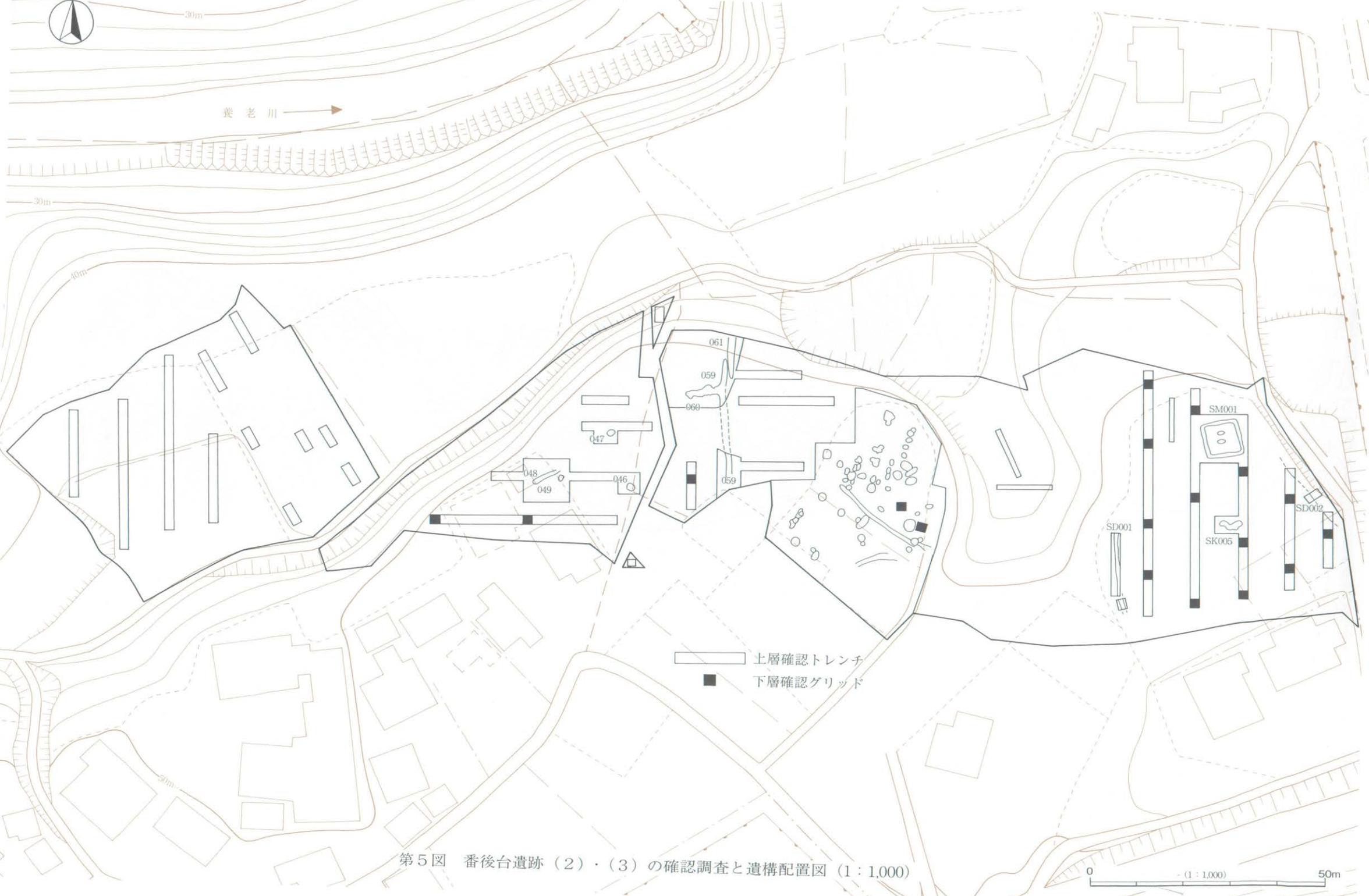
G

平成17年度調査範囲：番后台遺跡（2）

平成18年度調査範囲：番后台遺跡（3）

第4図 番后台遺跡（2）・（3）年度別調査範囲とグリッド設定図（1：1,000）

0 (1:1,000) 50m



第5図 番后台遺跡(2)・(3)の確認調査と遺構配置図(1:1,000)

整理作業

平成24年度 整理期間：平成24年4月2日～平成25年3月8日

作業内容：水洗注記から刊行まで

組織：調査研究部長 関口達彦、整理課長 高田 博、担当：主任上席文化財主事 森本和男

調査方法 調査は、遺跡全体に40m四方の大グリッドを基本とするグリッド網を設定して行った。大グリッドの名称を北から南へ2、3、4・・・、西から東へB、C、D・・・という順序で配列した。さらに大グリッドを4m四方の小グリッドで東西南北に10区画ずつ分割して全体を100等分した。小グリッドの名称は、北西隅を00とし、東へ00、01、02・・・と1の位を増し、南へ00、10、20・・・と10の位を増して、00～99のとした。遺構・遺物を検出した場合、その出土地点を特定するために大グリッドと小グリッドの名称を組み合わせ、たとえば3E76などと表記している。また遺構を検出するごとに遺構番号を付け、整理作業の時も、基本的に野外調査で付された遺構番号を使用した。

上層の調査については、遺構の有無を確認するため、調査対象となった範囲に幅2mのトレンチを任意に設定し、必要に応じてトレンチを拡張した。設定したトレンチの合計面積が、調査面積全体の約10パーセントに相当するようにした。下層の調査については、ローム層の存在が確認された場所で、2m四方の方形グリッドを設定し、ハードローム層下部まで掘り下げて、旧石器時代の石器が出土するかどうか確認を試みた。

調査成果の概略 平成17年度の調査では、調査範囲の中央付近から縄文時代の小竪穴、中世から近世の土坑、溝など多数の遺構が検出され、1,600㎡の本調査範囲が設定された。

平成18年度の調査では、縄文時代の土坑、古墳時代の方形周溝状遺構、溝などが検出され、遺構を中心に200㎡の本調査範囲が設定された。

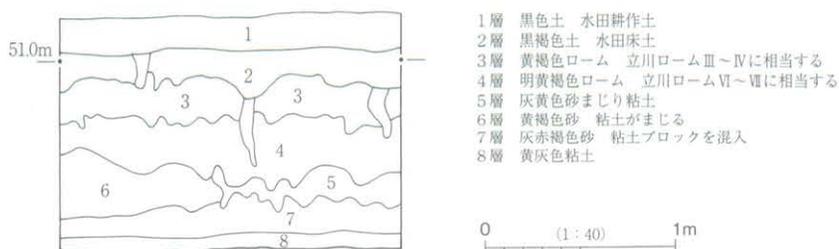
下層の旧石器時代に関しては、石器などの遺物が検出されなかったため、確認調査で終了した。

平成17年度と平成18年度の調査成果をまとめると、検出された遺構は縄文時代の小竪穴16基、土坑7基、陥穴1基、古墳時代の方形周溝状遺構、中世の土坑37基、溝8条であった。

出土した遺物は、おもに縄文土器と石器・礫であった。

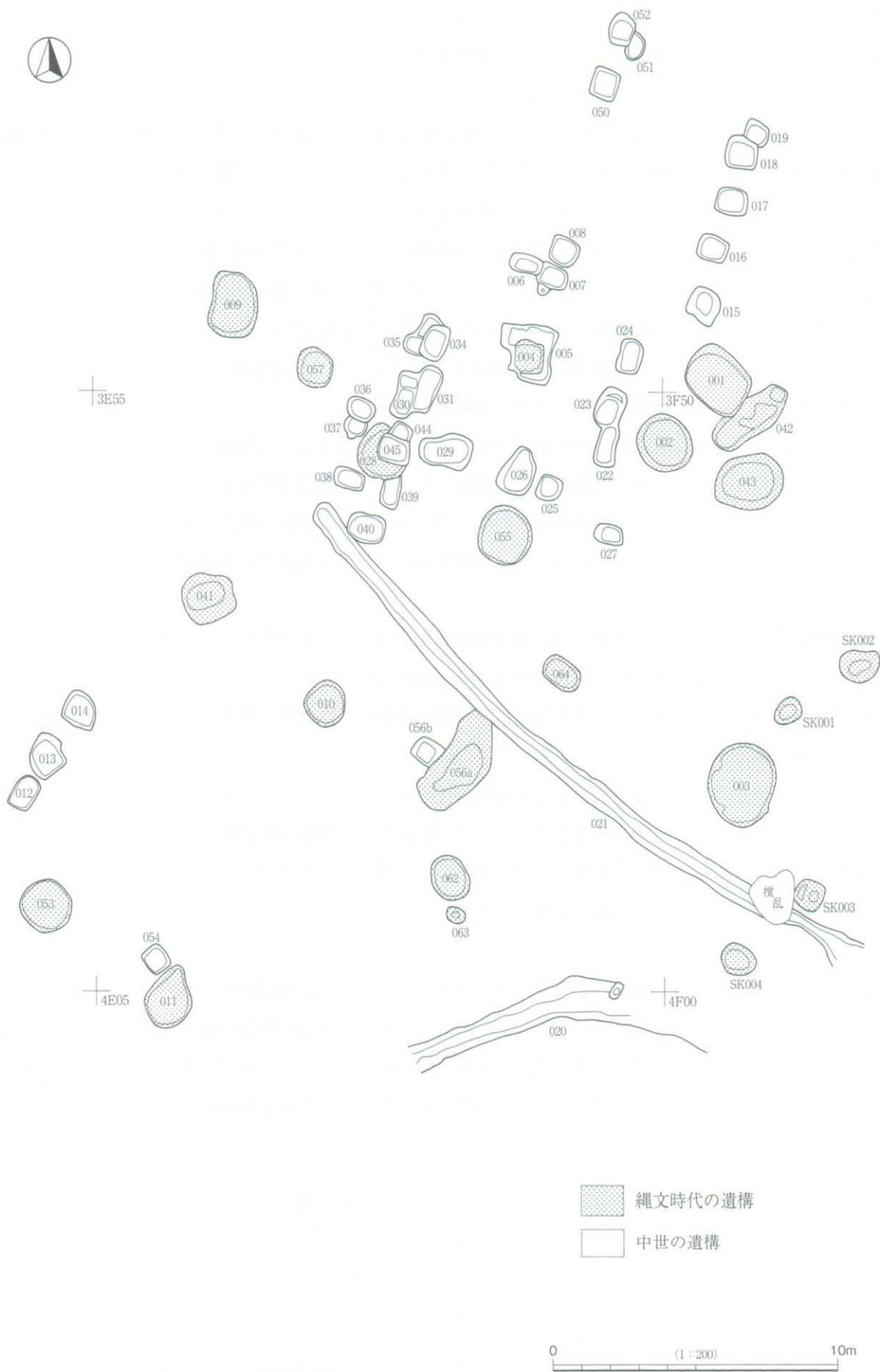
2 基本土層（第6図）

番後台遺跡が立地する高滝湖北岸は、高滝ダムが築造される以前は養老川中流域の河岸段丘にあたる。調査範囲東側の4G21グリッド西壁の土層を見てみると、厚さ20cm弱の黒色の耕作土と厚さ約15cmの黒褐色の水田床土とが、水田用の耕作土を形成し、その下部に黄褐色のローム層が堆積していた。黄褐色ローム層の下には、粘土の混入した砂層となった。地表から約110cm下に厚さ10cm弱の黄灰色粘上があり、それより下は黄灰色砂となっていた。



4G21西壁

第6図 番後台遺跡の土層



第7図 番後台遺跡(2)・(3)中央付近の遺構分布図(1:200)

第2節 縄文時代（第7図、図版2）

遺構は、調査範囲のほぼ中央付近から集中して検出され、縄文時代の遺構と中世の遺構が混在していた。検出された縄文時代の遺構はおもに小竪穴で、さほど密集せず、相互にやや距離をおいて分布していた。住居跡は検出されなかった。

1 遺構（第2表）

縄文時代の遺構として、小竪穴16基、土坑7基、陥穴1基が検出され、遺構にともない少量の縄文土器、石器・礫が出土した。

第2表 番後台遺跡遺構一覧

遺構番号	時期	種別	形状	挿図	位置	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	備考
009	縄文	小竪穴	隅丸長方形	第8図	3E46	2.06	1.64	0.37	
057	縄文	小竪穴	隅丸方形	第8図	3E46・47	1.80	1.76	0.52	フラスコ状
028	縄文	小竪穴	円形	第19図	3E57	1.90	(1.72)	0.36	039・044・045土坑と重複
004	縄文	小竪穴	方形	第8図	3E48	1.10	1.04	0.61	005土坑と重複
055	縄文	小竪穴	円形	第8図	3E58・68	1.93	1.93	0.49	
001	縄文	小竪穴	楕円形	第9図	3F40・50	2.41	1.86	0.45	042土坑と重複
002	縄文	小竪穴	円形	第9図	3E59,3F50	2.05	1.83	0.26	
041	縄文	小竪穴	楕円形	第8図	3E65・66	1.81	1.75	0.62	
053	縄文	小竪穴	円形	第8図	3E94	1.80	1.70	0.41	
011	縄文	小竪穴	楕円形	第10図	3E95,4E05	2.20	1.59	0.26	
010	縄文	小竪穴	円形	第10図	3E76・77	1.46	1.41	0.52	
062	縄文	小竪穴	楕円形	第10図	3E88・98	1.54	1.32	0.15	
063	縄文	小竪穴	楕円形	第10図	3E98	0.61	0.54	0.19	
064	縄文	小竪穴	楕円形	第10図	3E79	1.44	1.02	0.09	
003	縄文	小竪穴	楕円形	第10図	3F70・80	2.81	2.37	0.28	
046	縄文	小竪穴	円形	第9図	3D65	1.68	1.53	0.51	
042	縄文	土坑	楕円形	第9図	3F50・51	2.99	1.16	0.36	001小竪穴と重複
043	縄文	土坑	楕円形	第9図	3F50・51	2.40	1.89	0.30	
SK002	縄文	土坑	楕円形	第11図	3F71	1.50	1.18	0.43	
SK001	縄文	土坑	楕円形	第11図	3F71	1.03	0.86	0.37	
SK003	縄文	土坑	台形	第11図	3F91	1.05	1.05	0.19	
SK004	縄文	土坑	円形	第11図	3F90	1.22	1.07	0.35	
SK005	縄文	土坑	不整形	第12図	3G87・88	4.90	0.98	0.46	
056a	縄文	陥穴	楕円形	第12図	3E78・87・88	3.88	1.68	1.21	
SM001	古墳	方形周溝状遺構	方形	第15図	3G26~28・36~38・46~48	8.26	8.13	0.36	主軸351度・主体部2基
052	中世	土坑	やや方形	第16図	3E19・29	1.12	0.95	0.44	051土坑と重複
051	中世	土坑	五角形	第16図	3E29	0.98	0.69	0.22	052土坑と重複
050	中世	土坑	方形	第16図	3E29	1.06	0.96	0.39	
019	中世	土坑	方形	第17図	3F20	0.88	0.70	0.13	018土坑と重複
018	中世	土坑	方形	第17図	3F20・30	1.03	1.03	0.45	019土坑と重複
017	中世	土坑	方形	第17図	3F30	1.06	0.90	0.68	
016	中世	土坑	方形	第17図	3F30	1.09	0.83	0.48	
015	中世	土坑	方形	第17図	3F40	1.08	1.07	0.35	
006	中世	土坑	長方形	第18図	3E38	1.18	0.64	0.51	007土坑と重複
007	中世	土坑	長方形	第18図	3E48・49	0.99	0.77	0.28	006土坑と重複
008	中世	土坑	方形	第18図	3E39	1.00	0.98	0.36	
005	中世	土坑	不整形	第18図	3E48	1.96	1.95	0.47	004小竪穴と重複

遺構番号	時期	種別	形状	挿図	位置	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	備考
035	中世	土坑	長方形	第19図	3E47	-	0.63	0.23	034土坑と重複
034	中世	土坑	長方形	第19図	3E47・48	1.03	0.90	0.54	035土坑と重複
030	中世	土坑	長方形	第19図	3E47・57	1.49	0.78	0.34	031土坑と重複
031	中世	土坑	長方形	第19図	3E47・57	1.57	0.84	0.50	030土坑と重複
036	中世	土坑	長方形	第19図	3E57	1.03	0.76	0.53	037土坑と重複
037	中世	土坑	円形	第19図	3E57	0.78	0.70	0.13	036土坑と重複
044	中世	土坑	長方形	第19図	3E57	0.68	0.51	0.27	028小堅穴、045土坑と重複
045	中世	土坑	長方形	第19図	3E57	1.15	0.88	0.37	028小堅穴、044土坑と重複
038	中世	土坑	長方形	第19図	3E57	1.04	0.65	0.68	
039	中世	土坑	長方形	第19図	3E57	(0.98)	0.69	0.13	028小堅穴と重複
040	中世	土坑	長方形	第19図	3E67	1.37	0.98	0.55	
029	中世	土坑	長方形	第19図	3E57・58	1.89	1.24	0.45	
024	中世	土坑	長方形	第20図	3E49	1.19	0.75	0.66	
023	中世	土坑	長方形	第20図	3E59	1.29	0.90	0.46	022土坑と重複
022	中世	土坑	長方形	第20図	3E59	1.39	0.72	0.42	023土坑と重複
026	中世	土坑	不整形	第20図	3E58	1.67	1.15	0.45	
025	中世	土坑	方形	第20図	3E58・59	0.85	0.78	0.33	
027	中世	土坑	長方形	第20図	3E69	0.96	0.61	0.27	
014	中世	土坑	方形	第21図	3E74	1.18	1.05	0.23	
013	中世	土坑	方形	第21図	3E74・84	1.25	1.18	0.26	
012	中世	土坑	長方形	第21図	3E・84	1.22	0.82	0.19	
054	中世	土坑	長方形	第10図	3E95	0.9	0.78	0.39	
056b	中世	土坑	方形	第12図	3E77・87	0.87	0.80	0.22	
047	中世	土坑	楕円形	第21図	3D24・34	1.74	1.17	0.68	
049	中世	土坑	長方形	第21図	3D52	1.00	0.74	0.72	
021	中世	溝		第22図	3E、3F				
020	中世	溝		第22図	4E、4F				
061	中世	溝		第23図	2E				
059	中世	溝		第23図	2E、3E				
060	中世	溝		第23図	3D、3E				
048	中世	溝		第21図	3D				
SD001	中近世	溝		第24図	3G、4G				
SD002	中近世	溝		第24図	3G				

009小堅穴（第8図、図版3）

西北寄りの3E46に位置し、東南に057小堅穴がある。形状は隅丸長方形で、長軸2.06m、短軸1.64m、深さ0.37mであった。底面は中心付近に向かってやや深くなる。壁面は直線状に斜めに立ち上がる。

少量の遺物が出土した。

057小堅穴（第8図、図版3）

西北寄りの3E46・47に位置し、西北に009小堅穴、東南に028小堅穴がある。形状は隅丸方形で、長軸1.80m、短軸1.76m、深さ0.52mであった。底面はほぼ平坦である。壁面はフラスコ状に内部が膨らんでいる。

少量の遺物が出土した。

028小堅穴（第19図、図版3・11）

西北寄りの3E57に位置し、西北に057小堅穴がある。中世の039土坑、044土坑、045土坑と重複する。

形状は円形で、直径約1.90m、深さ0.36mであった。底面はほぼ平坦である。壁面は直線状にほぼ垂直に立ち上がる。

少量の遺物が出土した。

004小竪穴（第8図、図版4）

中央やや北寄りの3E48に位置する。中世の005土坑と重複する。形状は方形で、1辺が約1.10m、深さ0.61mであった。底面はほぼ平坦である。壁面は中世の005土坑によって破壊されてしまい、わずかに底面付近が残るだけであった。

少量の遺物が出土した。

055小竪穴（第8図、図版4）

ほぼ中央の3E58・68に位置する。西北に028小竪穴がある。形状は円形で、直径が1.93m、深さ0.49mであった。底面はほぼ平坦である。壁面の東側半分はほぼ垂直に立ち上がってから斜めに立ち上がり、西側半分は直線状に斜めに立ち上がる。

約20点の遺物が出土した。

001小竪穴（第9図、図版4）

東北寄りの3F40・50に位置する。南側は042土坑と重複し、さらにその南側に002小竪穴、043土坑がある。形状は楕円形で、長軸が2.41m、短軸1.86m、深さ0.45mであった。底面にはやや凹凸がある。壁面の南側は直線状にほぼ垂直に立ち上がり、北側は斜めに立ち上がる。

少量の遺物が出土した。

002小竪穴（第9図、図版5）

東北寄りの3E59・3F50に位置する。東側に001小竪穴、042土坑、043土坑がある。形状は円形で、長軸が2.05m、短軸1.83m、深さ0.26mであった。底面は中心付近がやや深くなる。壁面は、直線状に斜めに立ち上がる。東南隅に小ピットがあった。

041小竪穴（第8図、図版5）

西寄りの3E65・66に位置する。東南側に010小竪穴がある。形状は楕円形で、長軸が1.81m、短軸1.75m、深さ0.62mであった。底面の中心付近はややくぼむ。壁面は、直線状に立ち上がる。

少量の遺物が出土した。

053小竪穴（第8図、図版5）

西南寄りの3E94に位置する。東南側に011小竪穴がある。形状は円形で、長軸が1.80m、短軸1.70m、深さ0.41mであった。底面はほぼ平坦である。壁面は、直線状に斜めに立ち上がる。

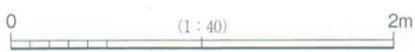
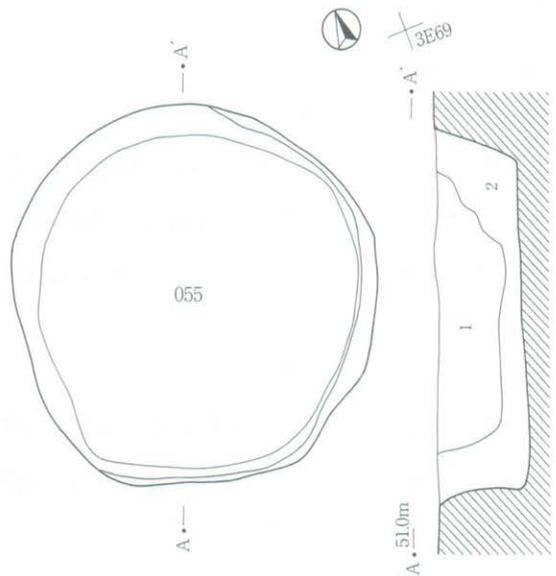
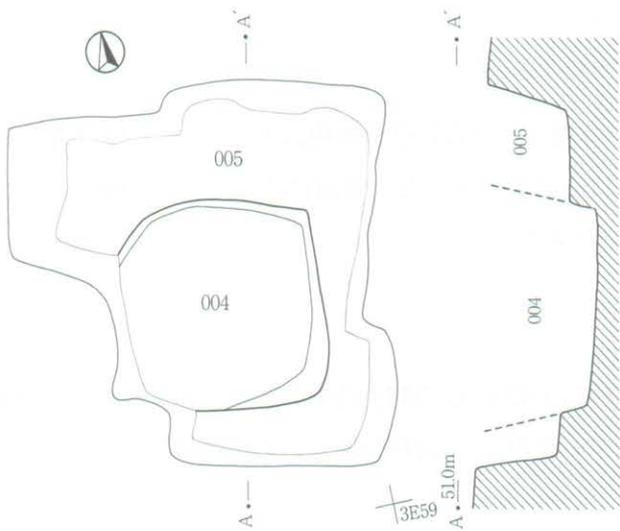
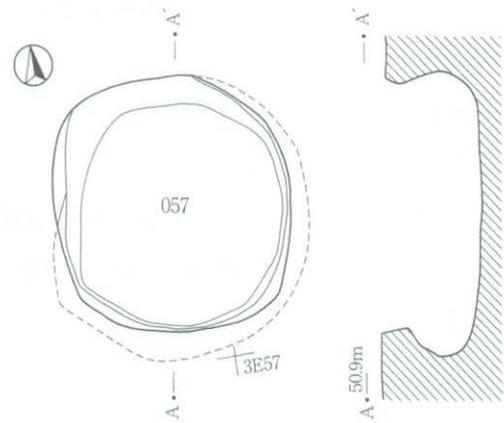
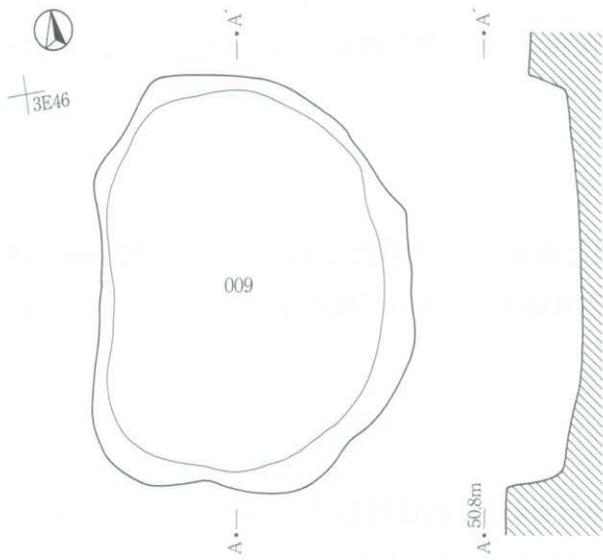
少量の遺物が出土した。

011小竪穴（第10図、図版6）

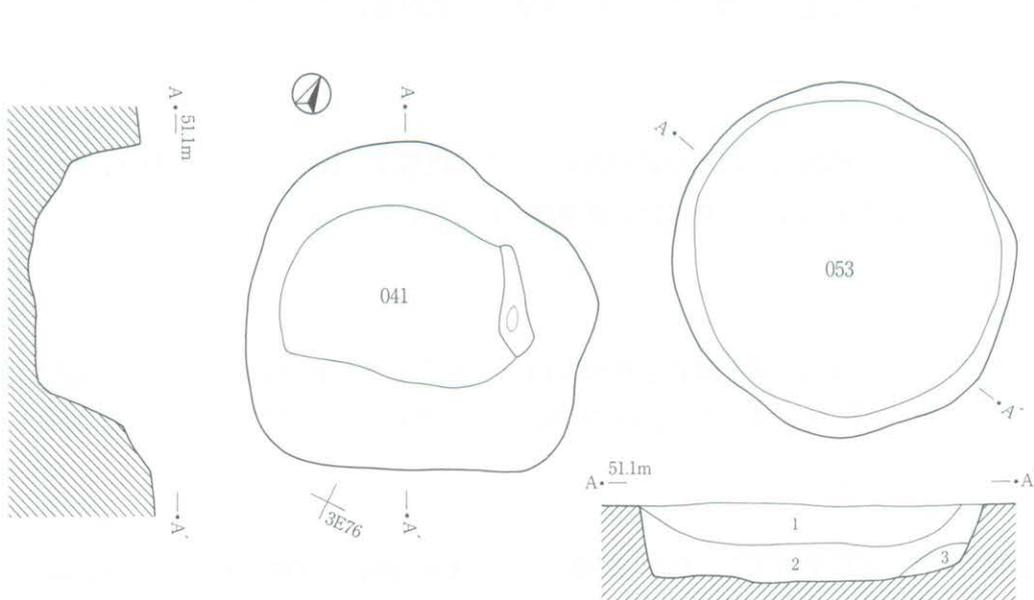
西南寄りの3E95・4E05に位置する。西北側に中世の054土坑が接し、さらにその西北に053小竪穴がある。形状は楕円形で、長軸が2.20m、短軸1.59m、深さ0.26mであった。底面はほぼ平坦である。壁面は、直線状に斜めに立ち上がる。

010小竪穴（第10図、図版6）

中央やや西南寄りの3E76・77に位置する。形状は円形で、長軸が1.46m、短軸1.41m、深さ0.52mであった。底面は平坦である。壁面は、直線状にほぼ垂直に立ち上がる。

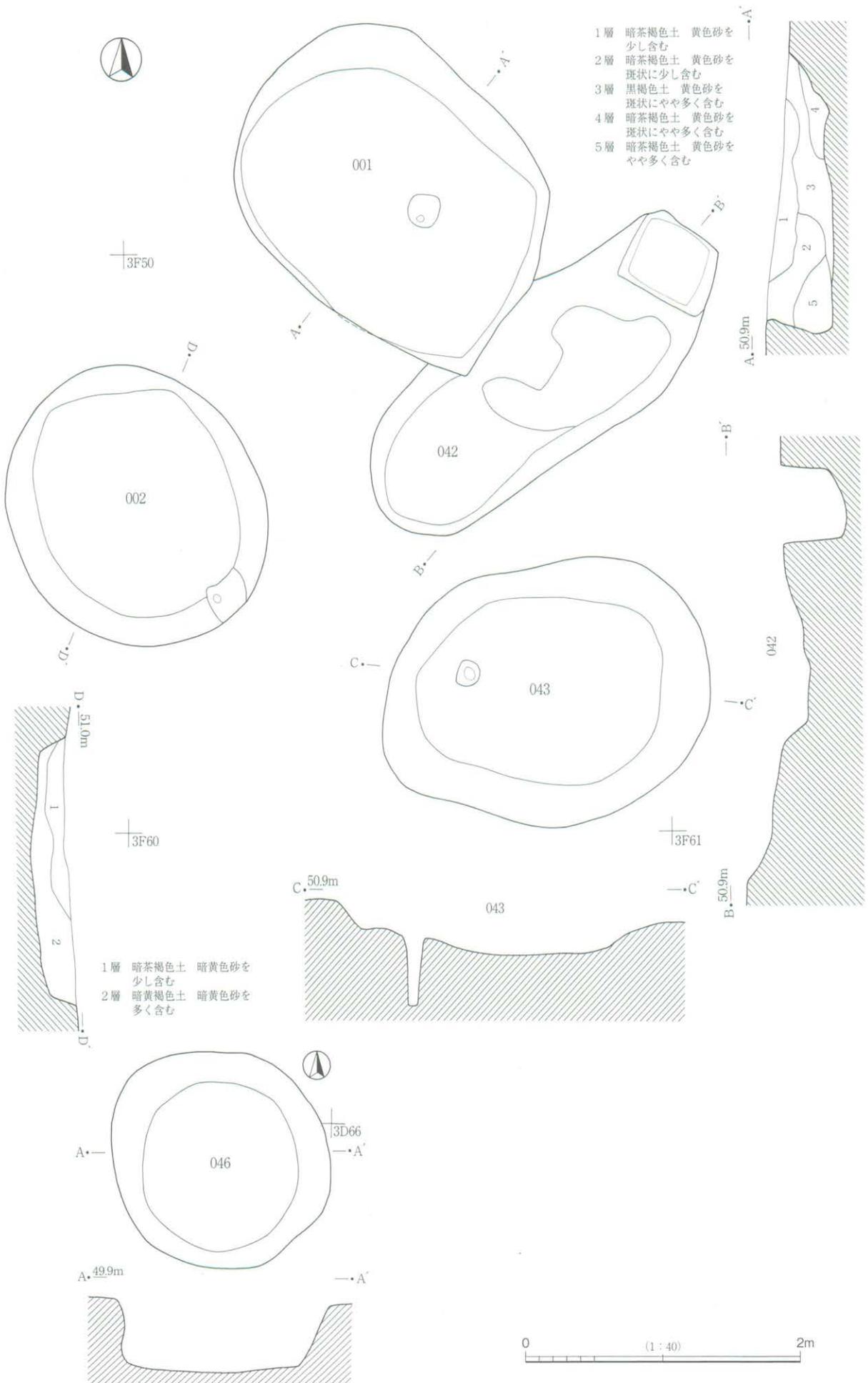


1層 暗茶褐色土 暗黄色砂を少し含む
2層 暗茶褐色土 黄色砂を斑状に多く含む

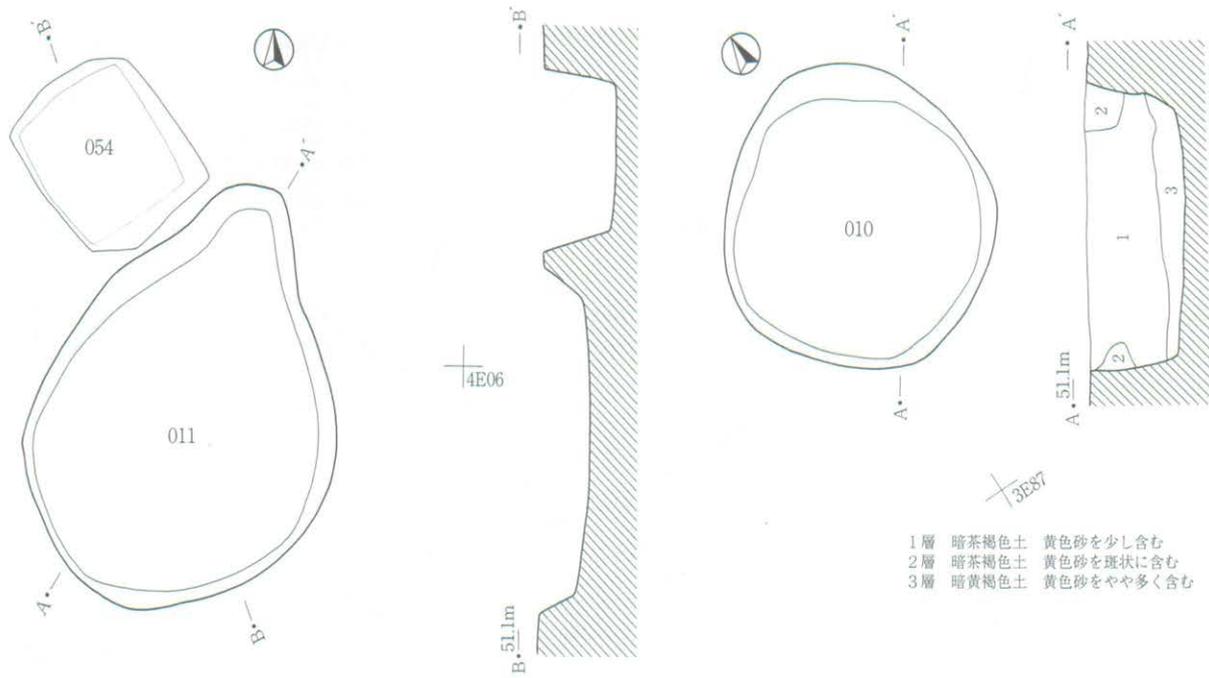


1層 黒褐色土 黄色砂粒を少し含む
2層 黒褐色土 黄色砂粒を多く含む
3層 黒色土 黄色砂粒を多く含む

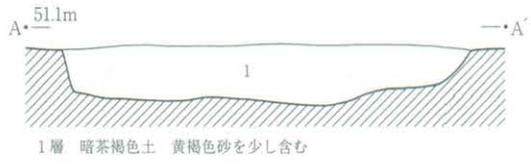
第8図 小竪穴(1)



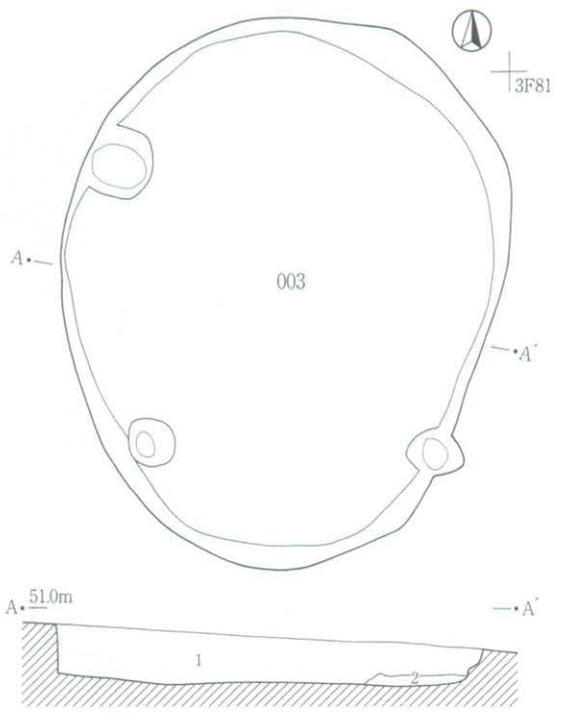
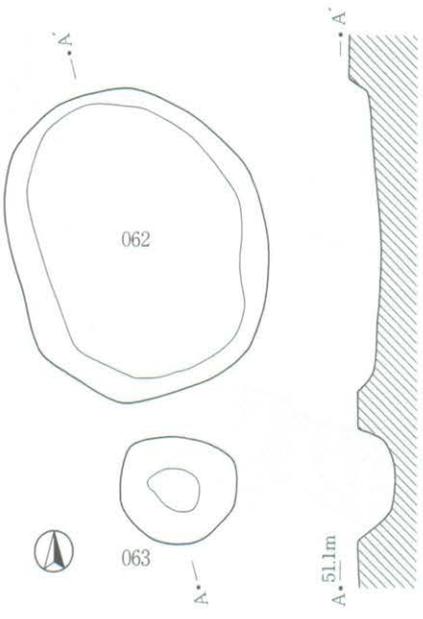
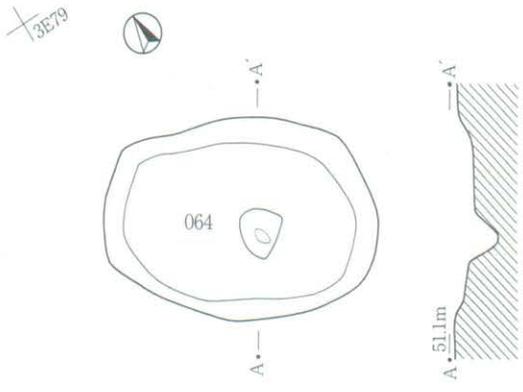
第9図 小竪穴(2)



- 1層 暗茶褐色土 黄色砂を少し含む
- 2層 暗茶褐色土 黄色砂を斑状に含む
- 3層 暗黄褐色土 黄色砂をやや多く含む



1層 暗茶褐色土 黄褐色砂を少し含む



- 1層 暗茶褐色土 暗黄色砂を斑状に多く含む
- 2層 暗黄色砂 暗黄色砂を多く含む



第10図 小竪穴 (3)

少量の遺物が出土した。

062小竪穴（第10図、図版6）

中央から南寄りの3E88・98に位置する。南側に063小竪穴が隣接する。形状は楕円形で、長軸1.54m、短軸1.32m、深さ0.15mであった。底面はほぼ平坦である。壁面は、直線状に斜めに立ち上がる。

少量の遺物が出土した。

063小竪穴（第10図、図版6）

中央から南寄りの3E98に位置する。北側に062小竪穴が隣接する。形状は楕円形で、長軸0.61m、短軸0.54m、深さ0.19mであった。底面の中央はややくぼむ。壁面は、直線状に斜めに立ち上がる。

少量の遺物が出土した。

064小竪穴（第10図）

ほぼ中央の3E79に位置する。南側に中世の021溝が西北から東南へと伸びている。形状は楕円形で、長軸が1.44m、短軸1.02m、深さ0.09mであった。底面は、中央がややくぼみ、小ピットがあった。壁面は、直線状に斜めに立ち上がる。

少量の遺物が出土した。

003小竪穴（第10図、図版7）

東南寄りの3F70・80に位置する。東北側にSK001土坑があり、南側に中世の021溝が西北から東南へと伸びている。形状は楕円形で、長軸が2.81m、短軸2.37m、深さ0.28mであった。底面は平坦である。壁面は、直線状にほぼ垂直に立ち上がる。

少量の遺物が出土した。

046小竪穴（第9図、図版7）

調査範囲中央の遺構集中地点から西側約40mの地点で、単独で検出された。3D65に位置し、周辺から遺構は検出されなかった。形状は円形で、長軸が1.68m、短軸1.53m、深さ0.51mであった。底面はほぼ平坦である。壁面東側は直線状に斜めに立ち上がり、西側はやや湾曲していた。

少量の遺物が出土した。

042土坑（第9図、図版7）

東北寄りの3F50・51に位置する。西北側に001小竪穴が接し、西側に002小竪穴、南側に043土坑が位置している。形状は細長い楕円形で、長軸が2.99m、短軸1.16m、深さ0.36mであった。底面にはやや凹凸があり、東北隅には方形のピットがあった。壁面は、斜めに立ち上がる。

少量の遺物が出土した。

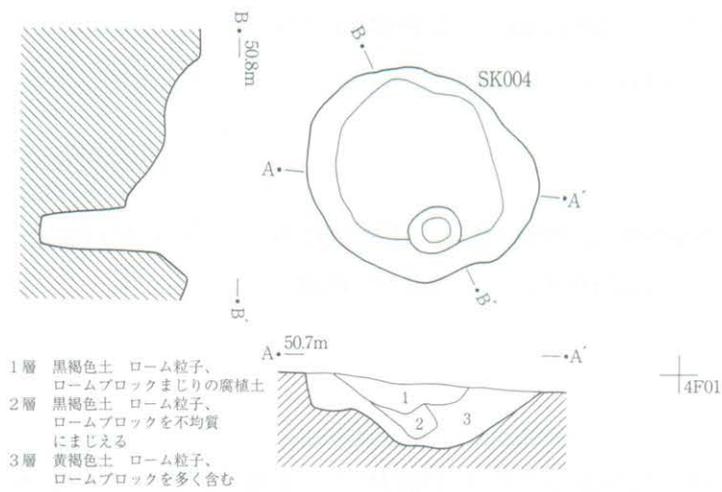
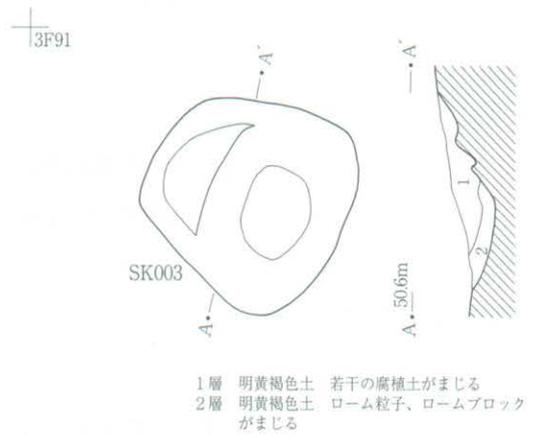
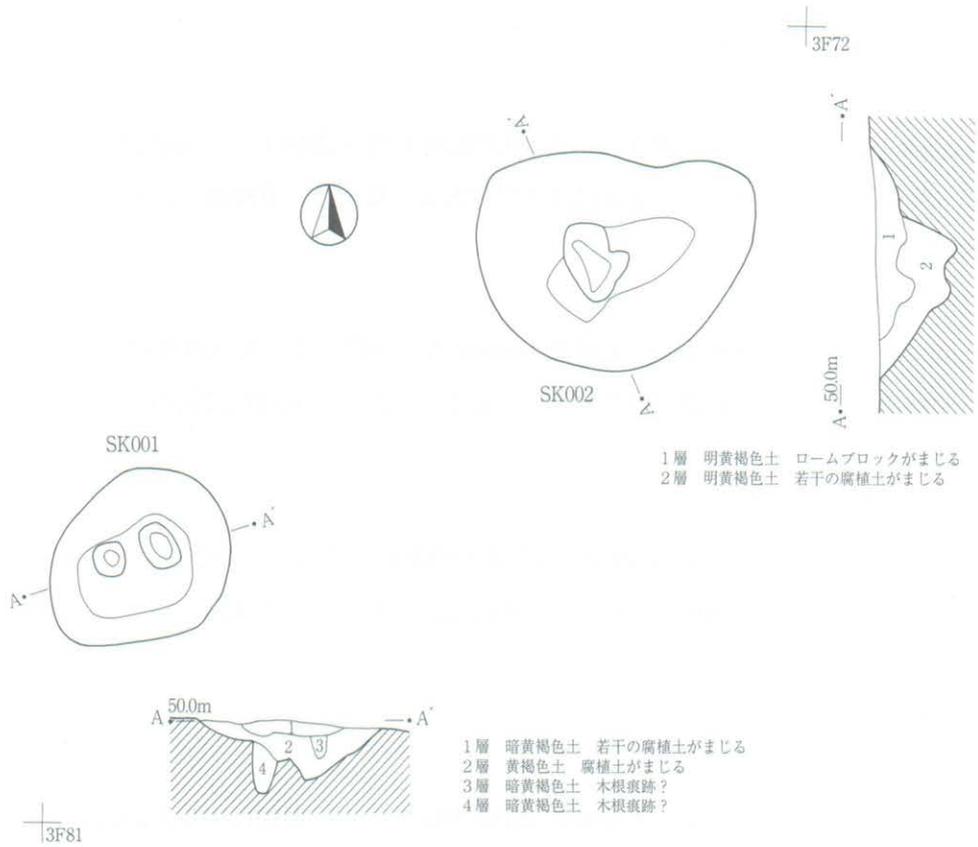
043土坑（第9図、図版8）

東北寄りの3F50・51に位置する。北側に002小竪穴、001小竪穴、042土坑がある。形状は楕円形で、長軸が2.40m、短軸1.89m、深さ0.30mであった。底面は中央がややくぼみ、西側に小ピットがあった。壁面は、斜めに立ち上がる。

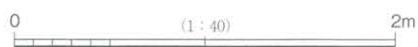
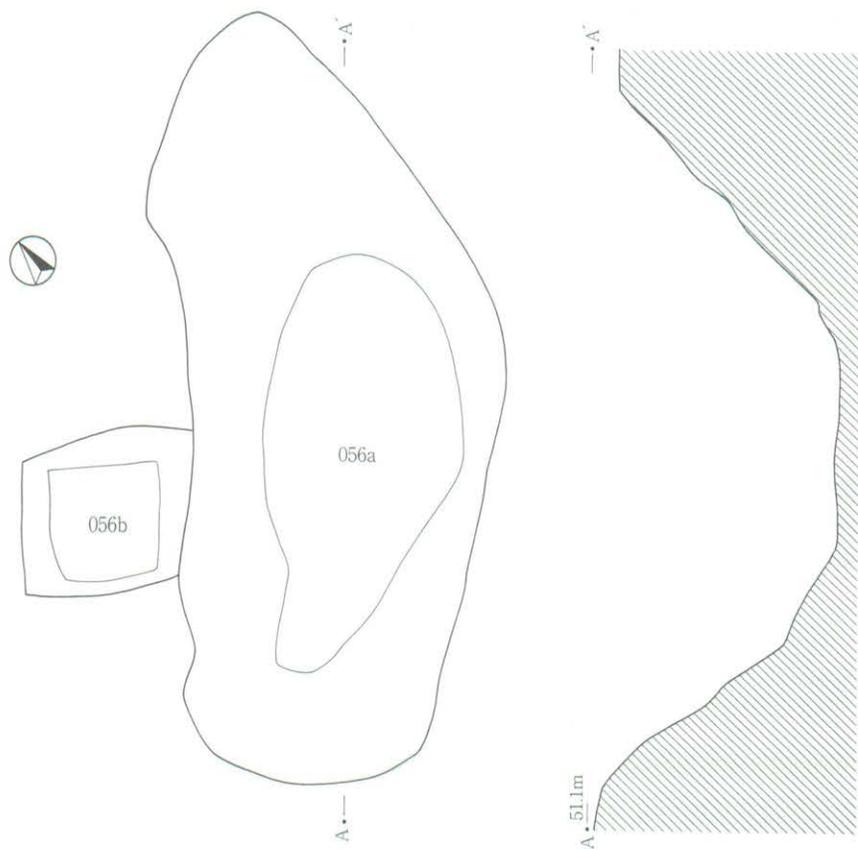
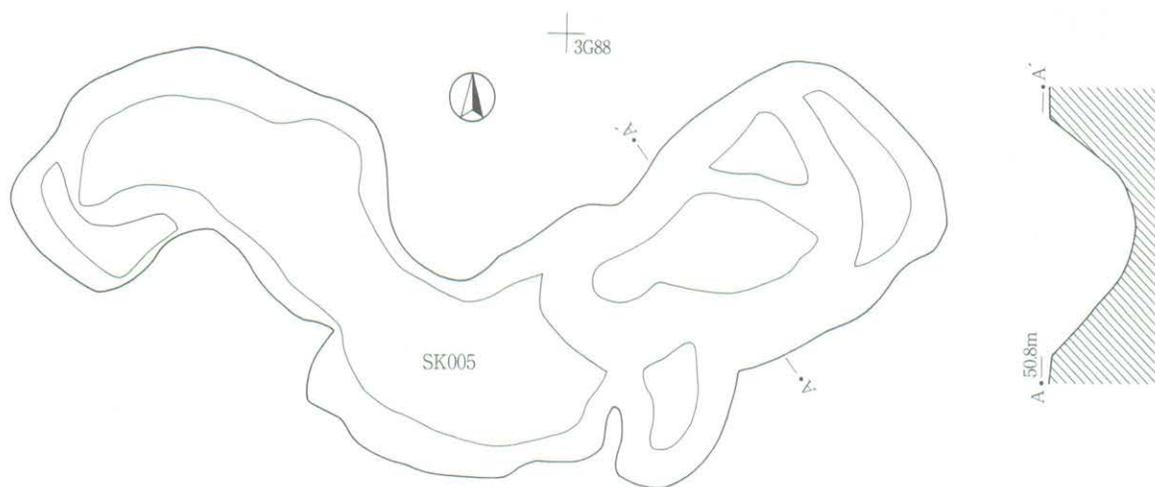
少量の遺物が出土した。

SK002土坑（第11図、図版8）

東寄りの3F71に位置する。西南側にSK001土坑がある。形状は楕円形で、長軸が1.50m、短軸1.18m、深さ0.43mであった。底面は凹凸であった。壁面は明確でなく、斜めに立ち上がる。

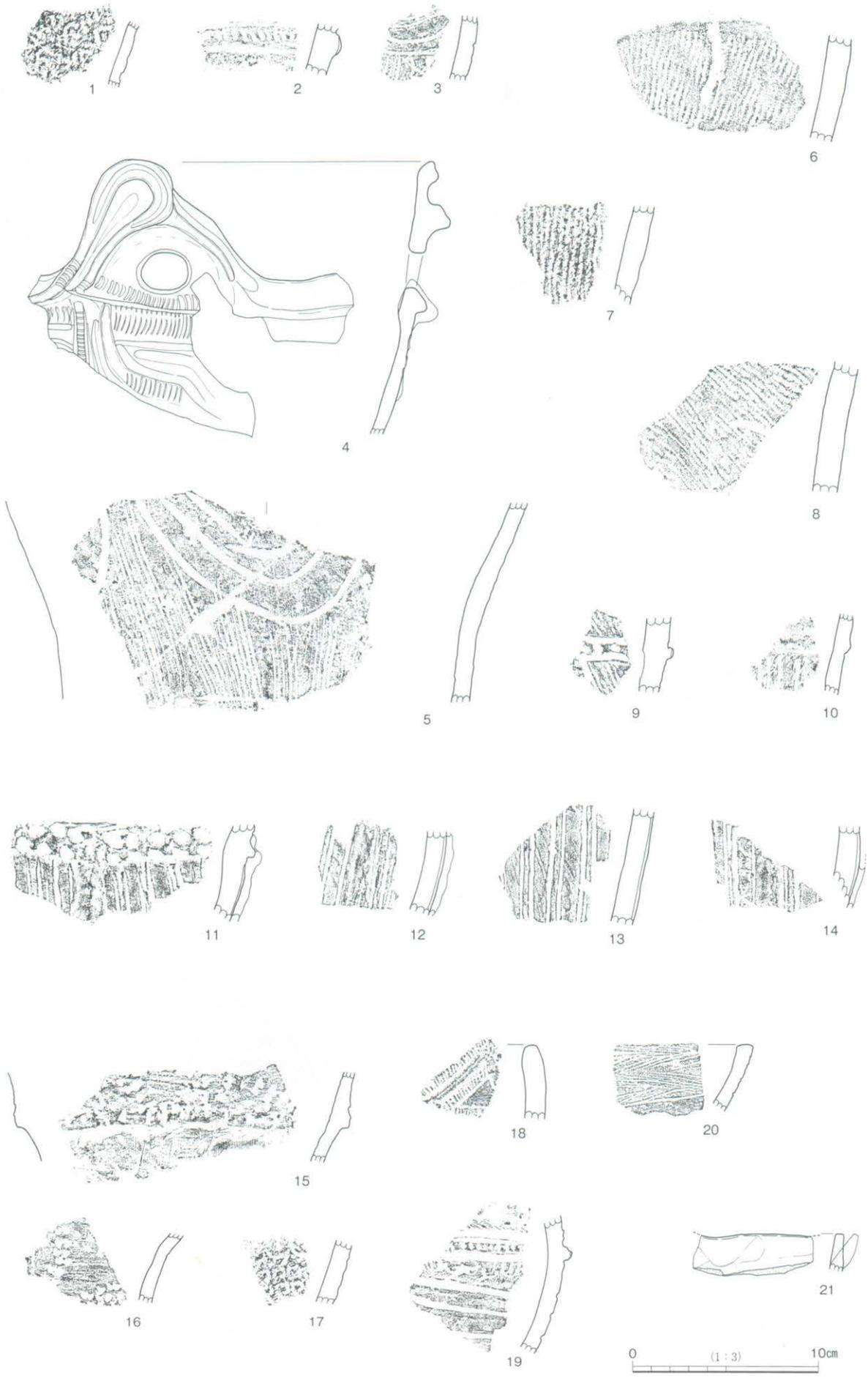


第11図 土坑



3E298

第12図 土坑・陥穴



第13图 土器

少量の遺物が出土した。

SK001土坑（第11図、図版8）

東寄りの3F71に位置する。東北側にSK002土坑があり、西南側に003小竪穴がある。形状は楕円形で、長軸が1.03m、短軸0.86m、深さ0.37mであった。底面には小ピットが2基あった。壁面は明確でなく、斜めに立ち上がる。

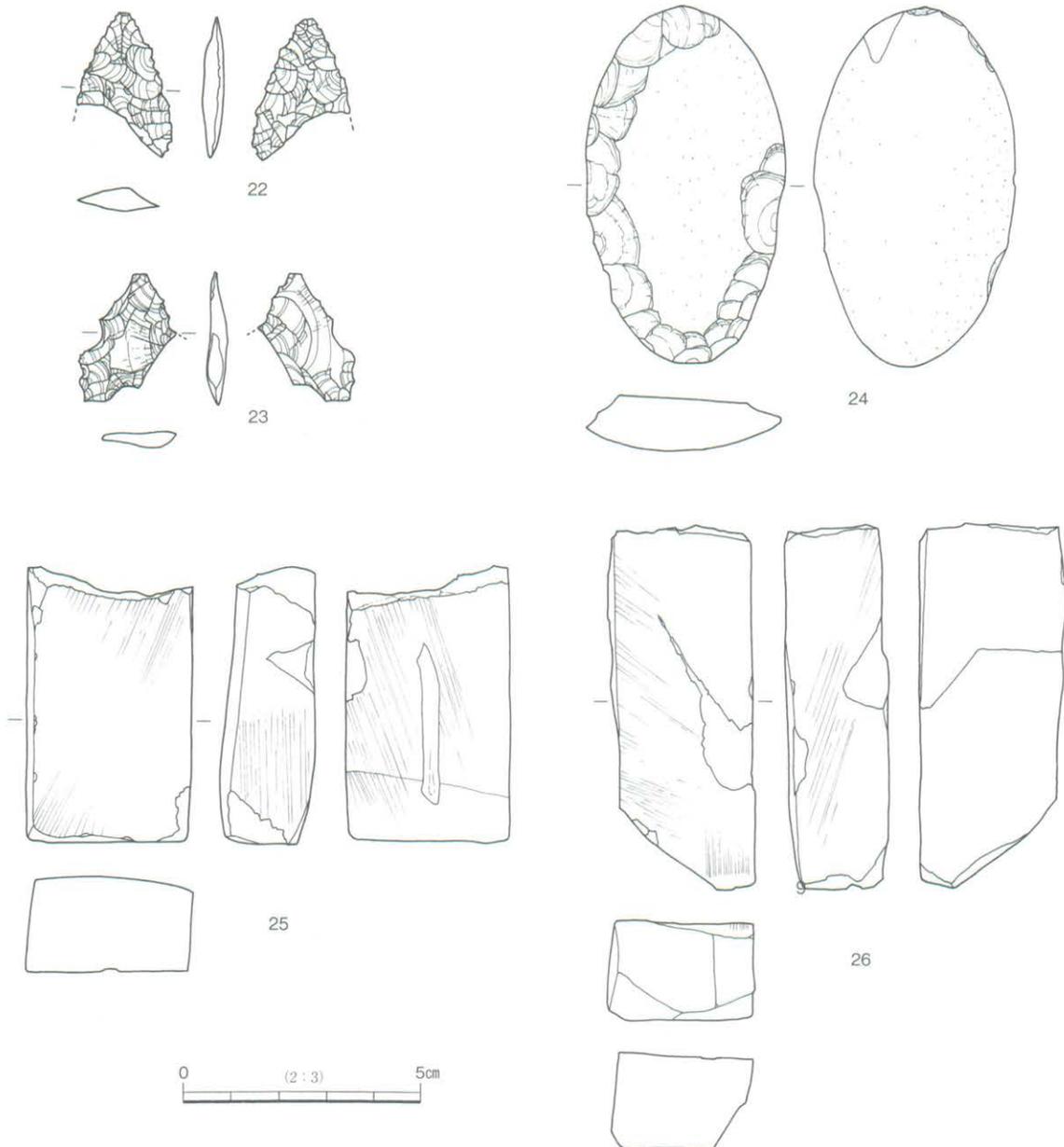
少量の遺物が出土した。

SK003土坑（第11図、図版9）

東南寄りの3F91に位置する。西北側に003小竪穴があり、南側に中世の021溝が西北から東南へと伸びている。形状は台形で、長軸が1.05m、短軸1.05mで西側1辺が短い。深さ0.19mであった。底面は凹凸であった。壁面は明確でなく、斜めに立ち上がる。

SK004土坑（第11図、図版9）

東南寄りの3F90に位置する。北側に中世の021溝が西北から東南へと伸びている。形状は円形で、長軸



第14図 石器

が1.22m、短軸1.07m、深さ0.35mであった。底面はやや平坦で、南側に深い小ピットがあった。壁面は明確でなく、斜めに立ち上がる。

少量の遺物が出土した。

SK005土坑（第12図）

調査範囲中央の遺構集中地点から東側約60mの地点で、単独で検出された。3G87・88に位置し、周辺から遺構は検出されなかった。覆土中に縄文時代中期の土器片が混入し、覆土の状況から縄文時代の所産と判断され、土坑として記録された。形状は不整形で、長軸が4.90m、短軸0.98m、深さ0.46mであった。底面には凹凸がみられる。壁面は明確でなく、斜めに立ち上がる。

少量の遺物が出土した。

056a陥穴（第12図、図版9）

中央やや南寄りの3E78・87・88に位置する。西側に中世の056b土坑、北側に中世の021溝が接している。形状は楕円形で、長軸が3.88m、短軸1.68m、深さ1.21mであった。底面はやや平坦である。壁面は直線状に斜めに立ち上がる。

少量の遺物が出土した。

2 遺物

遺構にともなって縄文土器と石器・礫が出土した。特定の遺構から大量に遺物が出土した例はなく、多くの遺構からそれぞれ少量の遺物が出土した。

縄文土器（第13図、第3表、図版20）

縄文土器はおもに縄文時代中期の破片が多い。1は046小竪穴から出土し、縄文のループ文が施されて

第3表 番後台遺跡出土土器

挿図番号	実測番号	出土遺構	遺物番号	土器形式	時期
第13図	1	9 046	046-001	黒浜	縄文前期
第13図	2	5 064	064-004	勝坂	縄文中期
第13図	3	12	3E76-001	阿玉台Ⅳ	縄文中期
第13図	4	21 003	003-002	阿玉台	縄文中期
第13図	5	20 010	010-003	加曾利E	縄文中期
第13図	6	3 009	009-003		
第13図	7	11 055	055-009		
第13図	8	10 009	009-005		
第13図	9	4 055	055-021	加曾利E	縄文中期
第13図	10	1 SM001	SM001-004	加曾利EⅡ	縄文中期
第13図	11	13 041	041-004・010	曾利	縄文中期末葉
第13図	12	15 041	041-002	曾利	縄文中期末葉
第13図	13	14 041	041-005	曾利	縄文中期末葉
第13図	14	16 041	041-003	曾利	縄文中期末葉
第13図	15	18 059	059-011	茅山	縄文早期後半
第13図	16	19 059	059-011	茅山	縄文早期後半
第13図	17	1 059	059-012	関山	縄文前期
第13図	18	8 059	059-011	勝坂	縄文中期
第13図	19	2 059	059-010	加曾利B	縄文後期
第13図	20	7 059	059-011	加曾利B	縄文後期
第13図	21	22 059	059-012	片口鉢	中世

第4表 番後台遺跡出土石器

挿図番号	実測番号	出土遺構	遺物番号	器種	石材	縦(mm)	横(mm)	厚さ(mm)	重量(g)
第14図	22	1 003	003-001	石鏃	黒曜石	28.9	20.4	4.1	1.4
第14図	23	2 003	003-001	石鏃	黒曜石	26.2	22.1	3.5	1.2
第14図	24	1 SM001	SM001-002	打製石斧	砂岩	70.8	41.8	10.5	43.0
第14図	25	4 061	061-003	砥石	砂岩	55.0	35.4	20.6	69.1
第14図	26	5 020	020-001	砥石	砂岩	72.9	30.6	21.1	77.3

いる。黒浜式の土器片である。2は064小堅穴から出土し、突帯に半截竹管による刺突文がめぐらされている。勝坂式の土器片である。3は3E76グリッドから出土し、半截竹管による平行沈線が曲線状に描かれている。阿玉台IV式の土器片である。4は003小堅穴から出土した口縁部の土器片で、胎土に細かい長石粒、雲母片を含んでいる。渦巻き状の把手が付され、竹管によると思われる細かい爪形文が施されている。阿玉台式の土器片である。5は010小堅穴から出土し、胎土に大粒の長石粒、細かい雲母片を含む。竹管による曲線状の沈線文、半截竹管による直線状の平行沈線が施される。加曽利E式の土器片である。

9は055小堅穴から出土し、突帯に刺突文が施されている。加曽利E式の土器片である。10はSM001方形周溝状遺構から出土し、突帯の下部に半截竹管による平行沈線が直線代状に施される。加曽利EII式の土器片である。11～14は041小堅穴から出土し、同一個体と思われる。半截竹管による縦位の平行沈線が直線状に施され、上下2列の刺突文の施された横位の突帯と、施文のない縦位の突帯がある。曾利式の土器片である。

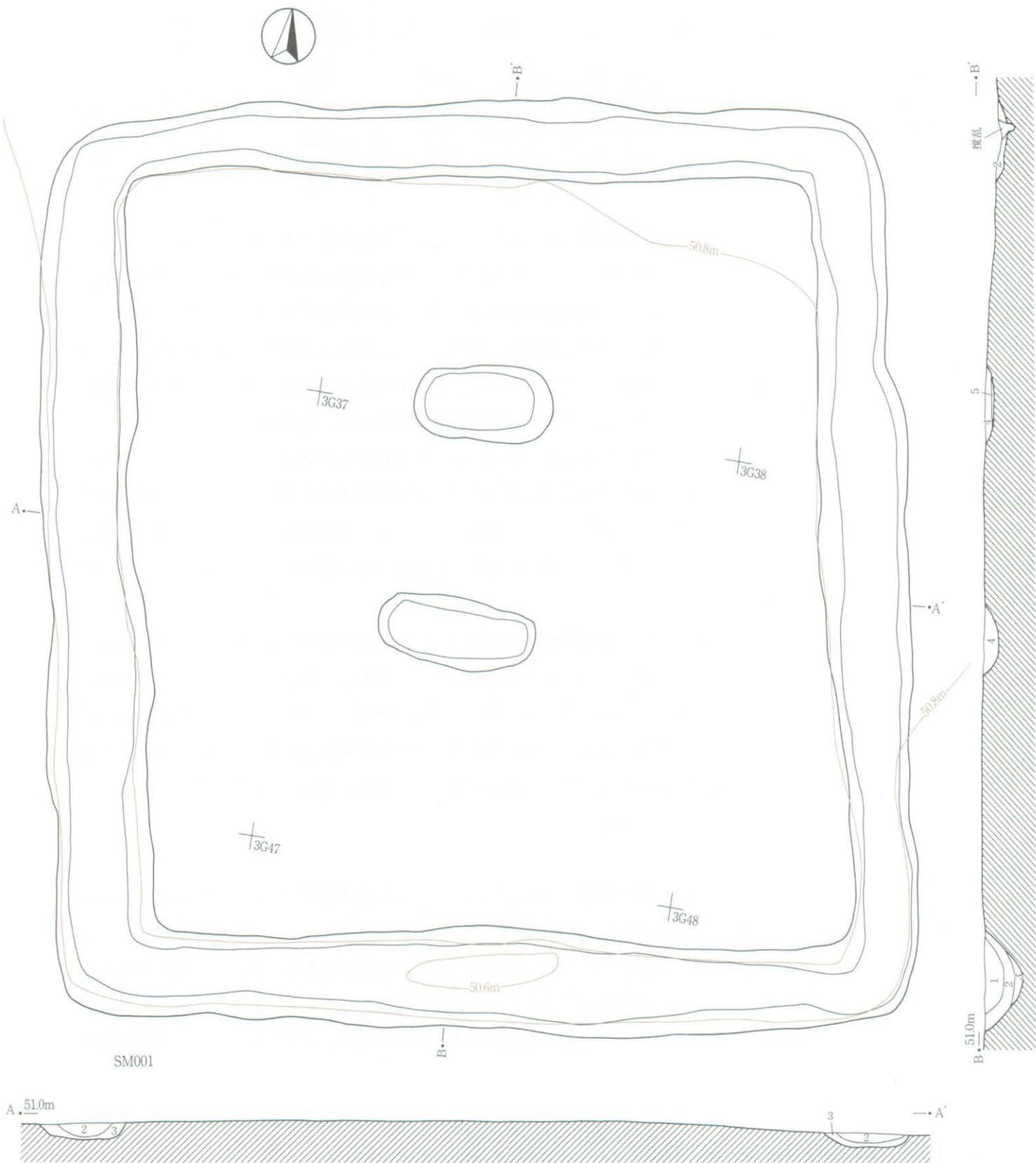
15～20は中世の059溝から出土した。15には横位の突帯から上部に、細い竹管による刺突文が施される。16にも細い竹管による刺突文が施される。15と16は茅山式の土器片である。17には縄文のループ文が施される。関山式の土器片である。18には半截竹管による細かい平行沈線が、三角形の口縁部に施される。勝坂式の土器片である。19には刺突文の施された横位の突帯の上下に半截竹管による半円状の刺突文が施され、下部に横位の平行沈線文が施される。20は口縁の土器片で、細かい沈線文が斜位に交差するように施されている。19と20は加曽利B式である。

石器（第14図、第4表、図版21）

縄文土器と同様に、少量の石器・礫が遺構から出土した。そのうち縄文時代の石器と判断されるものを図化した。22と23は、003小堅穴から出土した黒曜石製の無茎石鏃である。いずれも基部の一端を欠いていた。22は底辺の両端が明瞭に突出するタイプの石鏃で、作り方も精巧である。23は、両端がさほど突出していない。24はSM001方形周溝状遺構から出土した砂岩製の打製石斧である。扁平な楕円形の河原石の縁辺を剥離して、刃部を作出している。正面の縁辺にだけ剥離痕が残り、それ以外は自然の礫面が残置していた。

第3節 古墳時代

番後台遺跡で検出された遺構は縄文時代と中世のものが主体で、おもに調査範囲中央に集中して検出された。遺構の集中していた調査範囲中央から東側へ約60m、小さな谷を挟んだ台地上で方形周溝状遺構が1基検出された。この遺構にともなって縄文土器や石器が出土している。ほかに年代の比定につながる有力な遺物は出土していないが、方形周溝状遺構の年代は古墳時代としておく。



- 1層 黒色土 若干のローム粒まじりの腐植土、粘性あり
- 2層 黒褐色土 ローム粒まじりの腐植土、粘性あり
- 3層 黄褐色土 ローム粒、ロームブロックまじりの腐植土、粘性あり
- 4層 主体部 黒褐色土 ローム粒まじりの腐植土
- 5層 主体部 暗褐色土 ローム粒まじりの腐植土、粘性強い

0 (1:50) 2m

第15図 方形周溝状遺構

SM001方形周溝状遺構（第15図、第2表、図版10）

調査範囲の東側、3G26～28・36～38・46～48に位置する。北辺7.97m、東辺8.23m、南辺8.11m、西辺8.04mで、やや東南の角がのびる方形状の溝がめぐる。南北軸の方向は351度で、座標北よりも若干西を向いていた。周溝の幅は0.6m～1.0mで、深さは0.15m～0.36mで、北辺の溝は浅く、南辺の溝が深かった。

方形周溝内の中央やや北側で、東西を長軸とし、南北に並列して設けられた2基の主体部が検出された。いずれも長方形の土坑で、北側は長軸1.31m、短軸0.69m、深さ0.08m、主軸の方位は83度。南側は長軸1.50m、短軸0.65m、深さ0.14m、主軸の方位は89度であった。

少量の遺物が周溝の覆土および周辺から出土した。

第4節 中世

調査範囲中央に縄文時代と中世の遺構が集中していた。中世の遺構は大半が土坑で、共伴する遺物はほとんどなかった。縄文時代の小堅穴や土坑と異なる規模や形状を呈しており、これらの土坑の時期を中世と判断した。

1 遺構（第7・16図、第2表）

中世の遺構は、土坑37基と溝8条であった。土坑は比較的小規模で、方形もしくは長方形の形状をしていた。分布状態は、座標北の方向からやや東に傾いた角度で、数基の土坑がまとまって並んでいた。これらの土坑は、規則正しく長方形に並ぶことはなく、また柱穴とするには平面的に規模が大きすぎることから、建物跡の柱穴とみなすのは困難である。

溝に伴う遺物は少なく、溝の年代の比定が困難であった。中世の土坑に混在していたので土坑と同時期としておく。

052土坑、051土坑、050土坑（第16図）

北寄りの3E19・29に位置し、052土坑と051土坑は接している。形状は、052土坑がやや方形、051土坑が五角形、050土坑が方形であった。規模はそれぞれ1辺が約1mで、深さは約0.4mであった。底面はほぼ平坦であった。

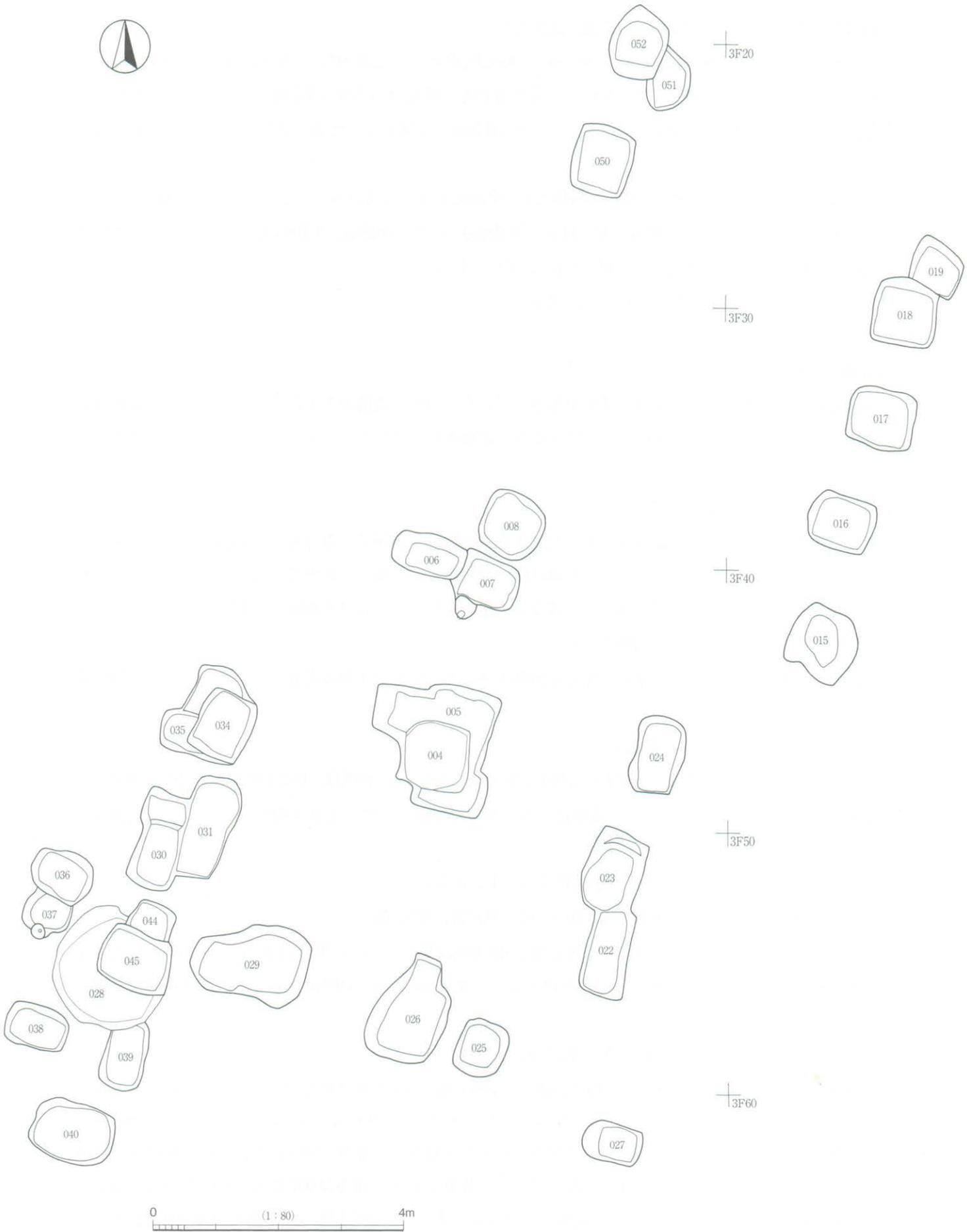
050土坑から少量の遺物が出土したが図化できるものはない。

019土坑、018土坑、017土坑、016土坑、015土坑（第17図、図版10）

西北寄りの3F20・30・40に位置し、019土坑と018土坑は接している。形状は方形だが、015土坑だけがやや不整形だった。規模はそれぞれ1辺が約1mで、深さは0.13m～0.68mであった。底面はほぼ平坦であった。

006土坑、007土坑、008土坑、005土坑（第18図、図版4・11）

中央やや北寄りの3E38・39・48・49に位置し、006土坑と007土坑は接している。形状は、006土坑と007土坑が長方形、008土坑が方形、005土坑は不整形であった。規模は、006土坑と007土坑の長軸が約1m、短軸が約0.7mであった。方形の008土坑の1辺は約1mで、不整形の005土坑の長軸と短軸は、約1.9mであった。005土坑は数基の土坑が重複していた可能性がある。深さは007土坑と008土坑が約0.3mで、006土坑と005土坑が約0.5mであった。底面はほぼ平坦であった。007土坑の東南隅には深さ0.72mの小ピットがあった。

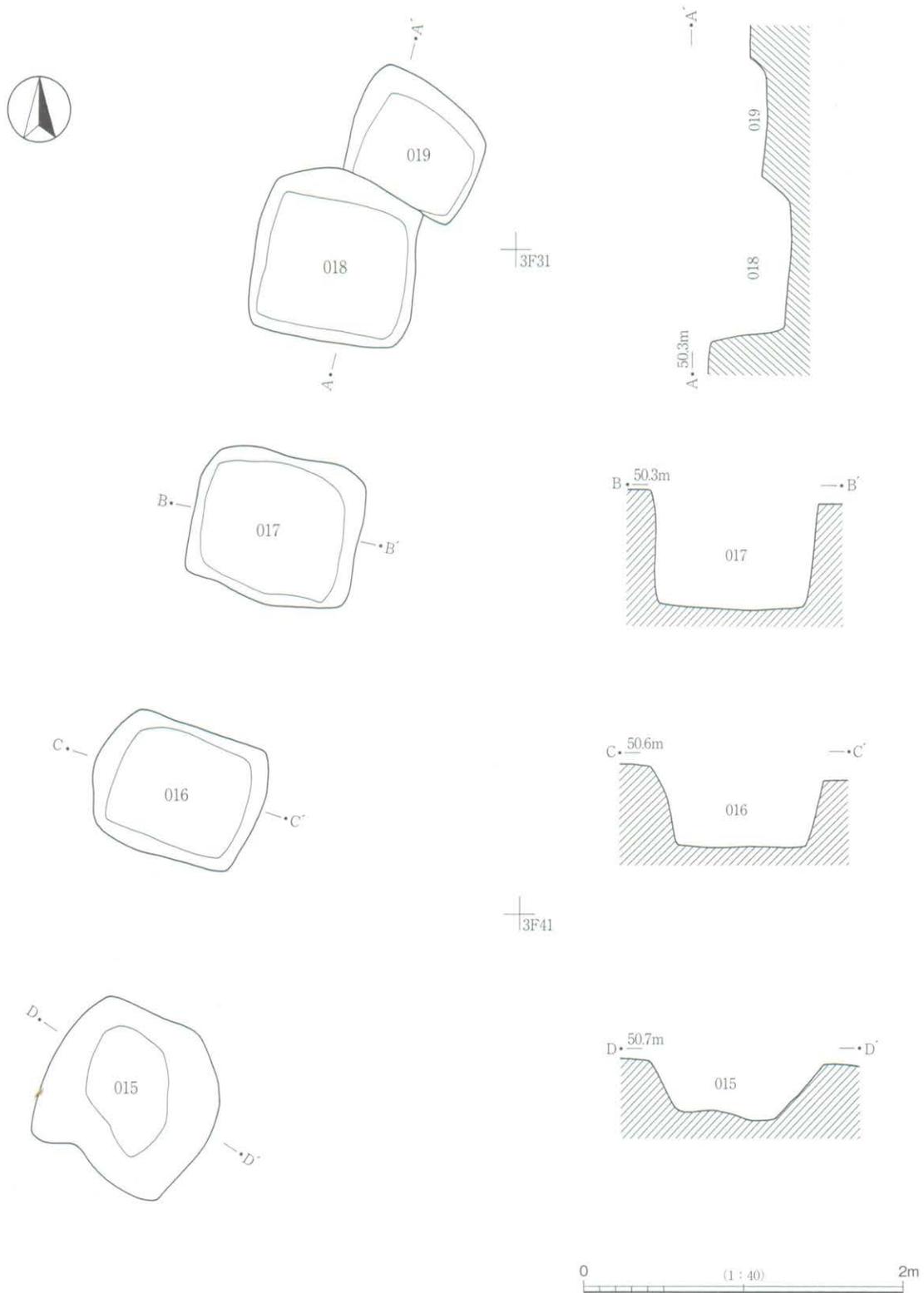


第16図 中世の土坑

005土坑から少量の遺物が出土したが図化できるものはない。

035土坑、034土坑、030土坑、031土坑（第19図、図版11）

中央やや西寄りの3E47・48・57に位置し、035土坑と034土坑、030土坑と031土坑が接している。形状は長方形で、035土坑の短軸が0.63m、034土坑の長軸が1.03m、短軸が0.90m、030土坑の長軸が1.49m、短軸が0.78m、031土坑の長軸が1.57m、短軸が0.84mであった。深さは035土坑が0.23m、034土坑が0.54m、



第17図 土坑（1）

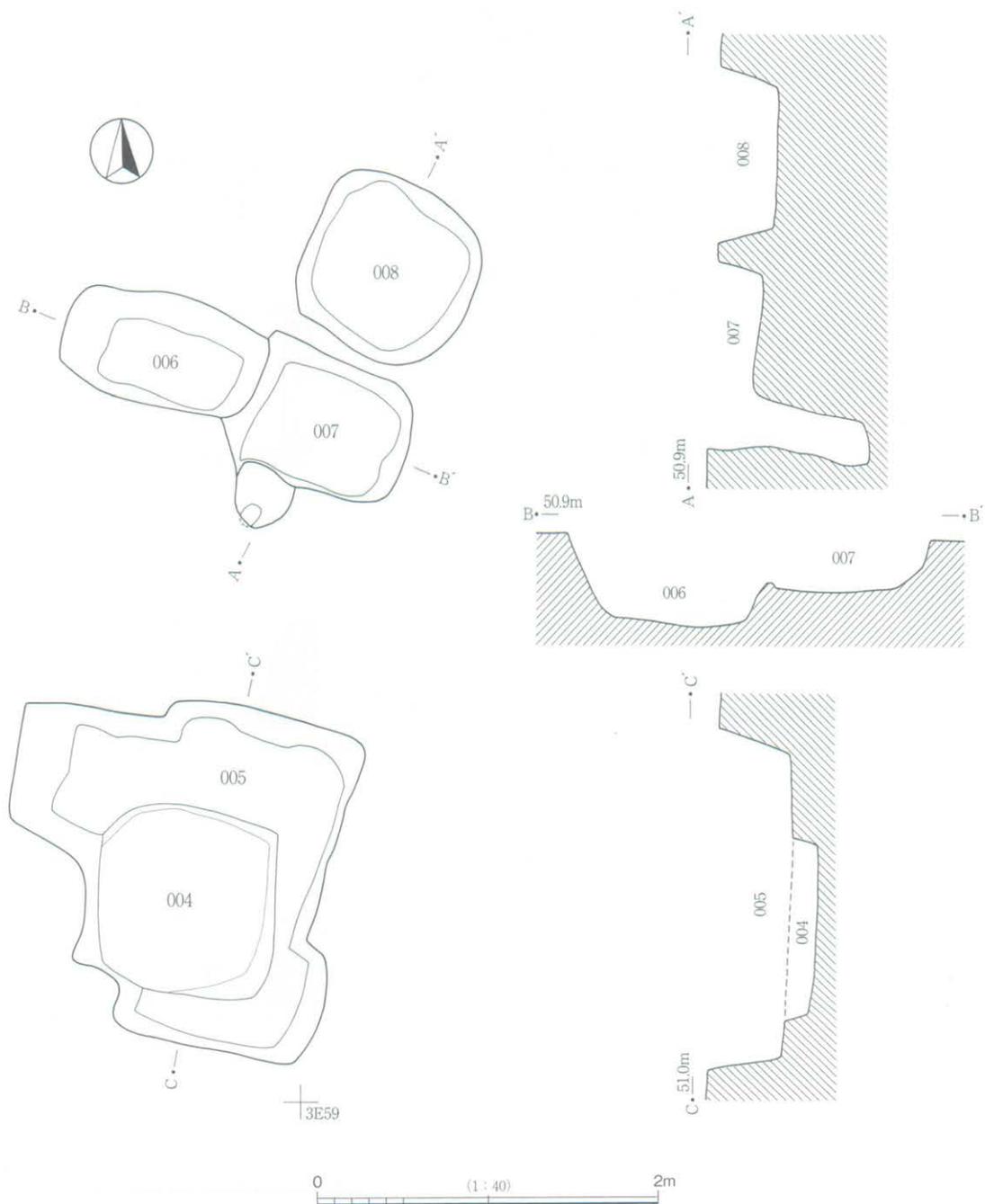
030土坑が0.34m、031土坑が0.50mであった。底面はほぼ平坦だったが、030土坑の底面は北側に浅い段があった。

034土坑と031土坑から少量の遺物が出土したが図化できるものはない。

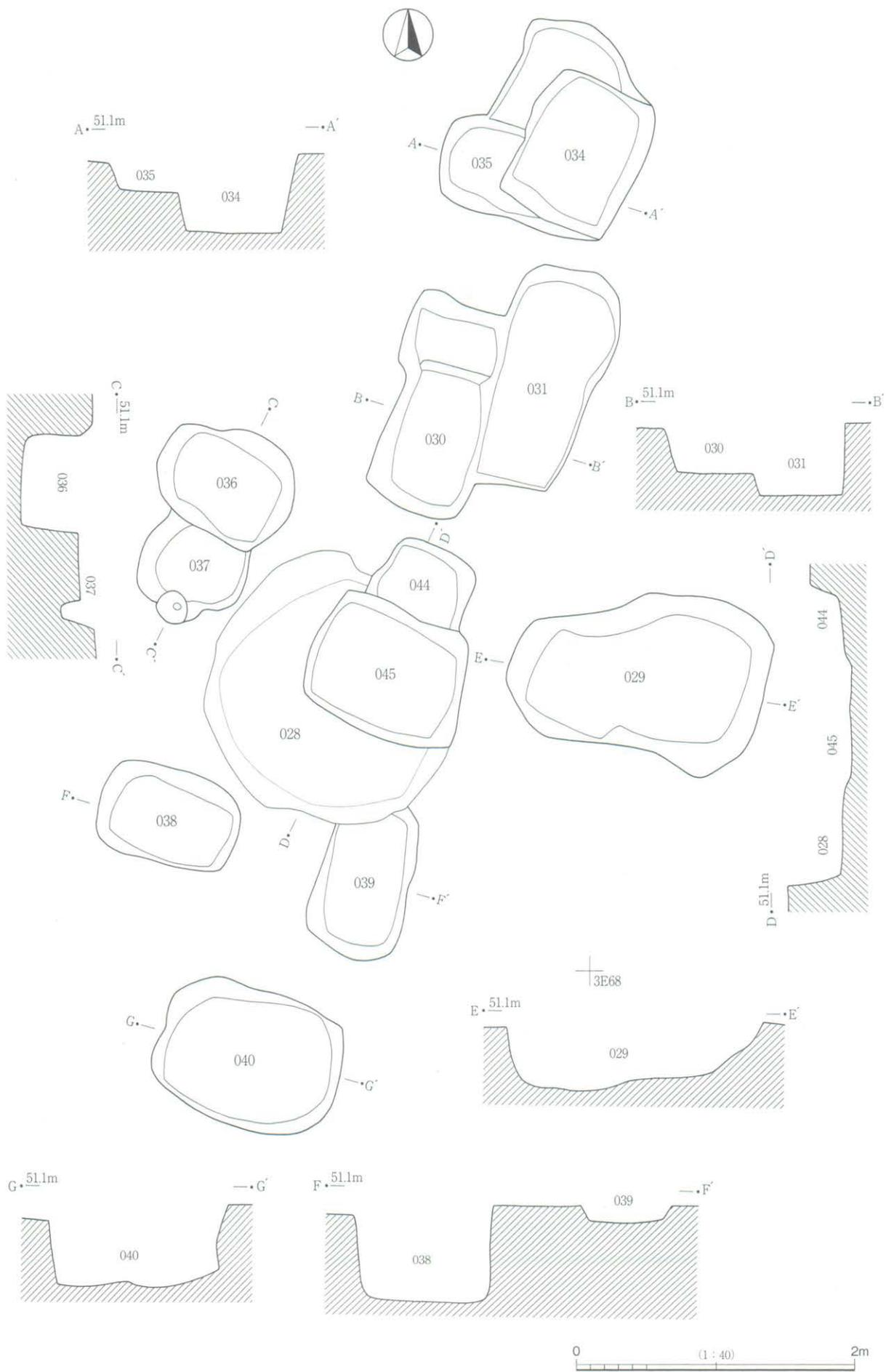
036土坑、037土坑、044土坑、045土坑（第19図、図版11）

中央やや西寄りの3E57に位置し、036土坑と037土坑が接していた。044土坑と045土坑が接し、さらに028小竪穴と重複している。036土坑は長方形で長軸1.03m、短軸0.76m、深さ0.53m。037土坑は円形で直径約0.75m、深さ0.13m。044土坑は長方形で長軸0.68m、短軸0.51m、深さ0.27m。045土坑は長方形で長軸1.15m、短軸0.88m、深さ0.37mであった。底面はほぼ平坦だったが、037土坑の南端に小ピットがあった。

036土坑、044土坑、045土坑から少量の遺物が出土したが図化できるものはない。



第18図 土坑（2）

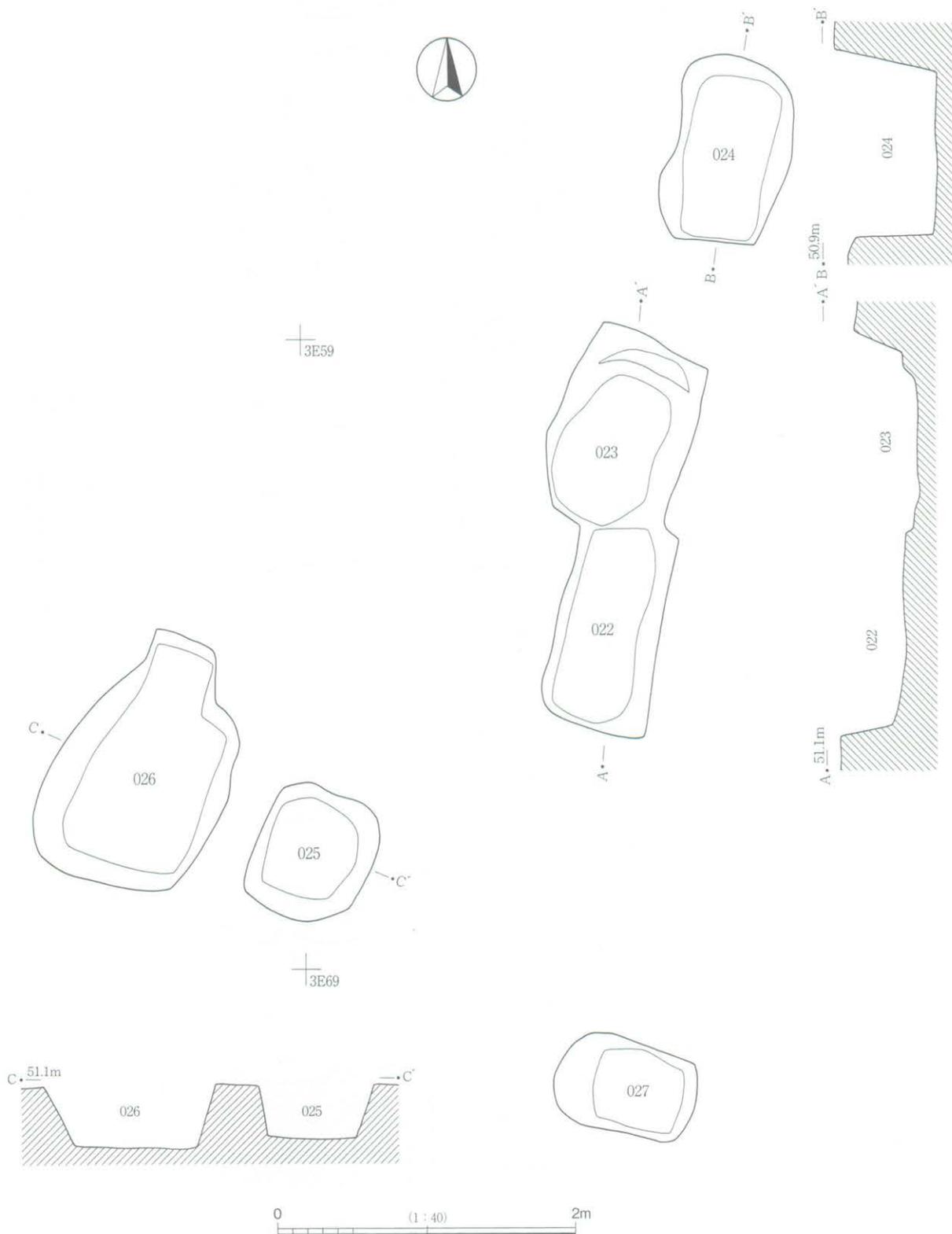


第19図 土坑 (3)

038土坑、039土坑、040土坑（第19図、図版11）

中央やや西寄りの3E57・67に位置し、039土坑は028小堅穴と重複している。形状は長方形で、038土坑は長軸1.04m、短軸0.65m、深さ0.68m。039土坑は長軸0.98m、短軸0.69m、深さ0.13m。040土坑は長軸1.37m、短軸0.98m、深さ0.55mであった。底面はほぼ平坦だった。

040土坑から少量の遺物が出土したが図化できるものはない。



第20図 土坑（4）

029土坑（第19図、図版11）

中央やや西寄りの3E57・58に位置する。形状は長方形で、長軸1.89m、短軸1.24m、深さ0.45mであった。底面の東側は、やや浅い面が形成されていた。

少量の遺物が出土したが図化できるものはない。

024土坑、023土坑、022土坑（第20図）

中央の3E49・59に位置する。023土坑と022土坑は接している。形状は長方形で、024土坑の長軸は1.19m、短軸0.75m、深さは0.66mであった。023土坑は、長軸1.29m、短軸0.90m、深さ0.46mであった。022土坑は、長軸1.39m、短軸0.72m、深さ0.42mであった。底面はほぼ平坦だった。

023土坑から少量の遺物が出土したが図化できるものはない。

026土坑、025土坑、027土坑（第20図）

中央の3E58・59・69に位置する。026土坑の形状は不整形で、北側が少し突出する。長軸1.67m、短軸1.15m、深さ0.45mであった。025土坑の形状は方形で、1辺が約0.8m、深さ0.33mであった。027土坑の形状は長方形で、長軸0.96m、短軸0.61m、深さ0.27mであった。底面はほぼ平坦だった。

026土坑から少量の遺物が出土したが図化できるものはない。

014土坑、013土坑、012土坑（第21図、図版11）

西南寄りの3E74・84に位置し、調査範囲中央の遺構の集中する範囲からやや外れている。形状は014土坑と013土坑が方形、012土坑が長方形であった。014土坑の1辺は約1.10mで、深さは0.23m、013土坑の1辺は約1.2mで、深さは0.26mであった。012土坑は長軸1.22m、短軸0.82m、深さは0.19mであった。底面はほぼ平坦だった。

054土坑（第10図）

西南寄りの3E95に位置し、南側に011小竪穴がある。形状は方形に近い長方形で、長軸0.90m、短軸0.78m、深さは0.39mであった。底面はほぼ平坦だった。

056b土坑（第12図）

中央やや南寄りの3E77・87に位置している。056a陥穴と接している。形状はほぼ方形で、1辺約0.85m、深さ0.22mであった。底面はほぼ平坦だった。

047土坑（第21図）

遺構の集中する調査範囲中央から西側約50mの地点で単独で検出され、3D24・34に位置する。形状は楕円形で、長軸1.74m、短軸1.17m、深さ0.68mであった。底面はほぼ平坦だった。

少量の遺物が出土したが図化できるものはない。

049土坑（第21図、図版12）

遺構の集中する調査範囲中央から西側約60mの地点で検出され、3D52に位置する。西側で048溝が、東北から西南へと伸びている。形状は長方形で、長軸1.00m、短軸0.74m、深さ0.72mであった。底面はほぼ平坦だった。

021溝（第22図、図版12）

調査範囲中央の遺構の集中する範囲の南側を、西北から東南へほぼ直線状にのびていた。長さは約24m、幅0.6m～0.8m、深さは約0.15mであった。

少量の遺物が出土したが図化できるものはない。

020溝（第22図、図版12）

調査範囲中央の遺構の集中する範囲の南端を、西から東へやや屈曲してのびていた。長さは約11m、幅0.8m～2.0m、深さは約0.2mであった。

少量の遺物が出土したが図化できるものはない。

061溝（第23図、図版13）

調査範囲中央の遺構の集中する範囲から西北へ約30m離れた地点で、南北方向に直線状にのびていた。西側に隣接して059溝が同じ方向にのびていた。長さは約9m、幅約1.5m、深さは約0.2mであった。

遺物は砥石が2点出土した。

059溝（第23図、図版13）

調査範囲中央の遺構の集中する範囲から西北へ約25m離れた地点で、南北方向に直線状にのびていた。本調査範囲外となって中断する部分もあるが、溝は南へ調査範囲外側にもものびていると思われる。東側に隣接して060溝が直交する方向にのびていた。長さは約27m、幅約1.1m～1.4m、深さは約0.25mであった。

遺物は片口鉢の口縁が出土した。

060溝（第23図）

調査範囲中央の遺構の集中する範囲から西北へ約20m離れた地点で、東西方向に直線状にのびていた。東側で059溝と交差していた。長さは約7m、幅約1.5m～2.2m、深さは約0.3mであった。溝というよりも、いくつかの土坑が連続して集積したような形態を見せている。

少量の遺物が出土したが図化できるものはない。

048溝（第21図、図版13）

遺構の集中する調査範囲中央から西側約60mの地点で検出され、東北から西南へ直線状にのびていた。東南側に049土坑があった。長さは約6.5m、幅約0.9m、深さは約0.2mであった。

SD001溝（第24図）

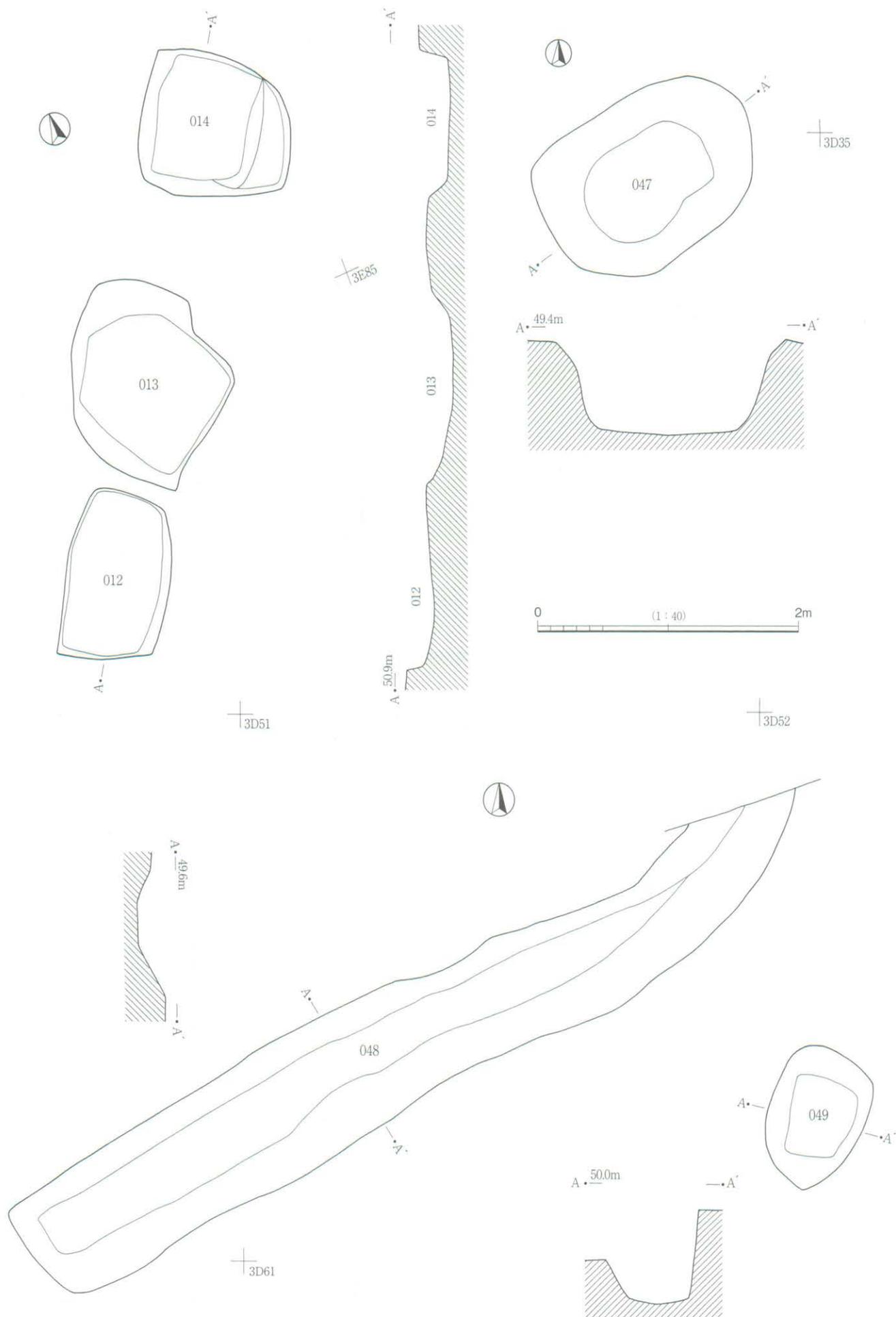
遺構の集中していた調査範囲中央から東側へ約40m、小さな谷を挟んだ台地上で南北方向に直線状にのびていた。確認調査のトレンチで存在が判明した。検出した長さは約18m、幅約0.7m～1.0m、深さは約0.9mであった。遺構の年代を中世に比定したが、近世の可能性もあるだろう。

SD002溝（第24図）

遺構の集中していた調査範囲中央から東側へ約80m、小さな谷を挟んだ台地上の調査範囲東端で西北から東南へ直線状にのびていた。確認調査のトレンチで存在が判明した。検出した長さは約20mであった。遺構の年代を中世に比定したが、近世の可能性もあるだろう。

2 遺物（第13・14図、第3・4表、図版20・21）

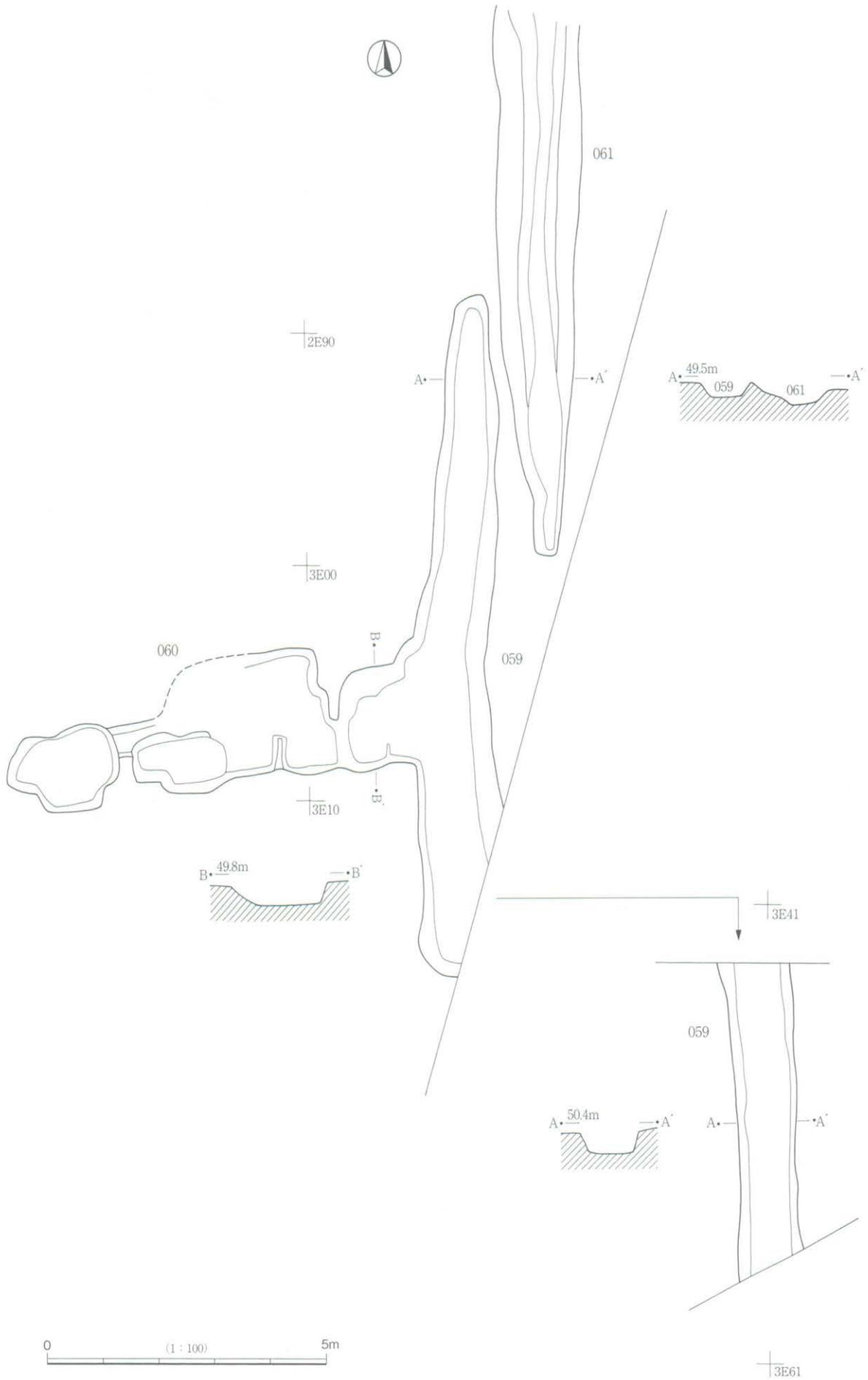
中世と比定できる遺物は少なかった。図化できたのは、土器片と砥石であった。第13図の21は、059溝から出土した片口鉢の口縁である。第14図の25と26は、それぞれ061溝、020溝から出土した砂岩製の砥石である。25は縦55.0mm、横35.4mm、厚さ20.6mm、重さ69.1gをはかる。26は縦72.9mm、横30.6mm、厚さ21.1mm、重さ77.3gをはかる。



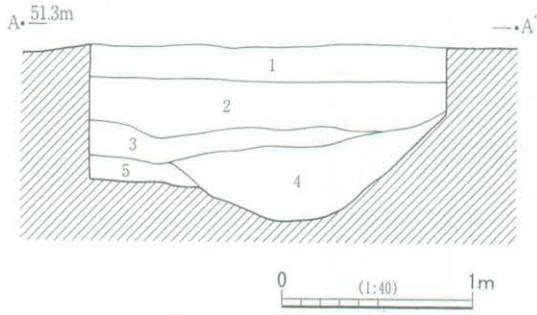
第21图 土坑·溝



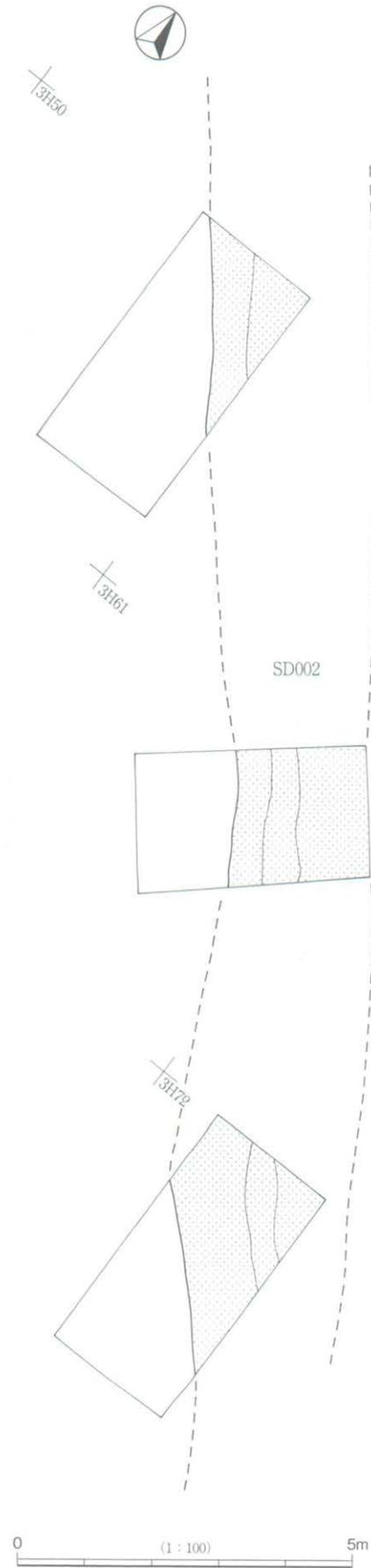
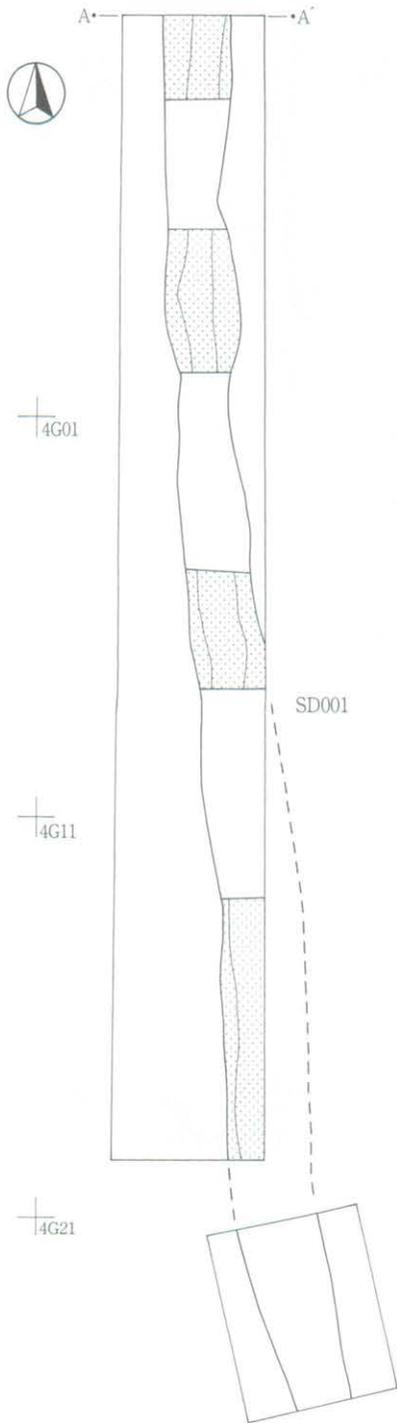
第22図 溝 (1)



第23図 溝 (2)



- 1層 黒色土 耕作土
- 2層 黒色土 水田床土
- 3層 黒色土 若干の山砂まじりの腐植土
- 4層 黒色土 溝覆土 砂まじりの腐植土
- 5層 黄褐色土 若干の腐植土まじりのシルト粘質土



第24図 溝(3)

第5節 まとめ

圏央道は房総半島の間を円弧を描くように通る。したがって圏央道の建設工事にともなう文化財調査により、これまでさほど知られていなかった房総半島内陸の知見が増加した。高度経済成長期以来、公共事業の多い東京湾沿岸を主体にして文化財調査が行われ、おもに内湾平野部を中心に原始・古代の解明が進められた。一方、公共事業の少ない半島内部もしくは山間部では文化財調査は限られてしまい、資料の蓄積も比較的遅れていた。圏央道工事にともなう文化財調査は、内湾平野部とは違った半島内奥の原始・古代の状況を伝えていると言えるだろう。

番後台遺跡は、養老川中流域の集落遺跡として有名である。約30年前の調査結果によると⁽¹⁾、縄文時代中期の住居跡1軒、弥生時代後期を主体とする住居跡30軒、古墳時代前期から後期の住居跡99軒が検出された。番後台遺跡周辺の住環境が好適であったために、長期にわたり、繰り返して集落が営まれたと考えられる。

今回調査された番後台遺跡の範囲は、約30年前に調査された地点から北東へ約300m離れた同じ台地上である。前回と同様に住居跡の検出が予測されたが、住居跡はまったく検出されなかった。代わって検出されたのは、縄文時代の小竪穴と中世の土坑であった。同一の台地上であっても、住環境に相違があって異なる人間活動が営まれ、異なるタイプの遺構が残ったと考えられる。

縄文時代 縄文時代の遺構として小竪穴16基、土坑7基、陥穴1基が検出された。小竪穴の形状は円形か楕円形で、大きさは直径2m前後もしくはそれ以下、深さも約0.6m以内と浅いものが多く、深さ1mを超えるほどの深くて大きい小竪穴はなかった。遺構に伴う土器は少なかったが、おもに縄文時代中期の土器が出土しているので、小竪穴の時期も縄文時代中期の年代と考えてよからう。前回の約30年前の調査でも、加曾利E式の土器が出土した縄文時代中期の住居跡が1軒検出されている。

一般に小竪穴は埋蔵施設とされ、住居跡などの居住施設と相伴している事例が多い。しかし番後台遺跡では、居住に関する遺構は検出されず、貯蔵施設だけの単純な性格となっている。あるいは、今回の調査範囲に隣接する場所に居住空間があったのかもしれない。

近隣に所在する縄文時代中期の遺跡調査例を見てみると、埋甕炉をともなう住居跡の検出された山小川遺跡、同じく住居跡の検出された関尻遺跡、ピット群の検出された竹ノ下遺跡などがある。これらの遺跡では検出された遺構は少なく、出土した遺物の数量もさほど多くなかった⁽²⁾。同じ山小川遺跡でも平成18年に調査された県道部分では、加曾利EⅢ式から称名寺式、堀之内式に属する竪穴住居跡が19軒検出された。その時に検出された竪穴住居跡の特徴は、いずれも規模が小さく、炉が作られないか、作られても使用頻度の低い貧弱なものという点で共通していた。また住居跡の柱穴には、建て替えの痕跡は認められなかった⁽³⁾。山小川遺跡では、縄文時代中期から後期にかけて、竪穴住居の規模が小さいまま炉の使用が衰退したという現象が見て取れる。生活パターンが、長期居住から放散的な短期住居へと変動したのかもしれない。

番後台遺跡に隣接する久保堰ノ台遺跡1と久保堰ノ台遺跡2が、圏央道の建設で近年調査された。多数の住居跡、小竪穴、土坑が検出され、大量の土器も出土した。久保堰ノ台遺跡については、まだ整理作業が進んでいないので、詳細な遺跡の内容は不明であるが、拠点的な集落であった可能性がうかがえる。同じ縄文時代中期の遺跡でありながら、番後台遺跡や山小川遺跡などのように少数の遺構・遺物からなる単相的な遺跡と、久保堰ノ台遺跡のような多数の遺構・遺物で構成される複相的な遺跡の、2つのタイプが

想定できるかもしれない。2つの遺跡のタイプは、人間行動パターンの異なる様相を反映したものと考えられるが、その違いは時期的相違なのか、あるいは空間・環境的相違なのかは不明である。

いずれにせよ久保堰ノ台遺跡は、養老川中流域の縄文時代遺跡で重要な位置を占められると思われる。久保堰ノ台遺跡の状況を、番後台遺跡のような周辺遺跡と比較検討することによって、養老川中流域における縄文人の行動パターンがより詳細に解明されるであろう。

古墳時代 古墳時代の遺構として、調査範囲東側から方形周溝状遺構が単独で1基検出された。方形の区画内の中央付近で2基の主体部が並行して検出されたので、方形周溝状遺構は埋葬施設であろう。出土遺物のなかに方形周溝状遺構の年代を比定する根拠を示すものはなかったが、古墳時代と考えておきたい。

方形周溝状遺構は、前回の調査でも、081A号方形周溝遺構と081B号方形周溝遺構の2基が重複して検出された。081A号方形周溝遺構の規模は一辺約13.2m、081B号方形周溝遺構の規模は081A号よりもやや小さく、一辺約11mであった。2基の方形周溝状遺構は、今回検出された方形周溝状遺構よりもやや大きい。

081B号から出土した土器は古墳時代前期（五領期）の様相を示している。081A号から出土した土器は図化されなかったが、土師器高杯の脚部中央がふくらむ形状の土器片がふくまれていたと報告されているので、古墳時代前期よりも若干新しい様相を示しているのかもしれない。いずれにせよ古墳時代の方形周溝状遺構と判断してよからう。

前回の調査で古墳時代前期（五領期）とされた住居跡が50軒以上あり、方形周溝状遺構は住居跡の分布する中央に位置し、住居跡と重複して検出された。この方形周溝状遺構が埋葬施設であったとするならば、集落内の居住空間に、住居と渾然となって埋葬施設が設けられたことになる。

番後台遺跡から養老川をさかのぼり、南へ直線距離で約2.7kmの地点に皿郷田茂遺跡がある。この遺跡からは円形周溝墓1基、方形周溝墓7基、甕棺墓1基が検出され、古墳時代前期の五領式、中期和泉式の土器が出土した。方形周溝墓の規模は1辺が約5m～16mと、大きさにバラエティがあった。また、周溝が方形に全周するのではなく、南総中学遺跡の弥生時代の方形周溝墓のように、方形の隅の溝が切れるタイプが多かった。周溝墓の周辺には住居跡がなかったので、居住空間である集落とは明瞭に区分された墓域だったと考えられる。

番後台遺跡から養老川を下って、北へ直線距離で約6kmの地点に奉免上原台遺跡がある。広大な丘陵上で方形周溝状遺構が50基以上検出された。規模は1辺が約3m～17mと一定の規格性はうかがえず、様々な大きさが見られた。遺物の出土した方形周溝状遺構は少なかったが、数少ない出土土器は8世紀、つまり奈良時代のものが多かった。方形周溝状遺構の周辺から住居跡は検出されず、居住空間と離れて方形周溝状遺構が設けられたと考えられる。

周辺遺跡の方形周溝状遺構を参考にして、番後台遺跡の方形周溝状遺構を考えると、前回の調査で検出された方形周溝状遺構が古墳時代だったので、今回検出された方形周溝状遺構も、一応古墳時代としておく。周溝が方形に全周するので、弥生時代の方形周溝墓とは言えないだろう。しかしながら奉免上原台遺跡では8世紀の方形周溝状遺構が検出されているので、時代を下げて8世紀とする可能性も払拭できない。

また前回の番後台遺跡の調査では方形周溝状遺構と住居跡が重複・混在し、居住と埋葬の空間は区別されていなかった。今回の調査では住居跡は検出されず、方形周溝状遺構が単独で存在して、埋葬空間とし

て認識できる状況だった。

中世 縄文時代の小竪穴や土坑に混在して中世の土坑37基と溝8条が検出された。ただし土坑の時期を比定する根拠となる遺物がほとんど出土しなかったため、年代を推定するのは困難だった。

土坑の形状は方形もしくは長方形で、大きさが1辺約0.7m～1.5mと規模が一定であった。また分布範囲は長方形に近似し、北の方角からやや東に傾いた方向を示して、ある程度の規格性がうかがえた。しかしこれらの土坑にどのような機能があったのか不明である。形状からすると墓坑の可能性も考えられるが、副葬品や骨片・骨粉は出土していない。

房総半島内陸の養老川中流域では、東京湾沿岸地域と比較して中世の状況があまり知られていない。養老川中流域の中世遺跡として、番後台遺跡から東へ約3kmの地点にある関尻遺跡があげられる。この遺跡から13世紀～14世紀の龍泉窯系の青磁、さらに近世の陶磁器も出土し、中世から近世の長期にわたって継続した集落の一部であった可能性がうかがえる⁽⁴⁾。関尻遺跡は、現在の山小川集落の縁辺に位置し、山小川集落は江戸時代に養老川水系の水運の中継的村落であった⁽⁵⁾。水運に関連した集落の時間的上限が、中世にまでさかのぼることは十分考えられるだろう。古代末期以降、養老川流域の開発が中・上流にも波及して、番後台遺跡のような土坑を主体とする遺跡が形成されたのであろう。

注

- (1) 『市原市番後台遺跡・神明台遺跡』千葉県文化財センター 1982年
- (2) 『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書15』千葉県教育振興財団調査報告第681集 2012年
- (3) 『市原市山小川遺跡・柏野遺跡・山口城跡』千葉県教育振興財団調査報告第624集 2009年
- (4) 注(2)と同じ。
- (5) 『市原市史』中巻 市原市 1986年 542頁～554頁

第3章 山口城跡

第1節 調査・整理の方法と概要

1 調査の経過と調査方法（第2・25・26図）

山口城跡は、高滝湖をせき止める高滝ダムの北西側に接する独立丘陵の一带と考えられていた。この城跡は、平成2年度～平成5年度にかけて実施された千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査で新たに発見された城跡で、「郭 空堀 土塁 虎口 井戸」の遺構があり、「駒込 馬場 弓寄 矢留田 馬坂 小榊輪」の関連地名があるとして城跡と認定された。長軸1,160m×短軸1,080mに含まれる尾根一帯と隣接する平地が、広大な城の範囲とされた（第2図の赤色線で囲まれた部分）。

丘陵東側と高滝ダムの接する縁辺を、県道168号鶴舞馬来田停車場線が走っている。この県道工事の関係で、平成18年度に山口城跡の中央東端で、515㎡の小面積を対象に発掘調査が実施された。4本のトレンチから明瞭な遺構は検出されず、縄文土器、礫、石器片などの分布する包含層が確認された。

圏央道は独立丘陵の中央部分を東西に、山口城跡を横断するように計画され、長さ約600m、幅50m～100mが調査の対象となった。標高は丘陵の裾部分が約40m、丘陵の最高所が107mであった。調査前の遺跡の現況は、おもに山林であった。

調査の経過 調査は平成18年度と19年度に実施された（第25図）。18年度には丘陵裾部の平地の部分3,000㎡、19年度には丘陵の尾根部分43,600㎡で調査が行われた。調査面積の合計は、46,600㎡であった。整理作業と報告書作成を平成24年度に行った。発掘調査から整理作業・報告書刊行にいたるまでの調査組織、担当者および作業内容は以下のとおりである。

なお、平成18年度の県道工事による調査範囲は、圏央道調査部分の南側に隣接し、調査成果は平成20年度に『市原市山小川遺跡・柏野遺跡・山口城跡』千葉県教育振興財団調査報告第624集として報告された⁽¹⁾。

発掘調査

平成18年度 調査期間：平成18年9月25日～平成18年9月29日

調査対象面積：3,000㎡

確認調査面積：上層167/3,000㎡、ローム層がないため下層の確認調査なし

組織：調査研究部長 矢戸三男、南部調査事務所長 高田 博、担当：主席研究員 柴田龍司

平成19年度 調査期間：平成19年4月9日～平成19年4月27日

調査対象面積：43,600㎡

確認調査面積：上層694/43,600㎡、ローム層がないため下層の確認調査なし

組織：調査研究部長 矢戸三男、南部調査事務所長 西川博孝、担当：主席研究員 土屋治雄、
上席研究員 麻生正信

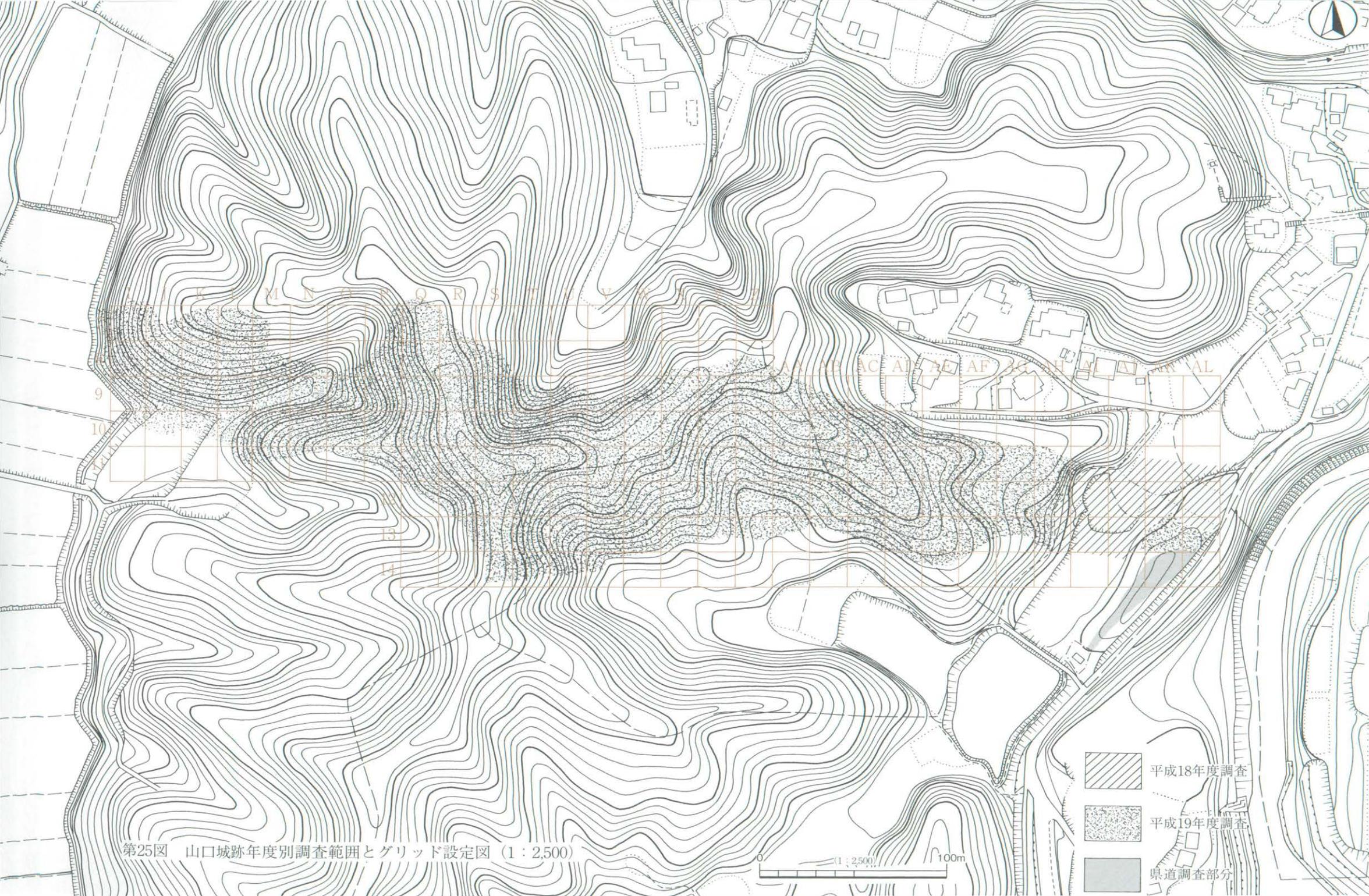
整理作業

平成24年度 整理期間：平成24年4月2日～平成25年3月8日

作業内容：水洗注記から刊行まで

組織：調査研究部長 関口達彦、整理課長 高田 博、担当：主任上席文化財主事 森本和男

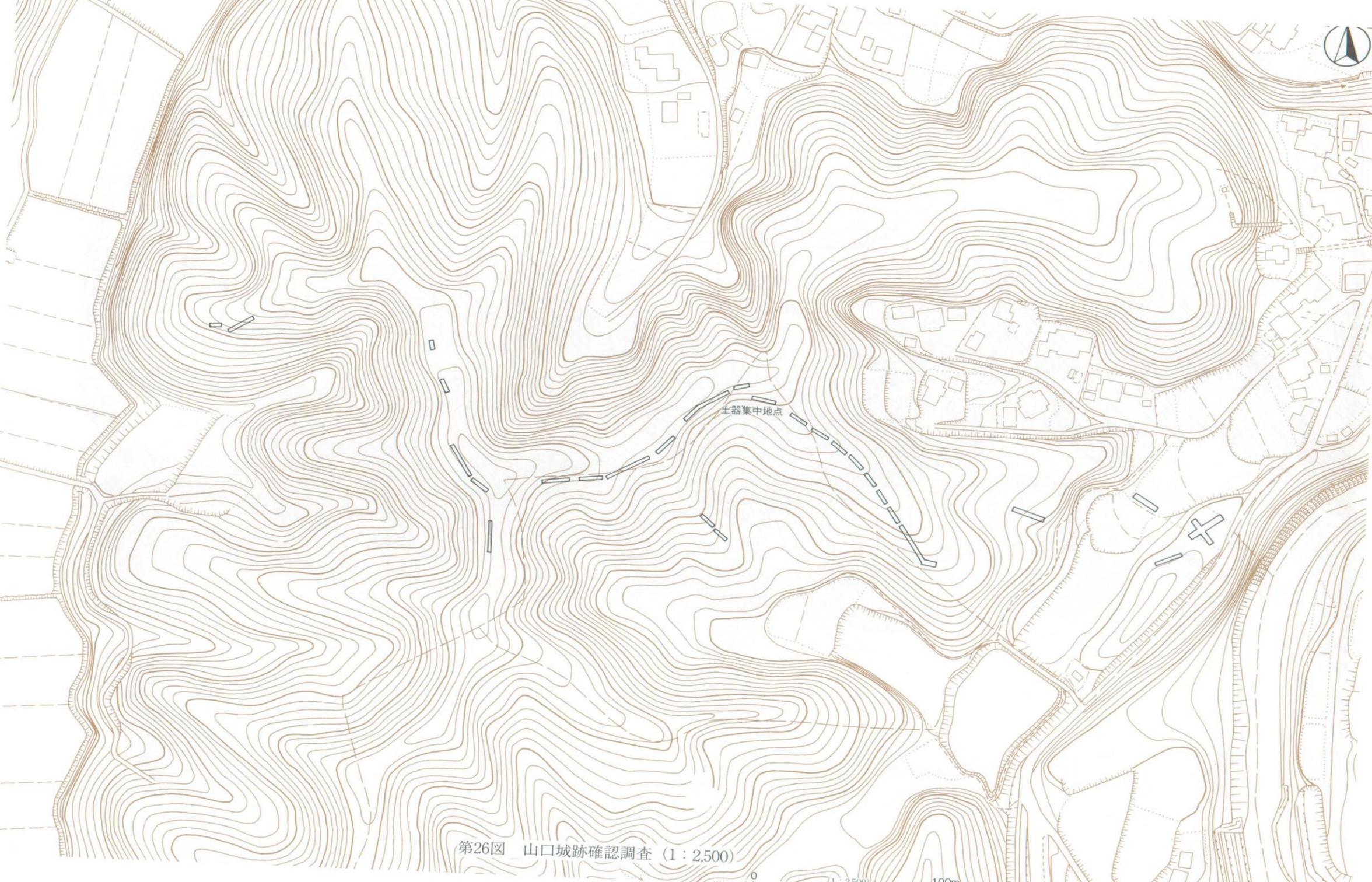
調査方法 調査は、遺跡全体に20m四方の大グリッドを基本とするグリッド網を設定して行った。グリッ



第25図 山口城跡年度別調査範囲とグリッド設定図 (1:2,500)

- 平成18年度調査
- 平成19年度調査
- 県道調査部分

0 100m
1:2,500



第26図 山口城跡確認調査 (1 : 2,500)

0 100m

ドの名称を北から南へ7、8、9・・・、西から東へI、J、K・・・という順序で配列した。

上層の調査は、遺構の有無を確認するため、調査対象となった範囲に幅2mのトレンチをおもに尾根上に設定し、必要に応じてトレンチを拡張した(第26図)。下層の調査は、ローム層の存在が確認されなかったので実施しなかった。

調査成果の概略 平成18年度の調査は丘陵裾部を対象に実施された。長さ約20mのトレンチを「十」字に交差するように設定して確認調査を行ったが、遺構は検出されなかった。出土した遺物は土器小片が10点弱、黒曜石の小片1点であった。

平成19年度の調査は丘陵の尾根部分にトレンチを設定して、遺構の検出を試みた(図版16)。掘り込みのある遺構は検出されなかったが、尾根上で歴史時代の土師器が集中して出土した地点が1か所あった。その他のトレンチから少量の遺物が出土した。尾根上のトレンチ調査では、堀や曲輪などの城に関連する遺構は検出されなかった。また出土遺物に、中世に比定されるものは含まれていなかった。

第2節 遺構と遺物

1 遺構(第27・28図、図版14)

山口城跡の調査で、堀や曲輪など尾根の地形から造形された城の遺構は検出されなかった。中段の標高90mの尾根上のトレンチから(第27図)、歴史時代の土師器片が集中して多く出土したので、周囲を拡張して調査した。

土器集中地点は、せまい尾根上の平坦面から斜面へと地形の傾斜する場所で検出された。周囲には、掘り込まれた明確な遺構はなく、小さな土器片が4m×2mの範囲に散在していた。遺物総数は59点で、数点の礫や須恵器片以外は、ほとんどが土師器片だった。フイゴの羽口片と思われる溶解した金属の付着した土製品1点が、土師器片に混じって出土した。

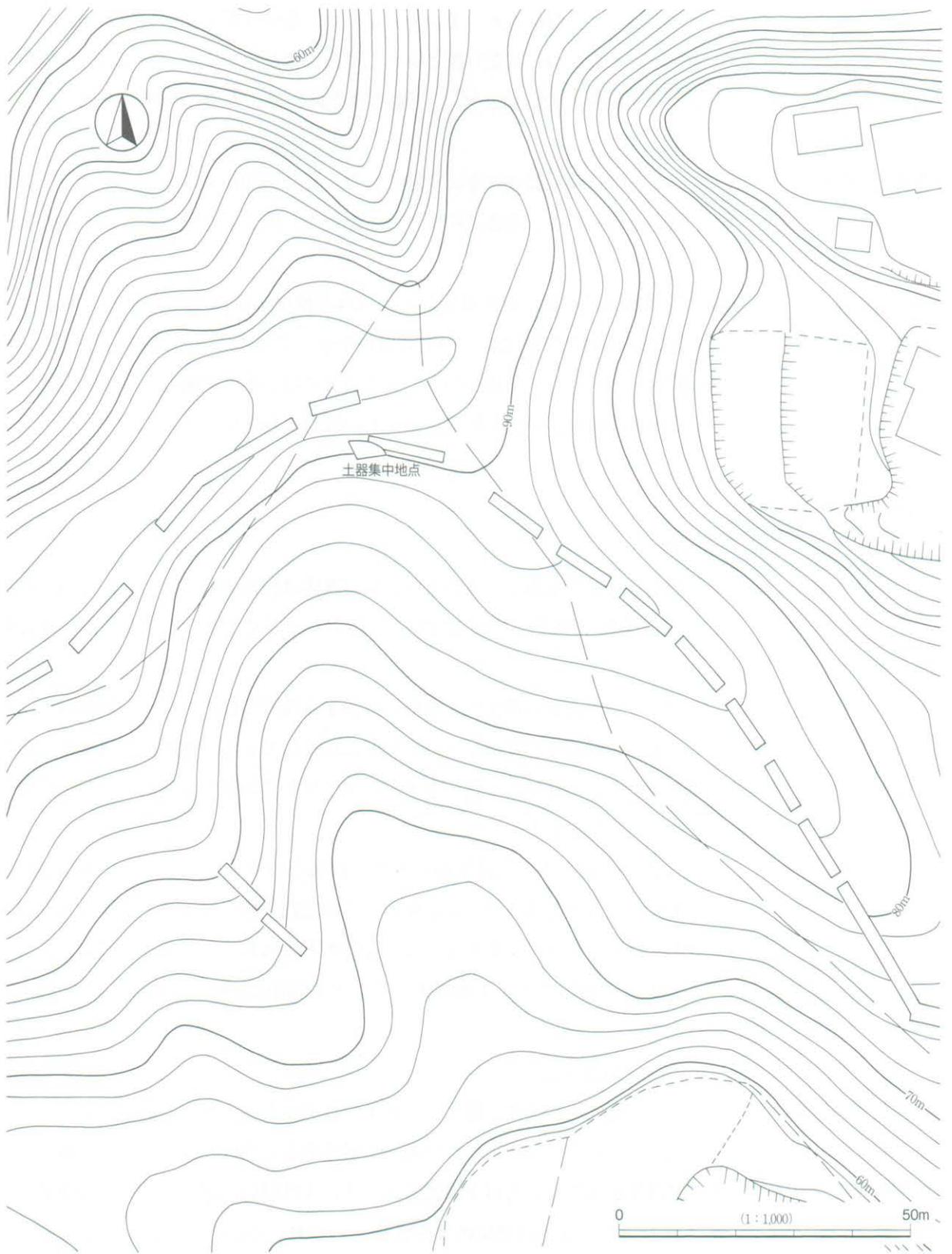
これらの遺物は、出土地点における何らかの人間活動の痕跡・結果というよりも、斜面の狭い平坦面に、上方から遺物が流入して堆積したものであろう。土器集中地点の北側尾根上にはやや平坦な面が広がっている。この平坦面で、簡単な野鍛冶などの作業を行った可能性が考えられる。小規模な鍛冶炉による製鉄もしくは鉄製品の修理が行われ、使用された土師器の破片などが斜面に散乱して堆積したと思われる。

2 遺物(第29図、第5・6表、図版21・22)

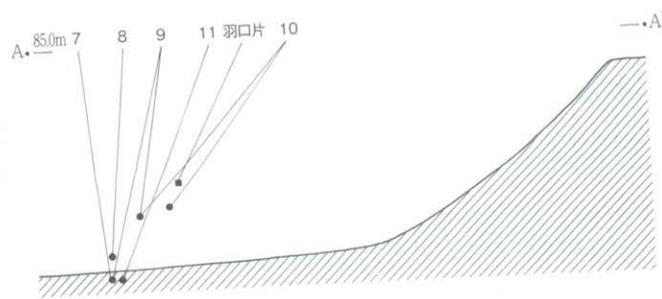
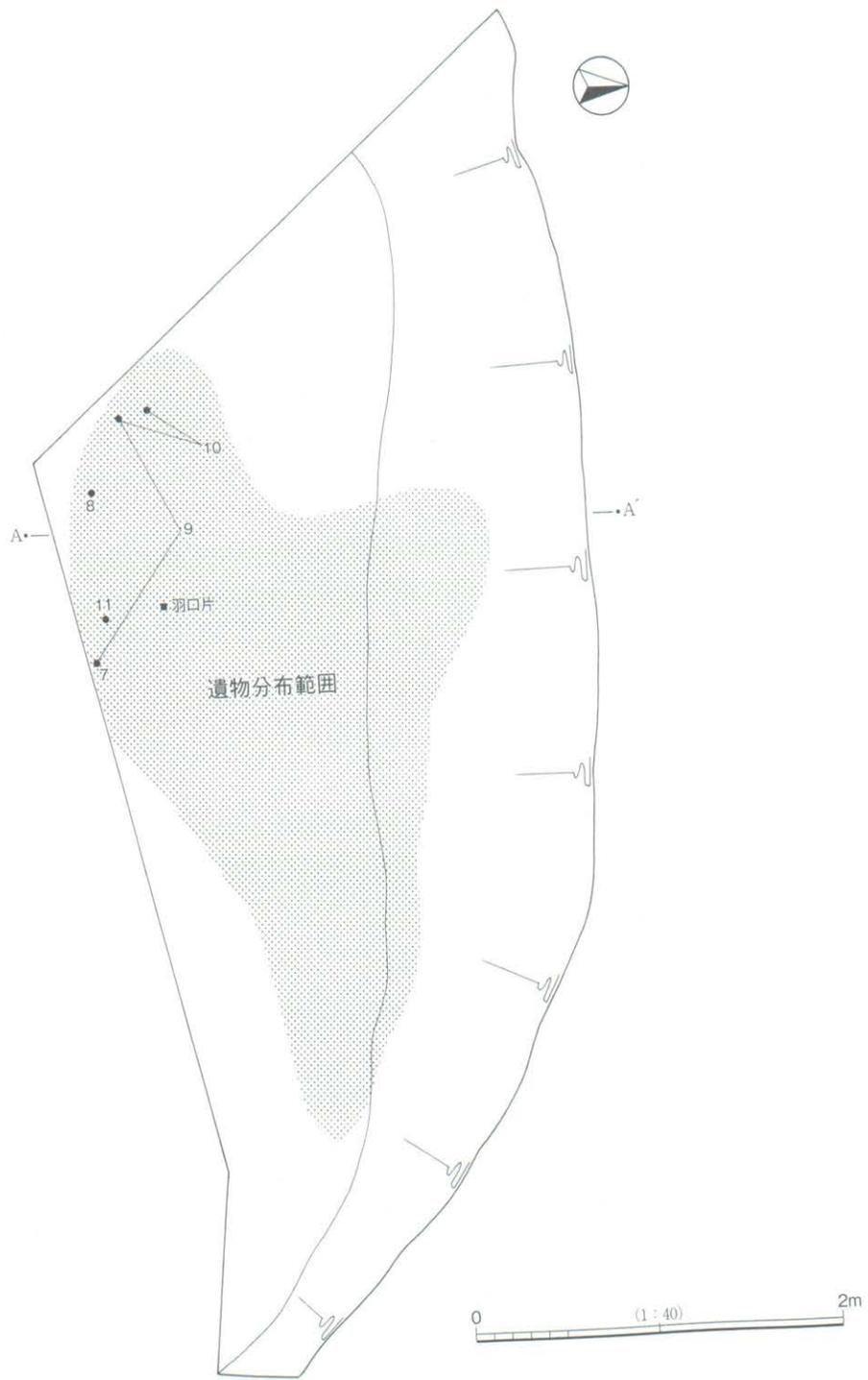
図化できた遺物は、トレンチから出土した縄文土器と、土器集中地点から出土した土師器である。

1～6は、丘陵尾根上に設定したトレンチから出土した縄文土器である。小片がほとんどで、風化したものが多かった。1は太線の沈線文が施され、田戸下層式であろう。4は厚い口縁で、太い沈線をめぐらせた口縁下部に、縄文が施されていた。5には横位の突帯がめぐらされ、その上下に縄文が施されていた。6にも横位の突帯がめぐらされ、その下部に縄文が施されていた。4～6は加曾利E式である。

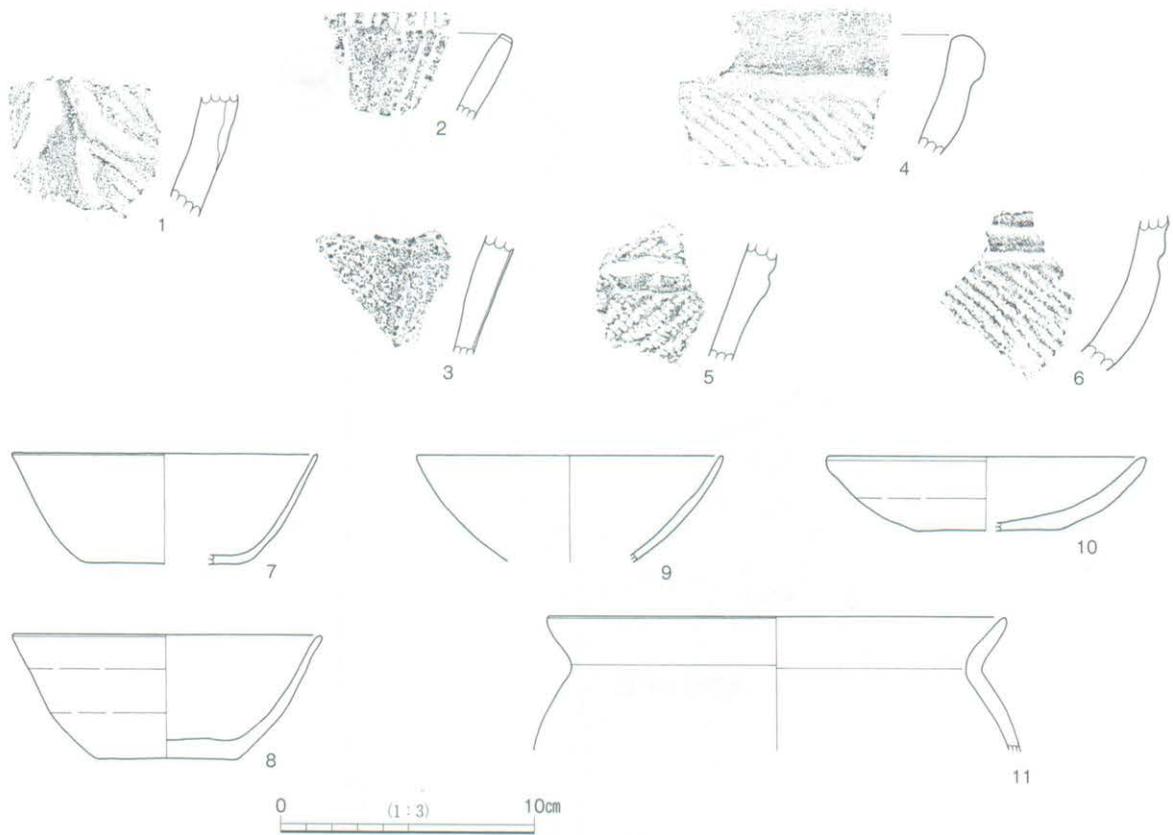
7～11は、丘陵尾根上の土器集中地点から出土した土師器である。いずれもやや風化している。7は杯で口径12.0cm、器高4.0cmであった。整形は内外面ナデである。8は杯で口径12.1cm、器高4.6cmであった。外面ロクロ成形で、底部は糸切り離し後ヘラ整形であった。10は皿で口径12.4cm、器高2.7cmであった。内外面ロクロ成形で、底部は回転ヘラ整形であった。器形や整形などの特徴から、土師器の年代は9世紀後半と思われる。



第27图 土器集中地点 (1:1,000)



第28図 土器集中地点



第29図 土器

第5表 山口城跡出土縄文土器

挿図番号	実測番号	出土遺構	遺物番号	土器形式	備考
第29図	1	6	トレンチ 001	田戸下層	早期中葉
第29図	2	3	トレンチ 001		
第29図	3	4	トレンチ 001		
第29図	4	1	トレンチ 001	加曾利E	中期
第29図	5	5	トレンチ 001	加曾利E	中期
第29図	6	2	トレンチ 001	加曾利E	中期

第6表 山口城跡出土土器

挿図番号	実測番号	出土遺構	遺物番号	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	遺存率	色調	整形
第29図	7	2	土器集中点 028	土師器	杯	12.0	6.0	4.0	1/4	内外面赤褐色	内外面ナデ
第29図	8	3	土器集中点 036	土師器	杯	12.1	5.5	4.6	1/4	内外面明褐色	外面ロクロ成形、内面ナデ、底部糸切り離し後ヘラ整形
第29図	9	1	土器集中点 022,028	土師器	杯	12.1	-	3.9	2/5	内外面赤褐色	内外面ナデ
第29図	10	4	土器集中点 015,022	土師器	皿	12.4	5.6	2.7	1/4	内外面明褐色	内外面ロクロ成形、底部回転ヘラ整形
第29図	11	5	土器集中点 047	土師器	甕	18.0	-	-	1/8	内外面明褐色	口縁ナデ、外面縦位のヘラ削り

第3節 まとめ

山口城跡は、高滝ダム北西側の独立丘陵一帯とされているが、元来文献史料などに記載された城跡ではなかった。平成2年度～平成5年度にかけて実施された千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査で、新たに城跡とされたのである。その根拠として「郭 空堀 土塁 虎口 井戸」の遺構、「駒込 馬場 弓寄 矢留田 馬坂 小柵輪」の関連地名が、分布調査報告書に列挙されている。

平成18年度に丘陵裾部で県道工事にともなって小面積の調査が実施された。報告書によると、城跡に関する遺構・遺物は検出されなかった⁽²⁾。

圏央道工事にともなう今回の調査対象は、独立丘陵の中央やや北側を東西に横断する長さ約600m、幅約50m～100mの帯状の範囲だった。調査範囲は丘陵のほぼ中心を貫いていたが、中央の尾根上から郭や切堀、腰曲輪など城に関する遺構は検出されなかった。また中近世の陶磁器や鉄器など、城跡の調査で通常出土する関連遺物も、今回の調査では出土しなかった。これらの調査結果を勘案すると、この独立丘陵を城跡と認定するのは困難とせざるをえない。

平安時代 城跡関係の遺構・遺物は検出されなかったが、尾根上から平安時代の土器集中地点が検出された。土器とともにフイゴの羽口片が出土したため、付近で簡素な鉄生産あるいは鉄器修理を行っていたと考えられる。恒常的な住居ではなく、短期間の一時的作業場が設営されたのだろう。検出された場所は独立丘陵のせまい尾根上なので、周囲に生活基盤となった日常的住居および集落は存在しなかっただろう。

養老川下流域では、市原市国分寺台周辺をはじめとする奈良・平安時代の大規模な集落遺跡が分布しているが、中・上流域で集落遺跡はまだ検出されていない。一時的な製鉄ないしは修繕作業を行った尾根とは別に、平坦でやや広い段丘上に集落が営まれていた可能性がある。製鉄関連の作業が、集落と分離した特殊な空間で行われたのであるが、その原因・理由などは不明である。

注

(1) 『市原市山川遺跡・柏野遺跡・山口城跡』千葉県教育振興財団調査報告第624集 2009年

(2) (1)と同じ。

第4章 大和田遺跡群

第1節 調査・整理の方法と概要

1 調査の経過と調査方法（第30～32図、第7表、図版15）

大和田遺跡群は、高滝湖東北側の独立丘陵に所在する複数の遺跡を総称している。独立丘陵の大きさは東西約1km、南北約550mあり、丘陵西側に遺跡が多く分布していた。圏央道は、この丘陵の南側を東西に走り、また丘陵中央の広い平坦面は高速道路のサービスエリアに計画されている。したがって圏央道の建設工事により、本体の高速道路部分に加えて、サービスエリアや周辺一般道の工事に関連して多数の調査が行われた（第7表）。

地形図を参考にしながら、圏央道工事で調査された遺跡を西から東へたどっていくと（第30図）、大和田遺跡群の西側、小湊鉄道をはさんで久保堰ノ台遺跡がある。平成23年度に調査され、縄文時代の住居跡、小竪穴、土坑が多数検出され、大量の遺物が出土した。その東側の小丘陵に緑岡古墳群がある。小丘陵の西側裾部で縄文時代の住居跡、小竪穴が検出され、また丘陵上では古墳、土坑墓などが検出された。

道路をはさんだ東側の丘陵に大和田遺跡群が分布している。この道路は丘陵を切り開いて建設された市道7253号線で、道路部分にあった大和田遺跡が昭和61年7月から翌年3月まで、道路建設にともなって調査された。調査によって丘陵尾根上に古墳3基、斜面に横穴16基、須恵器窯跡1基などが検出された。この時、斜面に開口していた横穴群のほとんどが調査され、道路建設によって消滅したが、東端にあった横穴3基は工事範囲から外れ、そのまま遺存していた。約25年後の圏央道工事で残っていた横穴3基も姿を消すこととなり、大和田遺跡群（2）として平成21年度に調査が実施された、

大和田遺跡群（2）の東側に大和田遺跡群（3）が隣接し、同じく圏央道工事にともなって平成21年度に調査された。丘陵上から古墳と近世の塚が検出された。大和田遺跡群（3）の南側斜面に大和田遺跡群（1）があり、平成20年度に調査が実施された。大和田遺跡群（1）の東側丘陵上に大和田遺跡があり、平成18年度に調査が行われた。

平成18年度に調査された大和田遺跡の北側に大和田遺跡群（6）がある。平成22年度に調査が行われ、縄文時代の陥穴が検出された。丘陵上の南端部分が大和田遺跡群（4）で、平成22年度に調査が実施された。旧石器時代の遺物集中地点、縄文時代早期・前期の遺物包含層、歴史時代の竪穴住居跡などが検出さ

第7表 大和田遺跡群の調査

遺跡名	調査年度	検出遺構
大和田遺跡	2006	縄文時代遺物集中地点、土坑、炉穴
大和田遺跡群（1）	2008	なし
大和田遺跡群（2）	2009	横穴
大和田遺跡群（3）	2009	古墳、近世塚
大和田遺跡群（4）	2010	旧石器時代遺物集中地点、縄文時代遺物集中地点、奈良・平安時代住居跡
大和田遺跡群（5）	2010	旧石器時代遺物集中地点、縄文時代遺物集中地点
大和田遺跡群（6）	2010	陥穴
大和田遺跡群（7）	2010・11	横穴、中世やぐら
高滝陣屋跡	2011	なし

れ、大量の遺物が出土した。大和田遺跡群（４）の北側、丘陵平坦面の広い範囲が大和田遺跡群（５）である。平成22年度に調査が実施され、旧石器時代の遺物集中地点、縄文時代前期の遺物包含層などが検出された。

丘陵南側斜面が大和田遺跡群（７）となり、平成22年度～平成23年度に調査された。横穴、中世のやぐら、近現代の炭窯が検出された。丘陵裾部には高滝陣屋跡があり、平成23年度に調査されたが、遺構は検出されなかった。

多数の遺跡が分布する大和田丘陵の東端に大和田堰があり、遺跡の分布も大和田堰で途切れる。大和田堰をはさんだ東側にも独立丘陵があり、この丘陵にも遺跡の存在が予測された。そこで東側丘陵の遺跡を大和田東山遺跡と命名して、平成21年5月に踏査を実施したところ、縄文時代中期の加曾利E式の土器片1点を採集した。その後千葉県教育庁文化財課が試掘を行ったが、遺構・遺物ともに検出されなかったため、遺跡は存在しないと判断されて、調査の対象から除外された。

圏央道工事に関連して大和田丘陵のほぼ全域が調査され、旧石器時代から近現代までの遺構・遺物が検出されたのである。本書で報告するのは、平成18年度に調査された大和田遺跡、平成20年度に調査された大和田遺跡群（１）、平成21年度に調査された大和田遺跡群（２）の調査成果である。大和田丘陵の西側部分に相当し、調査前の遺跡の現況は、山林、荒蕪地であった。

調査の経過 それぞれの遺跡の調査面積は、大和田遺跡が4,000㎡、大和田遺跡群（１）が7,500㎡、大和田遺跡群（２）が横穴3基であった。整理作業と報告書作成を平成24年度に行った。発掘調査から整理作業・報告書刊行にいたるまでの調査組織、担当者および作業内容は以下のとおりである。

発掘調査

大和田遺跡

調査期間：平成19年1月29日～平成19年2月28日

調査対象面積：4,000㎡

確認調査面積：上層582/4,000㎡、下層80/4,000㎡

本調査面積：上層510㎡

組織：調査研究部長 矢戸三男、南部調査事務所長 西川博孝、担当：上席研究員
麻生正信

大和田遺跡群（１）

調査期間：平成21年3月2日～平成21年3月26日

調査対象面積：7,500㎡

確認調査面積：上層620/7,500㎡、ローム層がないため下層の確認調査なし

組織：調査研究部長 大原正義、中央調査事務所長 折原 繁、担当：主席研究員
土屋治雄

大和田遺跡群（２）

調査期間：平成21年4月1日～平成21年4月20日

調査対象面積：横穴3基

確認調査面積：ローム層がないため下層の確認調査なし

本調査面積：横穴3基

組織：調査研究部長 及川淳一、中央調査事務所長 折原 繁、担当：上席研究員
小林信一

整理作業



第32図 大和田遺跡群の確認調査と遺構分布図 (1 : 2,000)

平成24年度

整理期間：平成24年4月2日～平成25年3月8日

作業内容：水洗注記から刊行まで

組織：調査研究部長 関口達彦、整理課長 高田 博、担当：主任上席文化財主事
森本和男

調査方法 調査は、遺跡全体に40m四方の大グリッドを基本とするグリッド網を設定して行った。大グリッドの名称を北から南へ5、6、7、西から東へB、C、D・・・という順序で配列した（第31図）。さらに大グリッドを、4m四方の小グリッドで東西南北に10区画ずつ分割して全体を100等分した。小グリッドの名称は、北西隅を00にして、東へ00、01、02、・・・と1の位を増し、南へ00、10、20、・・・と10の位を増して、00～99の小グリッドを設定した。遺構・遺物を検出した場合、その出土地点を特定するために大グリッドと小グリッドの名称を組み合わせ、たとえば5F86などと表記している。遺構を検出するごとに遺構番号を付し、整理作業の時も、基本的に野外調査で付された遺構番号を使用した。

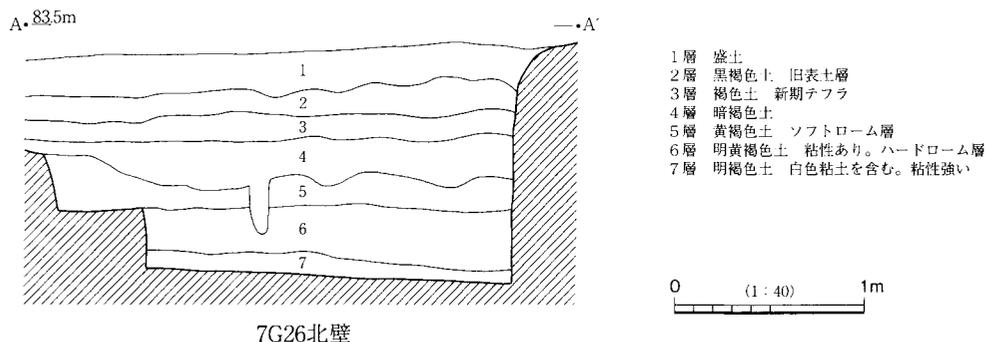
上層の調査は、遺構の有無を確認するため、調査対象となった範囲に幅2mのトレンチを任意に設定し、必要に応じてトレンチを拡張した。設定したトレンチの合計面積が、調査面積全体の約10パーセントに相当するようにした。下層の調査については、2m四方の正方形のグリッドを任意に設定し、グリッドの合計面積が、調査面積全体の約2パーセントに相当するようにした。大和田遺跡群（1）と大和田遺跡群（2）ではローム層が存在しなかったため、下層の確認調査を行わなかった。

斜面部の横穴調査であった大和田遺跡群（2）では、調査範囲内の既存の測量杭を基準に横穴周辺に追加の測量杭を打って調査を行った。調査に際しては、事故防止のために足場安全柵を設置してから行った。

調査成果の概略 平成18年度に調査された大和田遺跡では、土器、石器・礫の包含層が2か所検出され、本調査範囲が設定された。この結果、土坑3基、炉穴2基が調査された（第32図）。丘陵斜面を対象に平成20年度に調査された大和田遺跡群（1）では、確認トレンチから近現代の炭窯2基が検出されたが、その他に遺構が検出されず、出土遺物もわずかであったため、確認調査で終了した（図版15）。平成21年度に調査された大和田遺跡（2）では、横穴2基と横穴前庭部1基が調査された。

2 基本土層（第33図）

大和田遺跡は独立丘陵東側のほぼ中央に位置し、調査前にはテニスコートがあった。運動施設の運営のため、地表は盛土して水平化された。元来の地形は通常の尾根と同様に、いくらか凹凸のあった地形と考えられる。調査範囲南側の7G26の北壁を見てみると、地表下には約20cmの厚さの盛土があり、その下に旧表土層の黒褐色土があった。地表下約70cmに黄褐色土のソフトローム層があり、地表下約80cmに明黄褐色土のハードローム層があった。それより下は、粘性の強い明褐色土だった。



第33図 大和田遺跡の土層

第2節 縄文時代

平成18年度に調査された大和田遺跡から、おもに縄文時代の遺構・遺物が検出されたので、縄文時代の節を設けて大和田遺跡の調査成果を記述する。

1 遺構

大和田遺跡の確認調査で遺物包含層が北と南の2か所で検出され、それぞれを本調査範囲を設定して範囲を拡張した。北側の本調査範囲を本調査A区、南側を本調査B区と命名しておく。

本調査A区 本調査A区では、遺物包含層以外に土坑3基、炉穴2基が検出された。出土遺物は、縄文時代の土器、石器・礫で、少量ながら古墳時代の須恵器片、土師器片も混在していた。

遺物包含層（第34・35図、図版16）

調査範囲の北側で検出され、長軸約23m、短軸約22mの範囲に土器、石器・礫が分布していた。最近造営されたテニスコート用に地表は盛土されて水平だったが、元来の地形は西から東に向けて緩やかに傾斜し、その傾斜面に遺物が分布していた。黄褐色ローム層の上面に相当する暗褐色土層から、おもに遺物が出土した（第34図）。遺物には焼けて赤化した礫片が多く含まれ、土器片は少なかった。

遺物総数は約1,200点で、礫が1,015点、土器が184点であった。礫は、チャート、砂岩、流紋岩の3種類が主体をなし、それぞれ全体の約30パーセントを占めていた。その他にも安山岩、ホルンフェルス、凝灰岩など数種類の石材が含まれていたが、全体の1割以下だった。また焼けた礫が75パーセントを超えていたので、礫と火の使用との何らかの関係性がうかがえる。

土器は、縄文土器が大半を占め、撚糸文系の縄文時代早期の土器が含まれていた。縄文土器と礫は混在していたので、遺物包含層は火を利用した人間活動の痕跡と想定される。

また、古墳時代と思われる土師器や須恵器の破片も含まれていた。これらの土器は、西北へ約100m離れた丘陵上および斜面に展開する古墳や横穴の副葬品の破片が混入した可能性が考えられる。

SK001土坑（第36図、図版16）

遺物包含層南寄り6F07・6F17に位置し、西側にSK003土坑がある。形状は円形で、長軸1.01m、短軸0.96m、深さ0.3mであった。

SK002土坑（第36図、図版16）

遺物包含層の中央東寄り5F98に位置する。形状は楕円形で、長軸1.33m、短軸1.11m、深さ0.18mであった。底面は、挿鉢のように中央がややくぼんでいた。

覆土中から、焼けた流紋岩の礫が1点出土した。

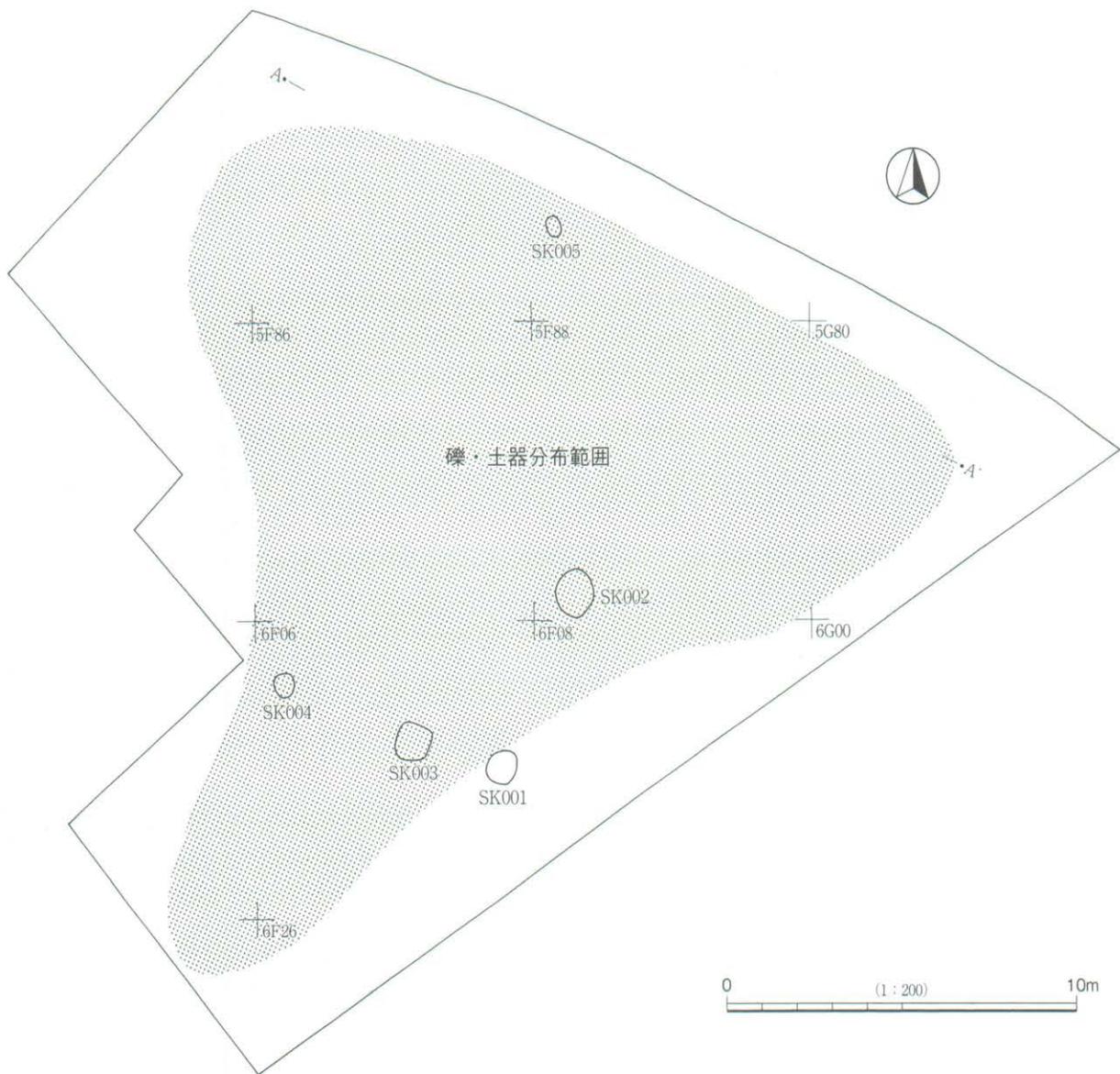
SK003土坑（第36図、図版17）

遺物包含層の南寄り6F07に位置し、東側にSK001土坑がある。形状は円形で、長軸1.08m、短軸1.02m、深さ0.36mであった。

SK004炉穴（第36図、図版17）

遺物包含層の西寄り6F06に位置する。形状は円形で、長軸0.65m、短軸0.60m、深さ0.07mであった。覆土に焼土粒と炭化粒を微量に含んでいた。

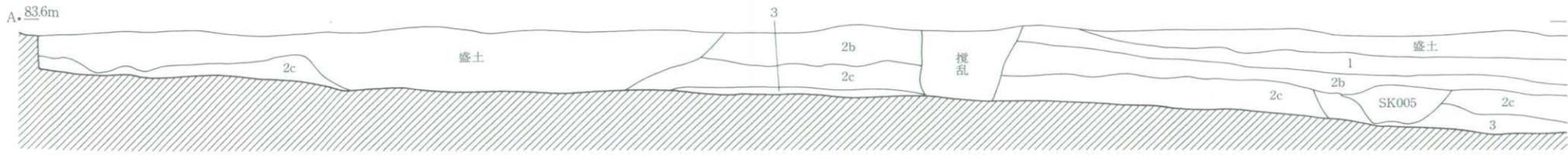
覆土中から土器が2点出土した。



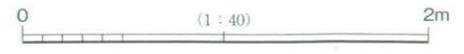
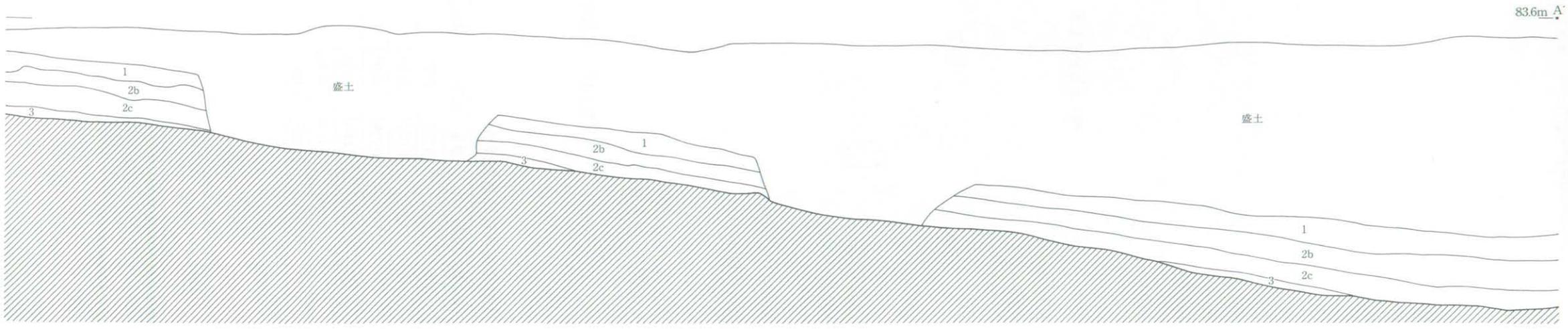
第34図 本調査A区

第8表 本調査A区遺物包含層の遺物組成

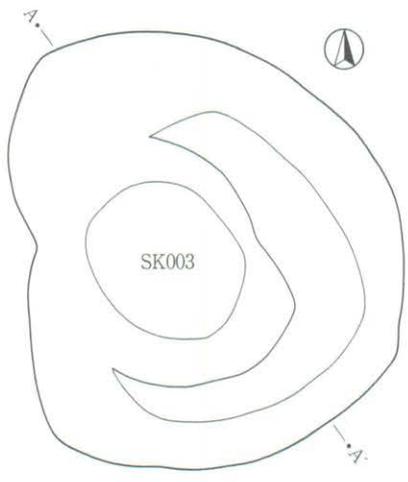
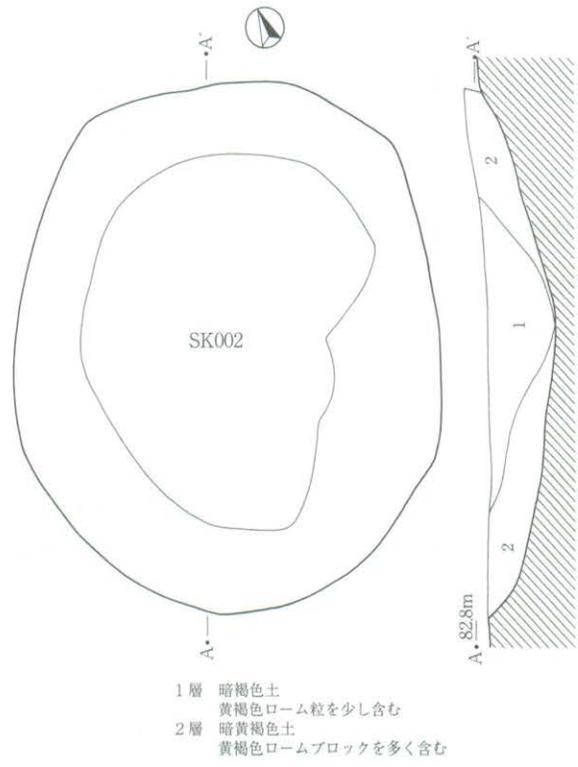
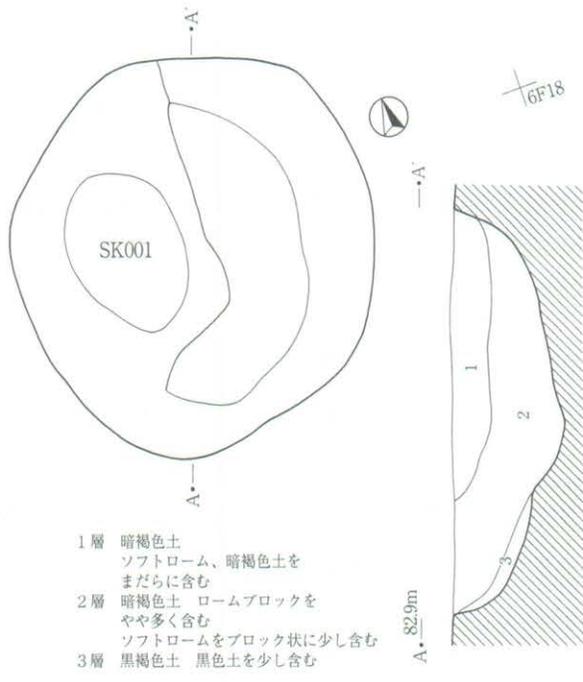
種別		点数・比率		重量・比率		焼成点数
礫	チャート	336	33.1%	10,258	19.7%	250
	砂岩	317	31.2%	16,579	31.9%	219
	流紋岩	274	27.0%	20,219	38.9%	266
	安山岩	32	3.2%	1,860	3.6%	9
	その他	56	5.5%	3,111	6.0%	20
	合計	1,015	100.0%	52,027	100.0%	764
土器	縄文土器	177				
	土師器					
	須恵器	7				
	合計	184				



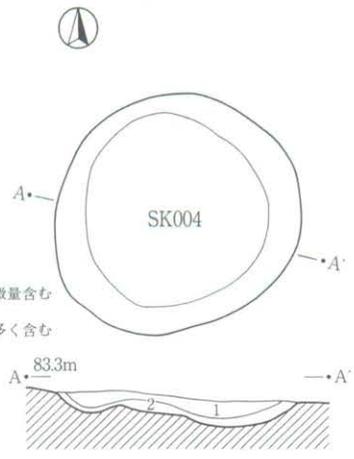
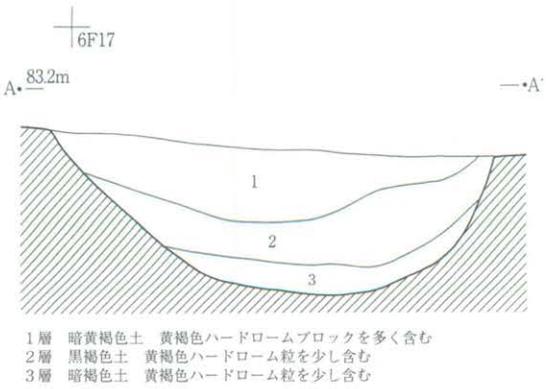
- 1層 黒褐色土 有機物蓄積層
- 2b層 暗褐色土 新期テフラ層
- 2c層 暗褐色土 相対的に腐食が少ない
- 3層 黄褐色土 ソフトローム層



第35図 本調査A区土層



6F06



第36図 土坑・炉穴

SK005炉穴（第37図、図版17）

遺物包含層の北寄り5F78に位置する。形状は楕円形で、長軸0.61m、短軸0.45m、深さ0.41mであった。覆土に焼土粒、焼土ブロックを含んでいた。

本調査B区 本調査A区の東南約600m離れた地点に本調査B区がある。縄文時代の遺物包含層以外に、その他の遺構は検出されなかった。

遺物包含層（第38図、図版18）

調査範囲の東南で検出され、長軸約7m、短軸約5mの範囲から合計20数点の土器と礫が検出された。元来の地形は南から北へ緩やかに傾斜していて、黄褐色ローム土層上面の暗茶褐色土層から遺物が出土した。土器には縄文土器と須恵器が含まれていた。礫には砂岩、ホルンフェルス、流紋岩、チャートなど様々な種類が含まれるが、各種類の礫の点数は数点にすぎない。焼けた礫は1点しかなかった。本調査A区の遺物包含層のような火を利用した人間活動の痕跡を想定するのは、困難である。

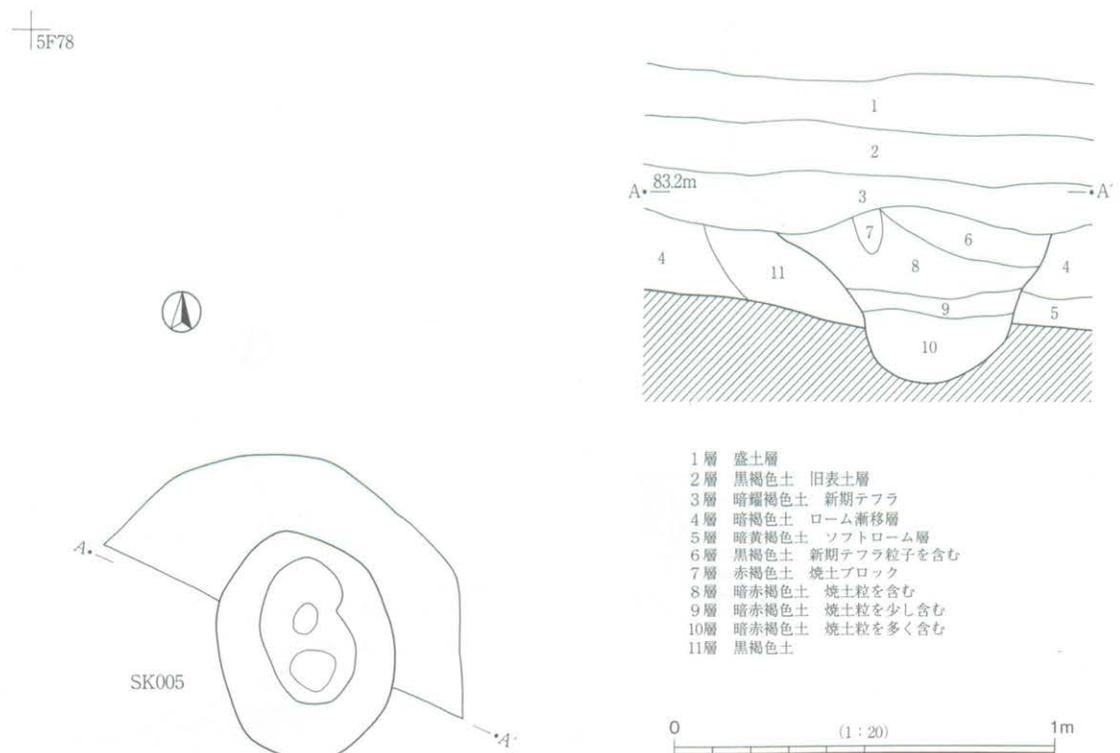
須恵器片については、西北側の丘陵上および斜面に展開する古墳や横穴から副葬品の破片が、混入した可能性が考えられる。

2 遺物（第39・40図、第8～11表、図版22）

図化した遺物は、本調査A区と本調査B区の遺物包含層から出土した土器と石器である。土器には小片が多く、原形を復元するのは困難であった。石器は、多数の礫の中に混在していた。土師器と須恵器は、隣接する古墳や横穴に関連する遺物であろう。

縄文土器

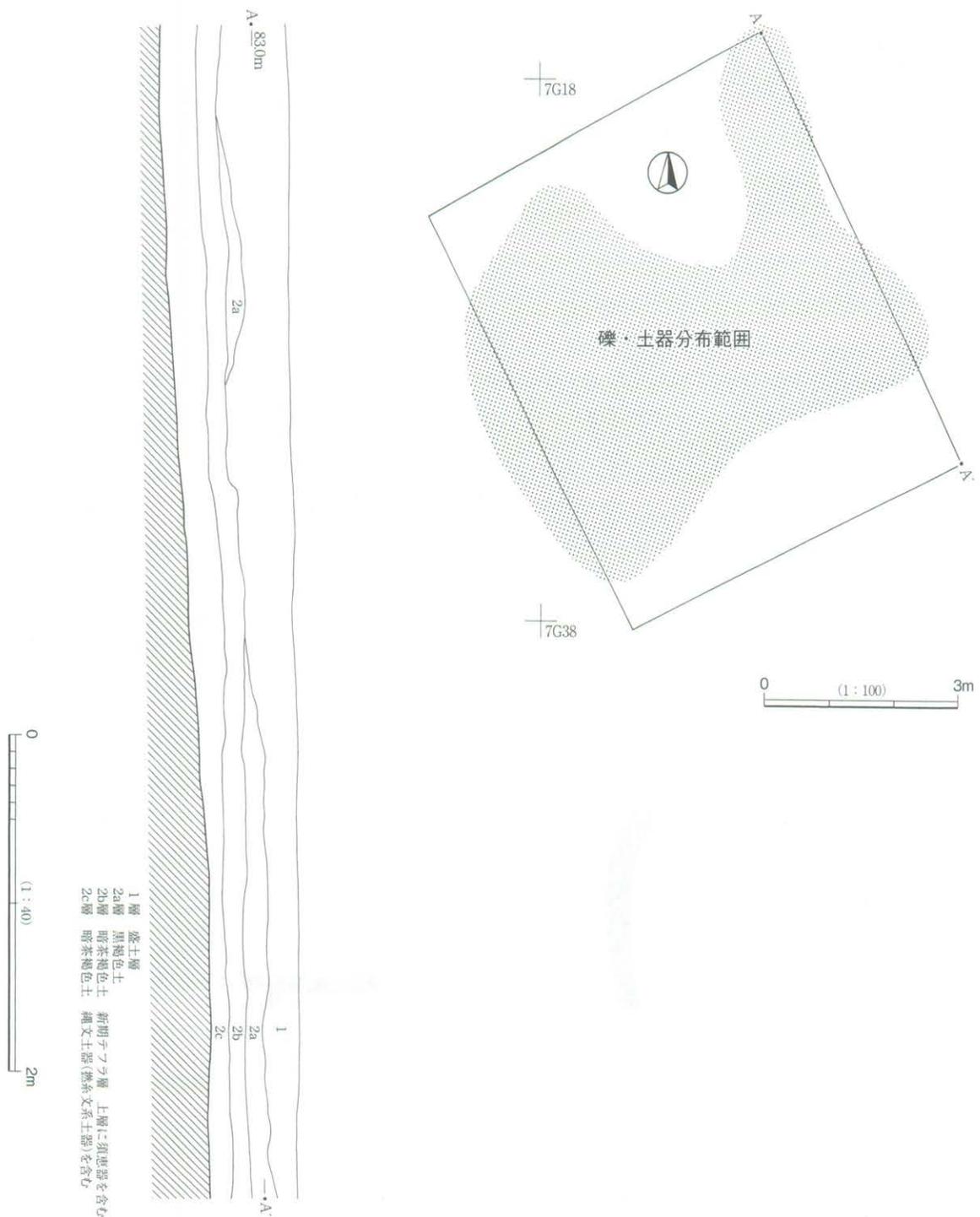
1～13が本調査A区の遺物包含層から出土した。1～5には細い撚糸文が縦位に間隔をあけて施されていた。稲荷台式の土器である。6～10にはやや太い撚糸文が施されていた。11と12には縄文が施され、



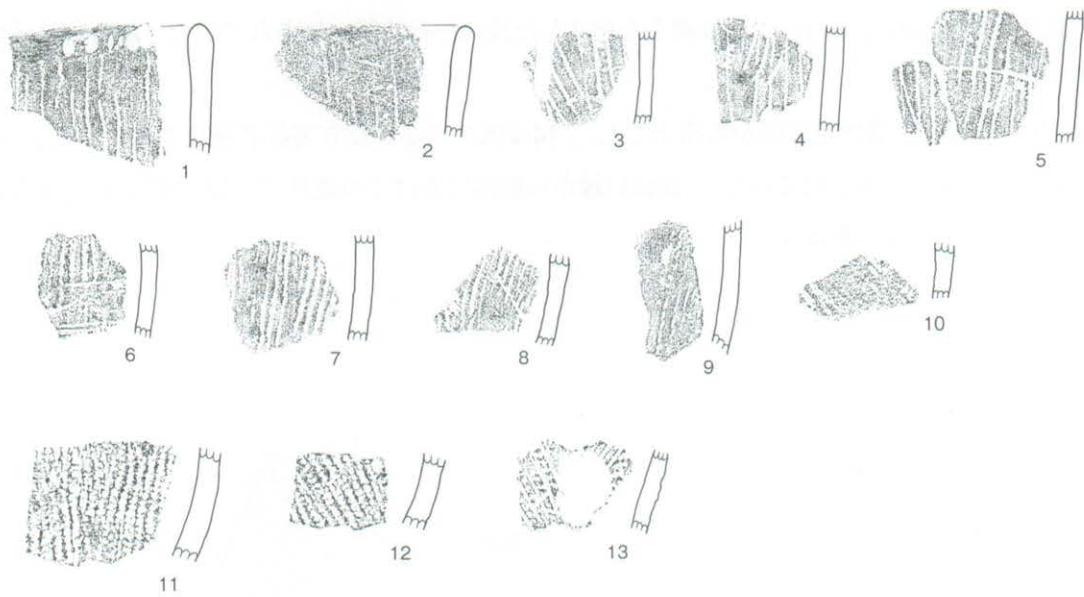
第37図 炉穴

12は縄文時代後期の土器片であろう。13は縄文を施文した後に平行沈線が施されていた。加曾利B式の土器である。

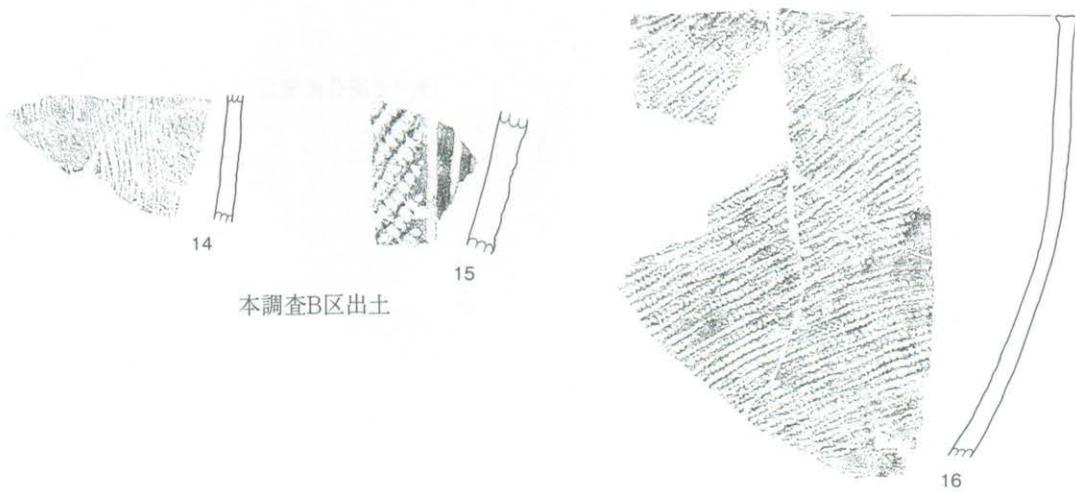
14～16が本調査B区の遺物包含層から出土した。14は撚糸文がかなり密接に施文されていた。15は太い沈線文の区画に縄文が施されていた。16は口縁から胴部にかけての破片で、LRの縄文が施文されていた。縄文時代中期の土器であろう。



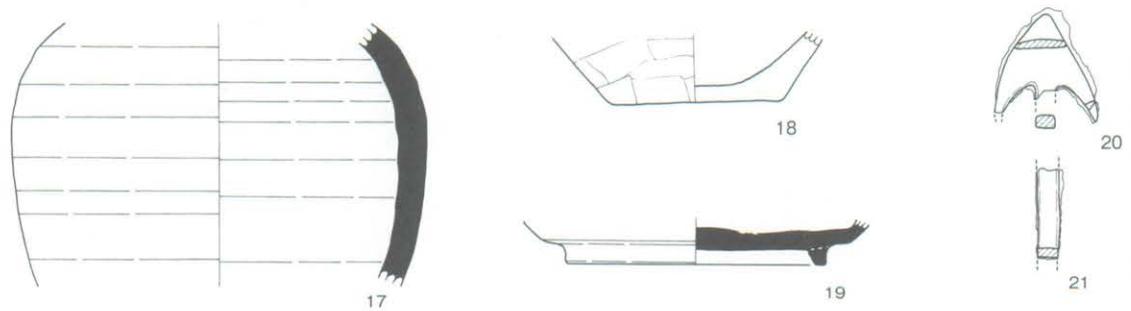
第38図 本調査B区



本調査A区出土



本調査B区出土

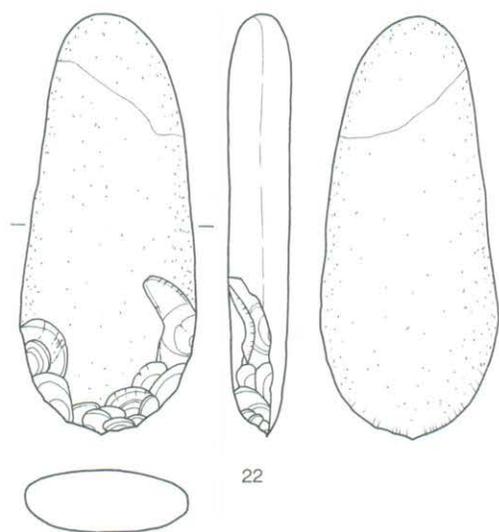


本調査A区出土

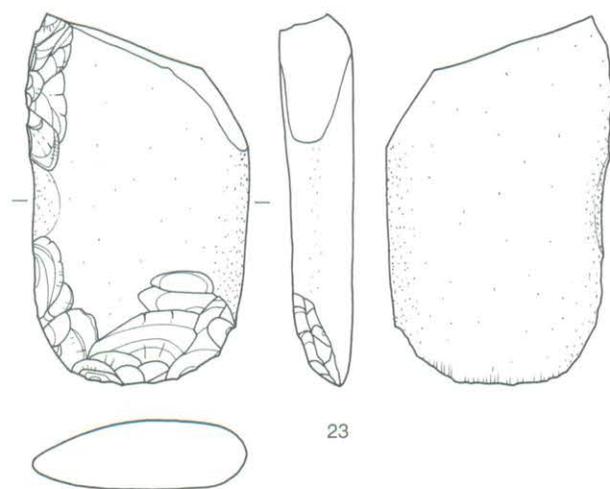
001横穴出土



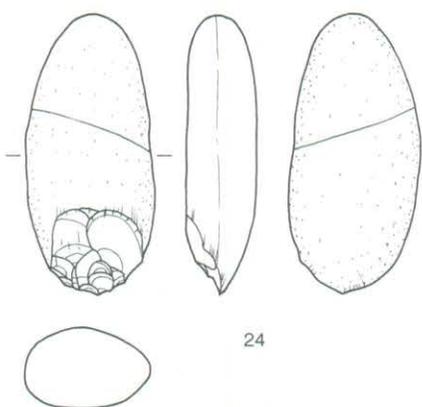
第39図 土器・鉄製品



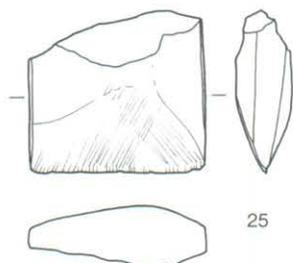
22



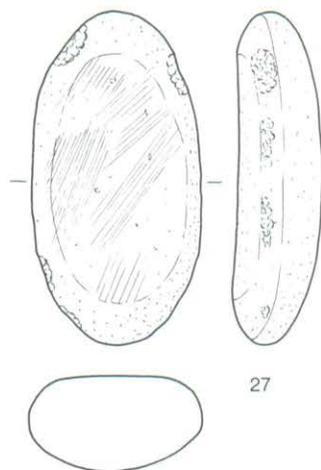
23



24



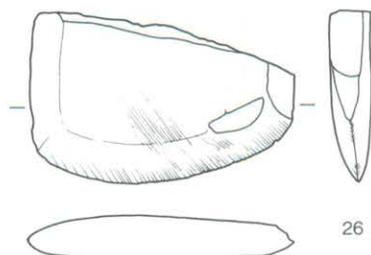
25



27



28



26



第40图 石器

第9表 大和田遺跡出土縄文土器

挿図番号	実測番号	出土遺構	遺物番号	土器形式	時期	備考
第39図	1	8	本調査A区 5F77-056	稲荷台	早期前半	捺糸文
第39図	2	13	本調査A区 5F97-033	稲荷台	早期前半	捺糸文
第39図	3	10	本調査A区 5F87-006	稲荷台	早期前半	捺糸文
第39図	4	7	本調査A区 5F76-020	稲荷台	早期前半	捺糸文
第39図	5	9	本調査A区 5F86-022・078	稲荷台	早期前半	捺糸文
第39図	6	5	本調査A区 5F77-051			
第39図	7	17	本調査A区 5G80-016			
第39図	8	4	本調査A区 5F87-143			
第39図	9	15	本調査A区 5F99-025			
第39図	10	6	本調査A区 5F77-090			
第39図	11	11	本調査A区 5F87-010、5F88-032			
第39図	12	14	本調査A区 5F97-023		後期	
第39図	13	12	本調査A区 5F96-021	加曽利B	後期	
第39図	14	18	本調査B区 7G08-001・002			捺糸文
第39図	15	19	本調査B区 7G18-003	加曽利E	中期	
第39図	16	20	本調査B区 7G17-001・002・004・005		中期	

第10表 大和田遺跡出土石器

挿図番号	実測番号	出土遺構	遺物番号	器種	石材	縦(mm)	横(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
第40図	22	4	本調査A区 5F98-010	打製石斧	砂岩	78.3	34.8	11.9	47.4	
第40図	23	3	本調査A区 5F88-041	打製石斧	砂岩	69.7	43.2	14.7	60.1	
第40図	24	2	本調査A区 5F86-060	打製石斧	砂岩	51.5	25.7	14.3	25.4	
第40図	25	5	本調査A区 5F98-059	磨製石斧	安山岩	31.0	35.1	10.5	14.6	
第40図	26	6	本調査A区 5F97-062	磨製石斧	安山岩	32.5	52.4	7.8	18.5	
第40図	27	1	本調査A区 5F78-012	磨石	砂岩	61.6	33.4	17.4	49.1	焼成、赤化
第40図	28	7	本調査A区 5G80-024	磨石	砂岩	121.7	36.9	47.0	278.2	焼成、赤化

第11表 大和田遺跡出土土器

挿図番号	実測番号	出土遺構	遺物番号	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存率	色調	備考
第39図	17	1	本調査A区 5F66-002・003・004、5F76-010、5F77-048	須恵器	長頸壺	-	-	-	1/10	内外面 灰褐色	ロクロ成形
第39図	18	3	本調査A区 5F87-113、5F98-036、6F07-032	土師器	甕	-	6.5	-	1/15	内外面 明褐色	外面ヘラ整形、 内面ナデ
第39図	19	2	本調査A区 5F87-052・116	須恵器	高台付杯	-	10.2	-	1/5	内外面 灰褐色	ロクロ成形

縄文時代石器

図化したのは、本調査A区の遺物包含層から出土したものである。22～24は砂岩製の打製石斧で、いずれも片刃である。22と24は刃部のみを作出しているが、23は側縁も作出している。25と26は安山岩製磨製石斧の刃部である。27は焼けた砂岩の礫であるが、磨痕が残り、ややくぼんでいた。28も焼けた砂岩の礫で、所々に磨痕が残っていた。

土師器・須恵器

図化したのは、本調査A区の遺物包含層から出土したものである。18は土師器甕の底部で、底径は6.5cmである。内外面の色調が明褐色で、外面にヘラ整形、内面にナデの調整痕があった。17は須恵器長頸壺の肩部で、内外面の色調が灰褐色、調整痕はロクロ成形であった。肩部は角張らずに丸く曲線を描いている。19は須恵器高台付杯の底部で、底径は10.2cmである。内外面の色調が灰褐色、調整痕はロクロ成形であった、長頸壺肩部および高台付杯の形態からすると、須恵器は7世紀末から8世紀前半の年代と考えられる。

第3節 古墳時代（第41・42図）

平成21年度に大和田遺跡群（2）で横穴3基が調査された。そこで大和田遺跡群（2）の調査成果を古墳時代の節を設けて記述する。昭和61年7月から翌年3月まで丘陵西端部分で、古墳3基、横穴16基、土坑墓1基、須恵器窯跡1基などが調査され、今回調査された横穴は、約25年前に調査された大和田丘陵西端の横穴群に含まれるものだった。横穴は丘陵の南側斜面に東西に並んでいた。圏央道建設で調査された3基の横穴は、横穴群の東端に位置していた。

1 横穴

調査の対象となった場所は約25年前に調査された横穴群の東側で、丘陵斜面にわずかな窪みを見せていたため（図版18）、調査前に横穴の存在は予測できた。表土除去後にやや脆弱な灰褐色砂岩の岩盤まで掘り下げると、道の切り通しによって破壊され、わずかに玄室の後方部分が遺存する横穴2基と、玄室や羨道が削られて前庭部の痕跡のみとなった横穴1基を確認できた。

玄室後方部分が遺存していた2基は南北に隣接し、大和田横穴群の東端に位置する。北側が001横穴、南側が002横穴である。前庭部の痕跡が確認された横穴は、その2基よりもやや西寄りに離れていた。

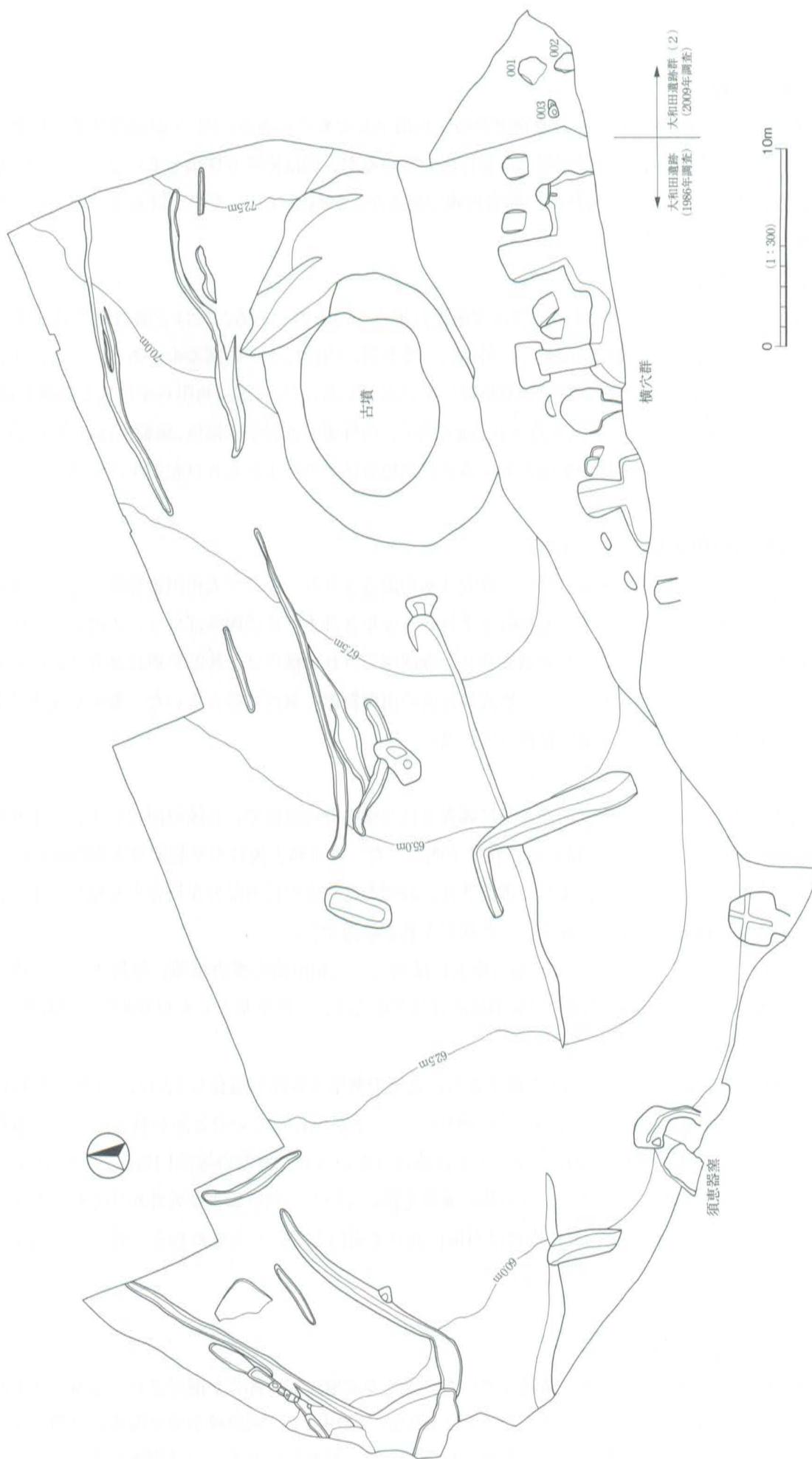
001横穴（第42図、図版18・19）

001横穴は、羨道や玄室の大半が削平され、玄室の奥壁と床面が遺存していた。床面の形状は正方形に近く、長さ1.38m、幅1.24mで、床全体の80パーセントが遺存していたと思われる。ただし遺存状態はあまりよくない。床面に棺床や棺台などの安置施設はなかった。奥壁の幅は1.15m、高さは0.54mで、平らな床面の上に、側壁から天井へドーム状に曲線を描いていた。側壁および天井が部分的にわずかに遺存していた。玄室の方位は217度で、横穴は西南に向けて開口していたと思われる。奥壁の大部分と側壁の一部に、工具による掘削痕が遺存していた。

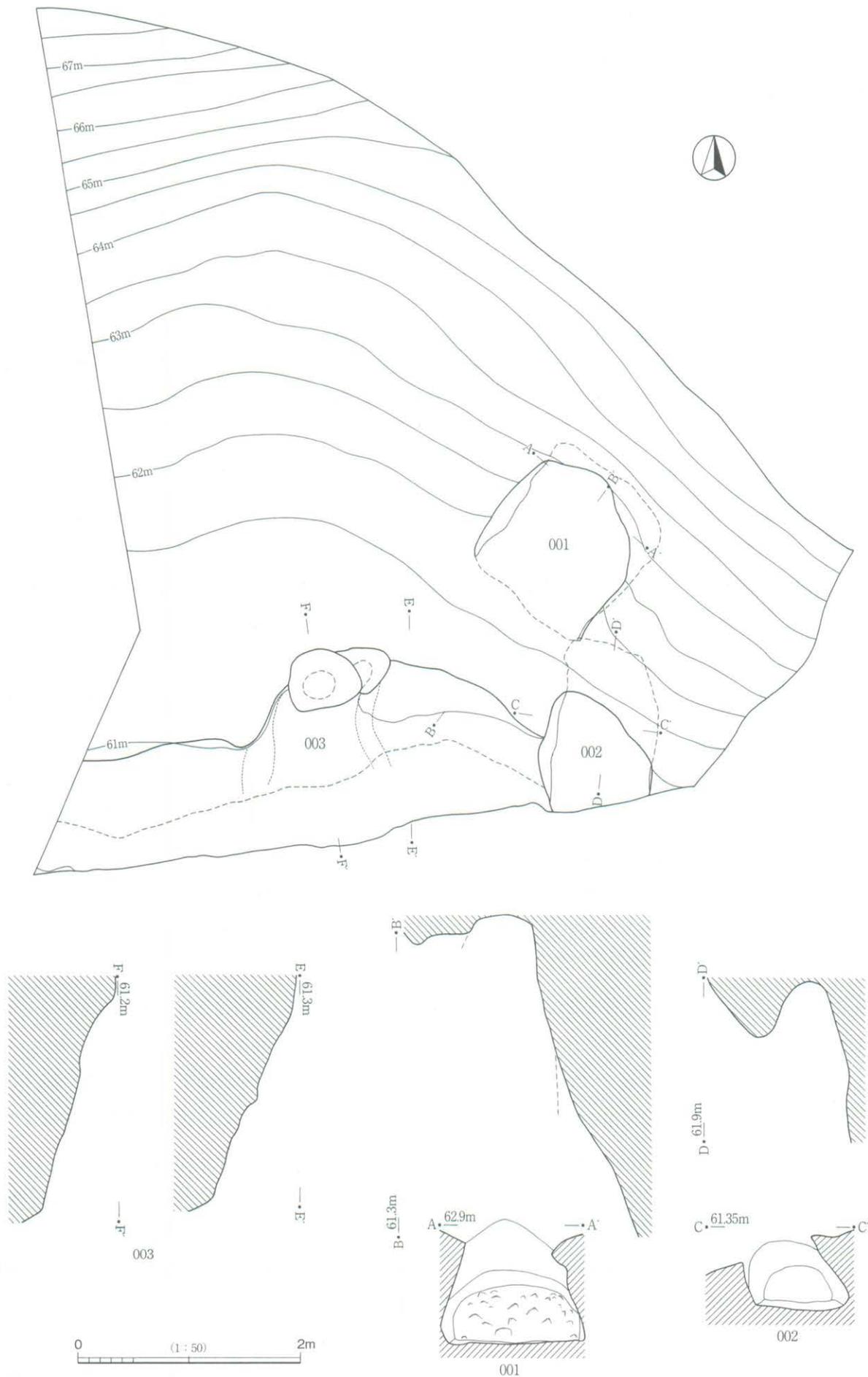
覆土中から鉄鏃片が出土した。

002横穴（第42図、図版19）

002横穴は、001横穴の南側に隣接していた。羨道や玄室の前方部分が削平され、玄室の後方部分が遺存していた。遺存していた玄室の床面は、長さ1.43m、幅0.9mで、東側縁がやや内側に屈曲していた。床面には、後世の影響と思われる凹凸がかなり見受けられ、原形を推測するのは困難であった。玄室の方位は



第41図 大和田遺跡(1986年調査)と大和田遺跡群(2)



第42図 大和田遺跡群 (2)

186度で、横穴は南に向けて開口していたと思われる。遺存していた天井部分は長さ0.4m～0.6mであった。天井と側壁との接点に明瞭な稜は見られず、ドーム状になめらかな曲線を描いて床面へと達していた。奥壁の幅は0.6m、高さ0.39mであった。奥壁には、部分的に工具痕が残っていた。

003横穴（第42図）

002横穴から約2.5m西側に位置する。横穴の主体である玄室や羨道が、切り通しによって破壊されていた。直径約0.7mの浅いピットが検出され、前庭部もしくは墓前域に関連した遺構と判断された。ピットの北側にどのような横穴が存在したのか復元は不可能だった。

2 遺物（第39図、図版21）

001横穴から出土した鉄鏃以外に遺物はなかった。

第39図の20は鏃身幅の広い三角形をした鉄鏃である。鏃身長40.01mm、逆刺長11.94mm、鏃身幅40.09mm、厚さ18.6mm、重さ21.14gをはかる。21は茎で、長さ32.9mm、幅7.7mm、厚さ3.3mm、重さ4.58gをはかる。

第4節 まとめ

約25年前に実施された大和田遺跡の発掘調査では、独立丘陵西端にあった古墳と横穴群、須恵器窯などが調査された。圏央道工事にもなって発掘調査の範囲は丘陵全体へと広がり、新たに旧石器時代や縄文時代の遺跡も検出された。原始時代に大和田周辺の環境は、人間の居住にとって好条件を提供していたといえるだろう。丘陵麓にある現在の大和田集落について、江戸時代の史料に村名が記録されているが、集落の起源が中世や古代にまでさかのぼるのかどうかは不明である。

縄文時代 丘陵上の平坦面西側に位置する大和田遺跡で、縄文時代早期の遺物包含層が本調査A区と本調査B区の2か所で検出された。本調査A区からは合計約1,200点の礫・石器と土器が出土した。遺物の大半が礫で、8割以上に相当する。しかも焼成を受けた礫が多かった。明らかに人間の火の使用によって産出された大量の礫片である。炉穴や土坑などの遺構は少なかったが、縄文人が繰り返して火を利用したことによって、大量の礫片が遺存したと考えられる。

本調査B区からは合計20数点の礫と土器が出土し、また焼成を受けた礫は少なかった。本調査B区ではA区と異なり、火の使用を想定できず、しかも遺物数量が少なかったことから、この地点での縄文人の活動は短期間で終了したと思われる。

周辺に所在する縄文時代の遺跡を見ると、縄文時代早期・前期の遺物包含層が大和田遺跡群（4）、関尻遺跡、山小川遺跡などで検出された。これらの遺物包含層では、土器と礫が混然一体となって分布していた。関尻遺跡の遺物包含層では、合計約150点の遺物が出土し、その内訳は土器片約70点、礫・石器約80点であった。遺構や火の使用の顕著な痕跡は見られなかった。また山小川遺跡の遺物包含層では、合計約500点の遺物が出土し、その内訳は土器片21点、礫・石器475点であり、礫片が大半を占めていた⁽¹⁾。

周辺遺跡で検出された遺物包含層は、縄文人の活動の痕跡を示しているが、その数量と内容に顕著な統一性や規格性を見出すのは困難である。それぞれの場所で異なる活動が行われ、遺跡の形成パターンも相違したのかもしれない。大和田遺跡群から東南へ約2.5kmの地点に新井花和田遺跡がある。縄文時代早期後葉の竪穴住居跡11軒、炉穴19基などが検出されて、「集落」の様相がうかがえた⁽²⁾。北へ約6.3km離れた所に奉免上原台遺跡がある。ここでは縄文時代早期後葉の炉穴が36基検出された⁽³⁾。

住居跡や炉穴の構築は、一定の長期的居住を意味すると見られている。大和田遺跡で検出された遺物包

含層では焼けた礫が多数出土し、繰り返し火が使用されたと予測できるが、住居跡や炉穴は検出されなかった。したがって居住と認定されるほど、長期にわたって同じ場所にとどまり、生活した痕跡とまではいえないだろう。

古墳時代 大和田遺跡群（2）の調査では横穴3基が調査された。この3基は、約25年前に調査された横穴群の東端に位置していた⁽⁴⁾。3基の横穴のうち1基は、玄室や羨道が削られて、かろうじて前庭部の痕跡が確認できた。また他の2基も前庭部および玄室の開口部が削られていて、玄室後方部しか残っていなかった。

遺存していた2基の玄室後方部は、側壁から天井へドーム状に緩やかな曲線を描き、奥壁の形状は蒲鉾形であった。また玄室の幅は、001横穴が1.24m、002横穴が0.9mと、相対的に小規模なものであり、玄室の原形は細長い長方形だったと考えられる。

前回の調査報告書で報告された横穴と比較してみると（第43図）、玄室の幅が1m前後ないしは1m以下のものは、5号横穴、6号横穴、8・9号横穴、31号横穴、32号横穴、34号横穴、39号横穴、37号横穴であった。これらの横穴は、玄室の幅2m以上の比較的大きな横穴の脇に位置している。すなわち7号横穴の両側に5号横穴、6号横穴、8・9号横穴、30号横穴の北側脇に31号横穴、33号横穴の東側脇に32号横穴と34号横穴、35号横穴の東側脇に39号横穴と37号横穴がある。このような大小の玄室の位置関係からすると、001横穴と002横穴は、玄室の幅2mを超える比較的大きな横穴の脇にあったと推測される。2基の横穴の位置からすると、前庭部の痕跡のみが確認された003横穴が大型の横穴であった可能性も考えられるだろう。

大型の横穴の玄室は、形状が方形もしくはやや横長の長方形で、側壁と天井部の接合部には明瞭な稜線がある。また玄室と羨道部を分かち隔壁が設けられている例もある。一方小型の横穴の玄室は、形状が細長い縦長の長方形で、側壁と天井部はドーム状に曲線を描き、隔壁がない。両者の横穴のタイプに構造的な相違が見受けられる。

今回の調査で得られた遺物は、001横穴から出土した鉄鏃だけだった。三角形の鉄鏃は他の横穴から出土した例は少ない。新しくなるにつれて逆刺が深くなり、鏃身幅の鏃身長が高くなるという形態変遷をたどることができるならば⁽⁵⁾、001横穴の鉄鏃は7世紀中葉から後半と考えられるだろう。

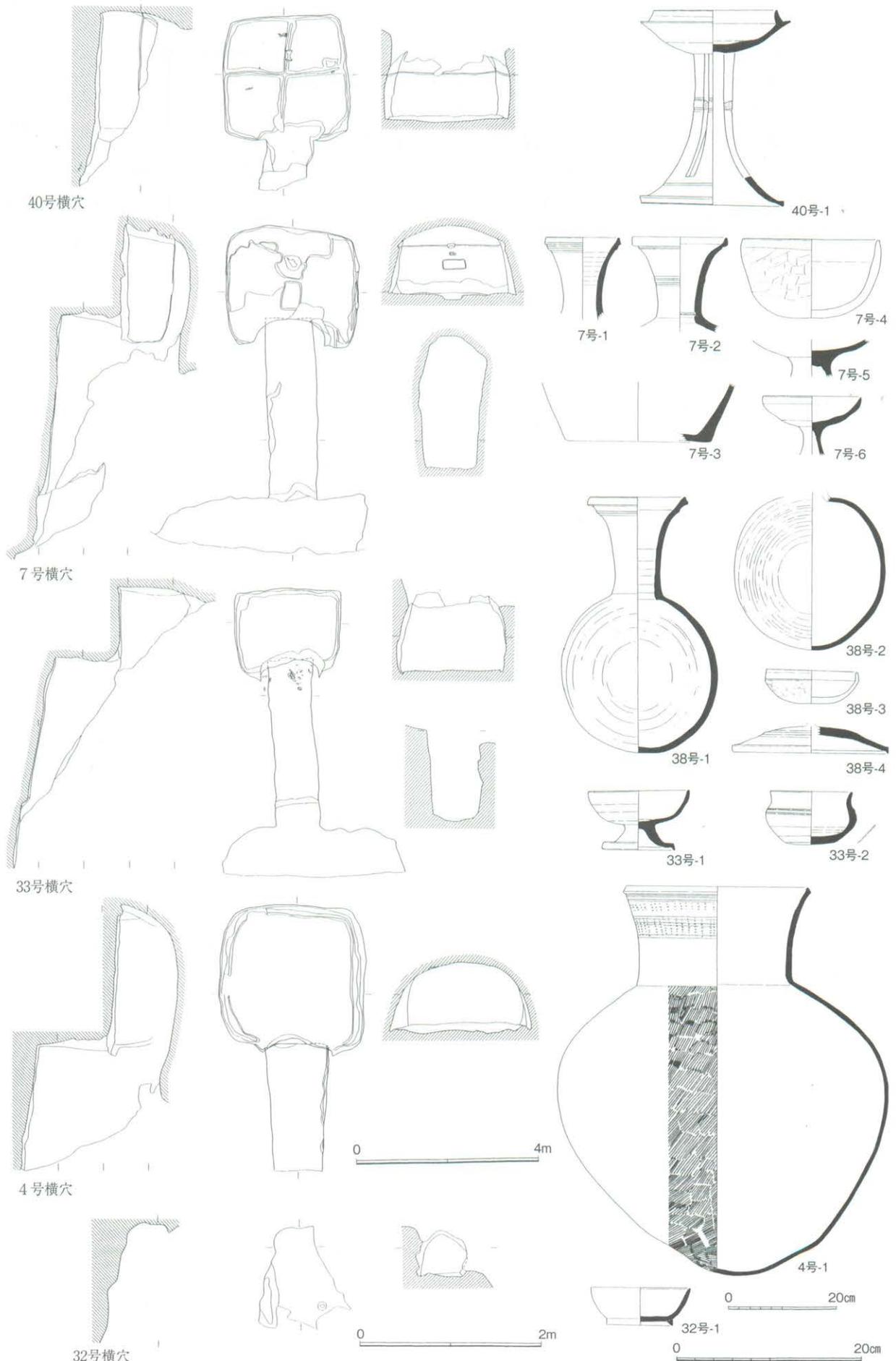
前回の調査で出土した遺物を見ると、40号横穴出土の須恵器有蓋高杯は6世紀後半から末、7号横穴出土の土師器杯は7世紀前半、38号前庭部出土の須恵器フラスコ形長頸壺および土師器杯は7世紀前半、33号横穴出土の須恵器高杯は7世紀中葉、32号横穴出土の須恵器高台付杯は8世紀前半と考えられる（第44図）。大和田横穴群への埋葬は、少なくとも6世紀後半から8世紀前半にかけて行われていたと見てよからう⁽⁶⁾。横穴群のなかでの横穴の掘削・作成の順序、すなわちどの横穴が古くて新しいのかという構築の前後関係は、追葬などの状況も考慮すると明確に判定するのは困難である。

ただし今回調査された3基の横穴は、6世紀後半から8世紀前半までの時間帯に属することは確かだろう。



第43図 大和田遺跡の横穴群

前田調査分 (1988年)



第44図 大和田横穴群の横穴と出土土器

注

- (1) 『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書15』千葉県教育振興財団調査報告第681集 2012年
- (2) 『市原市新井花和田遺跡』市原市文化財センター発掘調査報告書第74集 2001年
- (3) 『奉免上原台遺跡』市原市文化財センター発掘調査報告書第43集 1992年
- (4) 『大和田遺跡』市原市文化財センター発掘調査報告書第25集 1988年
- (5) 『県道山田台大網白里線埋蔵文化財調査報告書2』千葉県文化財センター調査報告書第361集 1999年
- (6) 土器や横穴の編年は、雨宮龍太郎「房総半島中央部の横穴墓制」『研究連絡誌』第72号 財団法人千葉県教育振興財団 2011年などを参考にした。

写 真 图 版



山口城跡



番後台遺跡



大和国遺跡群



番後台遺跡（2）
調査前風景



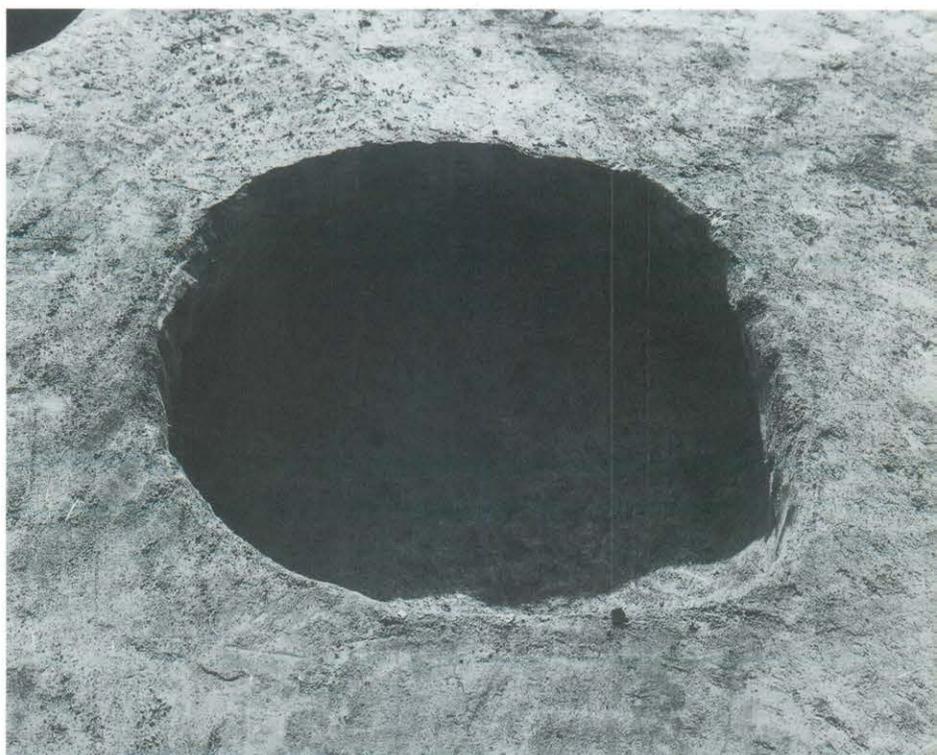
トレンチ調査



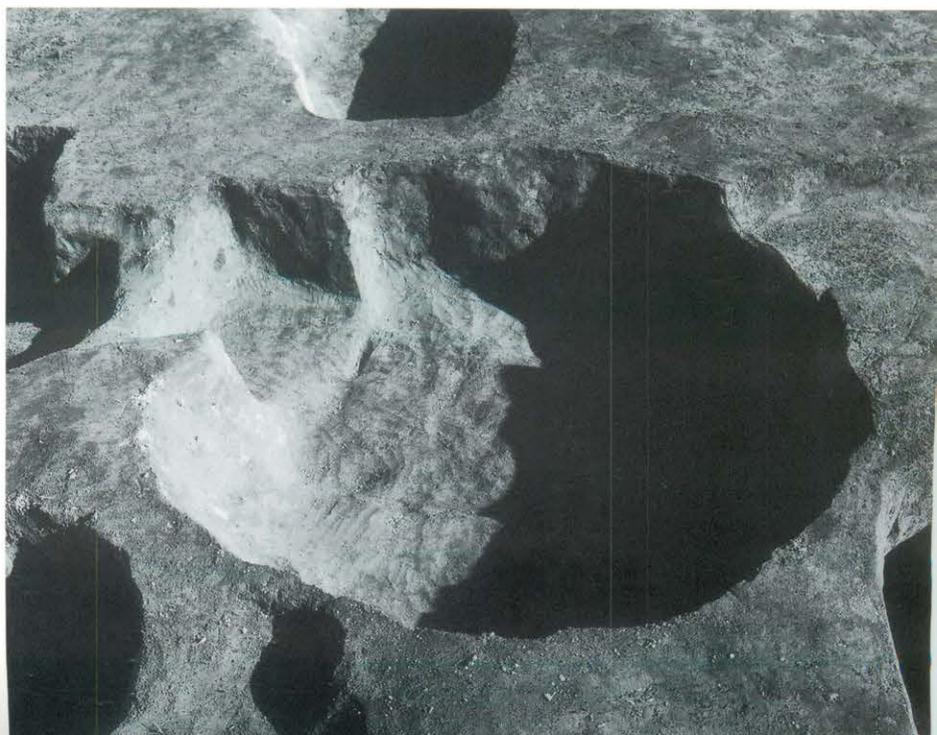
中央付近の遺構



009小豎穴



057小豎穴



028小豎穴



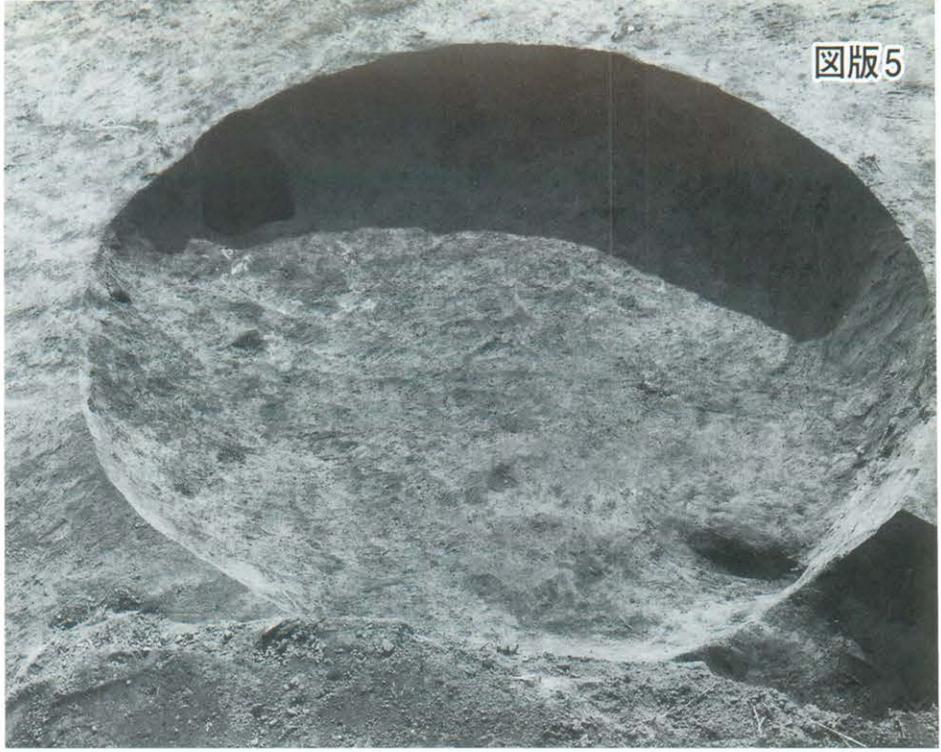
004小豎穴
005土坑



055小豎穴



001小豎穴



002小竖穴



041小竖穴



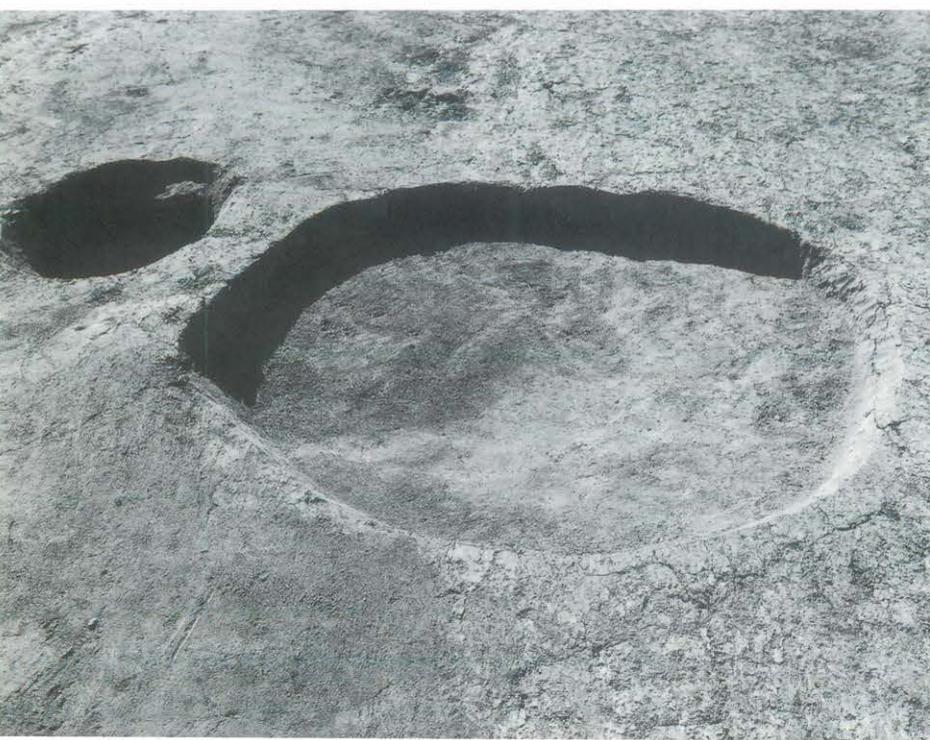
053小竖穴



011小豎穴



010小豎穴



062小豎穴

063小豎穴



003小竖穴



046小竖穴



042土坑



043土坑



SK002土坑



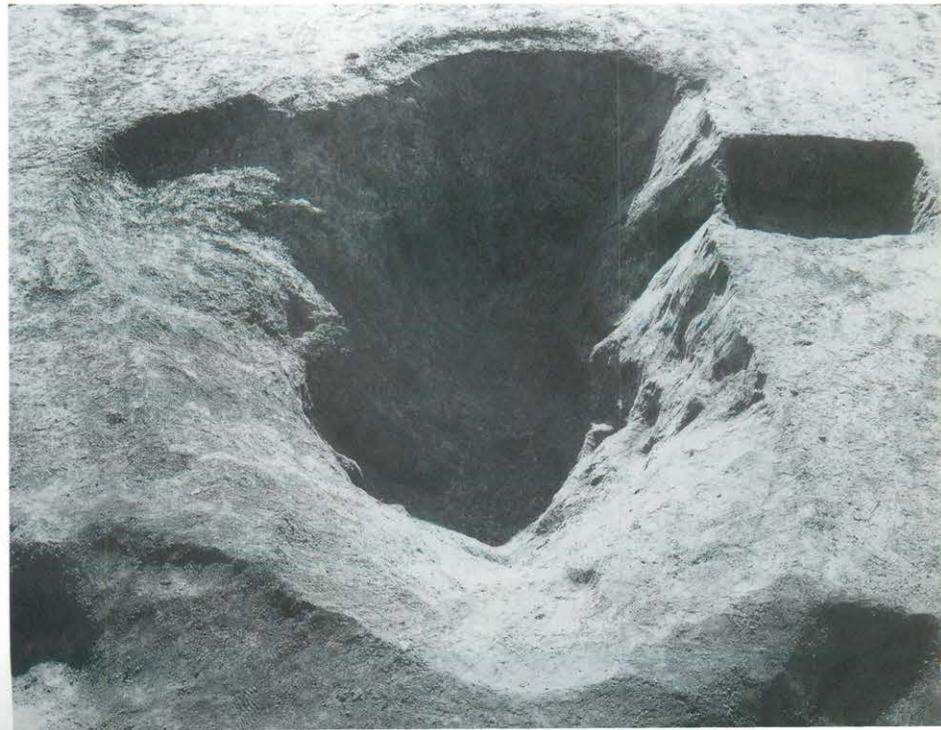
SK001土坑



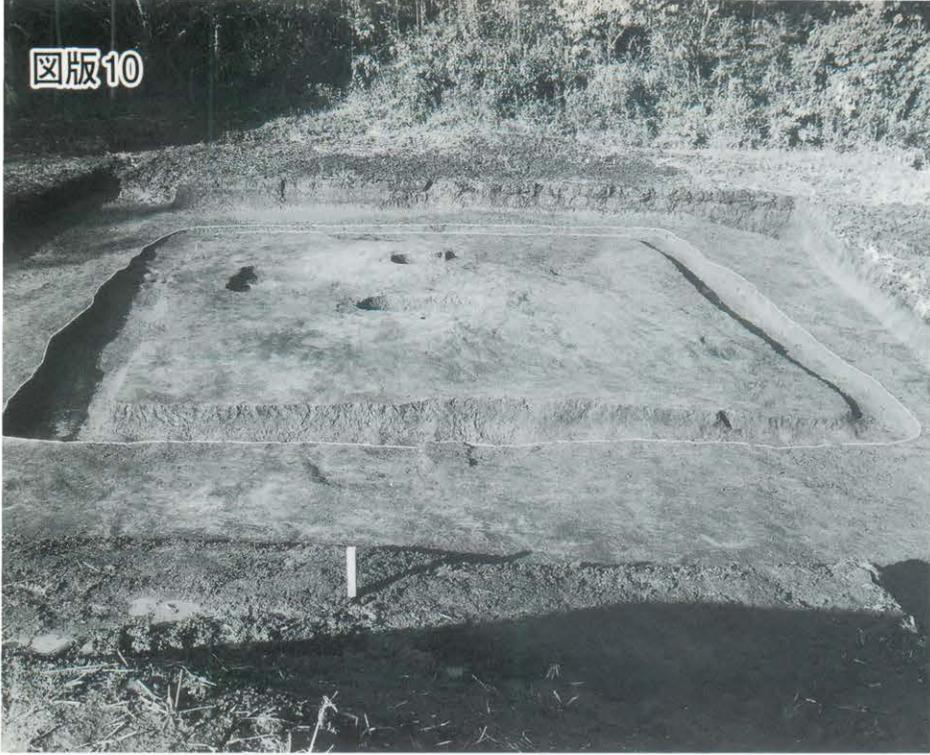
SK003土坑



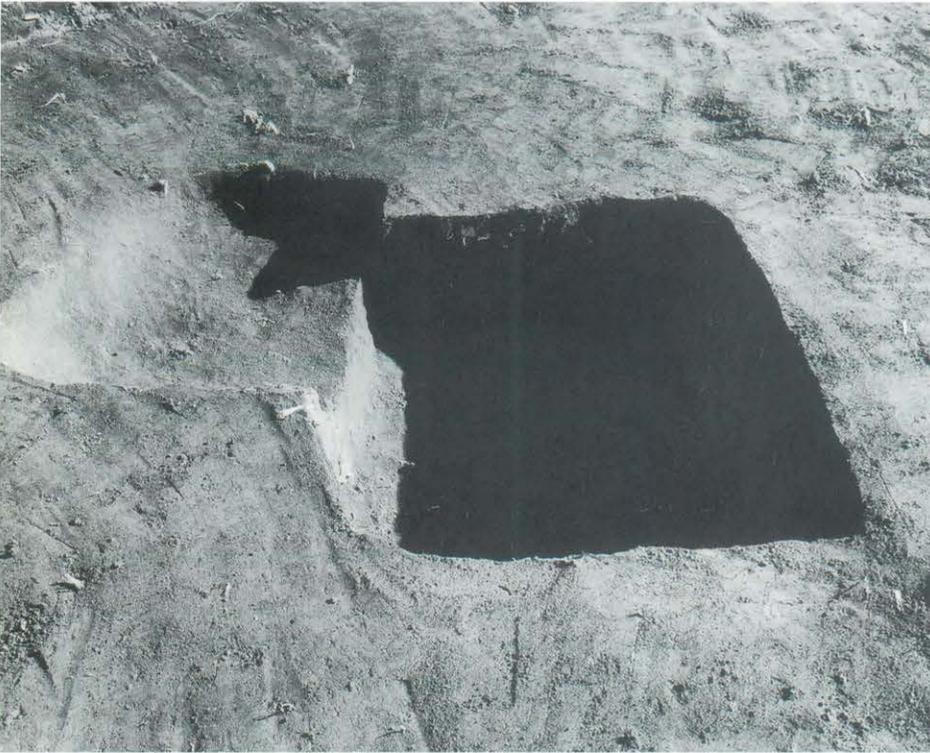
SK004土坑



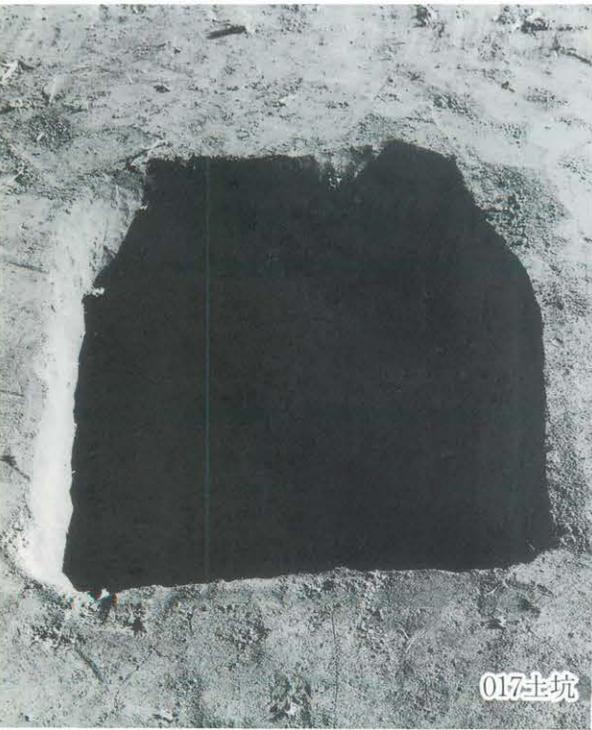
056a陷穴



SM001方形周溝状遺構



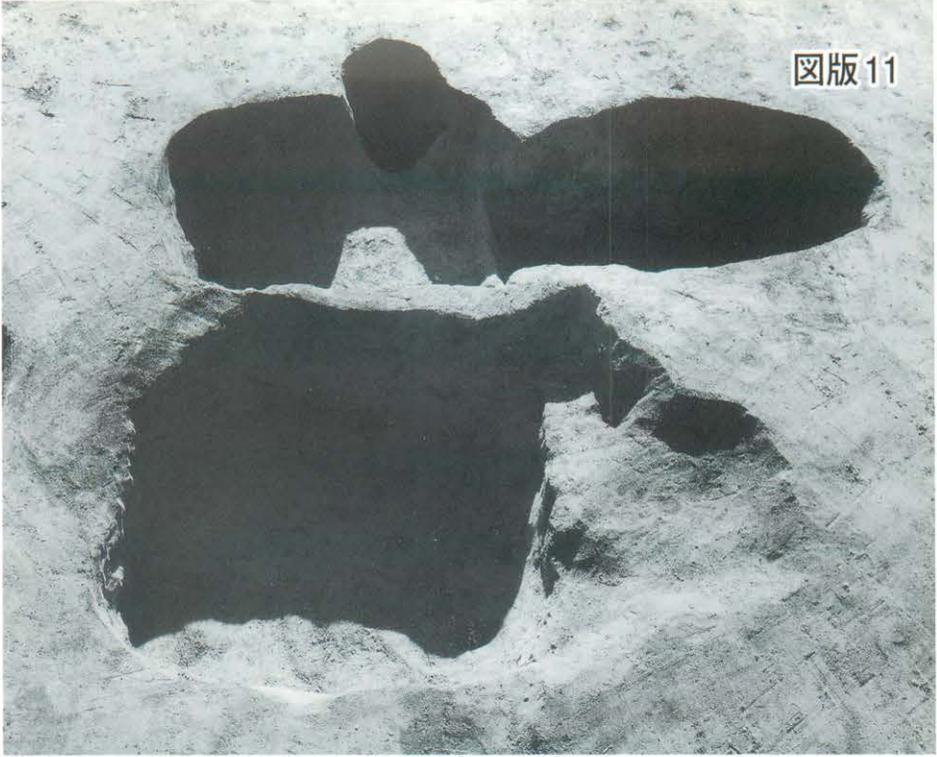
019土坑
018土坑



017土坑



016土坑



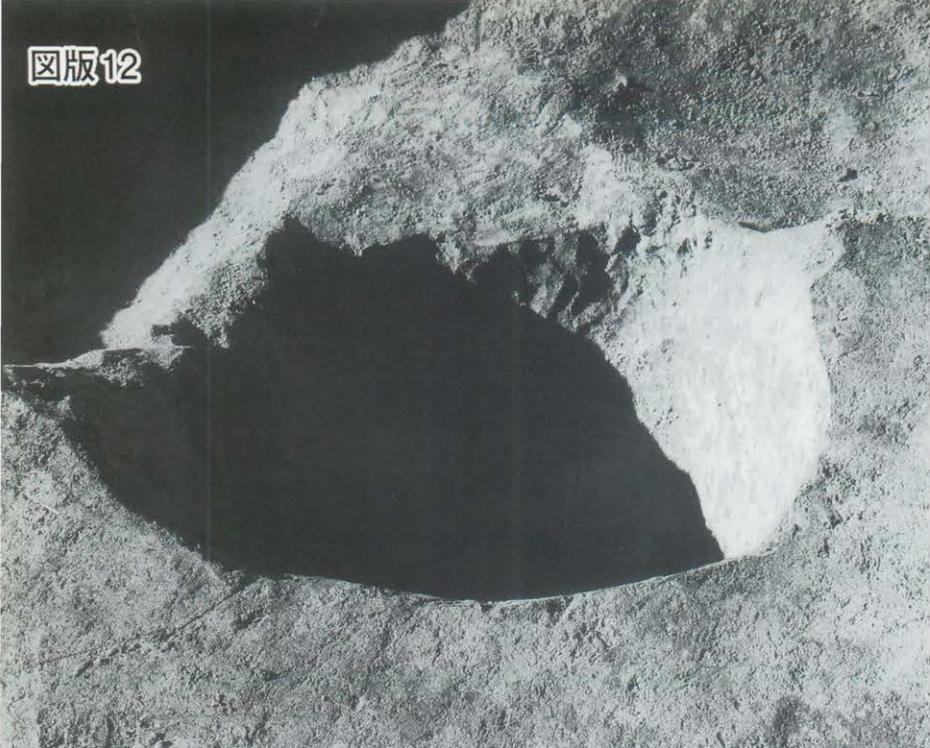
006土坑
007土坑
008土坑



030土坑
031土坑
038土坑
040土坑
045土坑
028小竖穴
029土坑



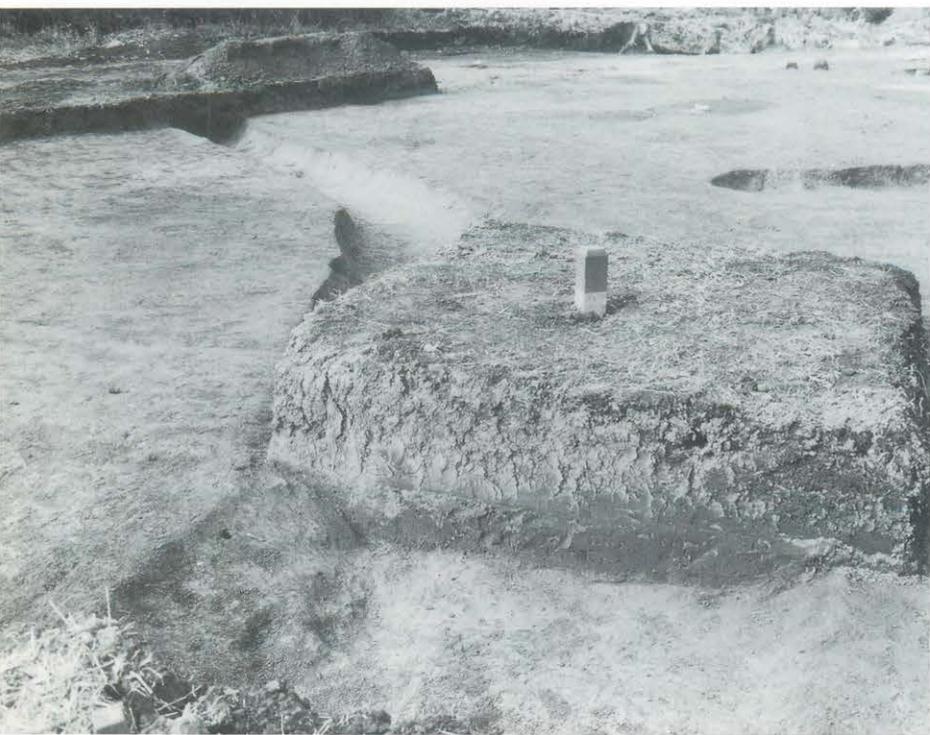
012土坑
013土坑
014土坑



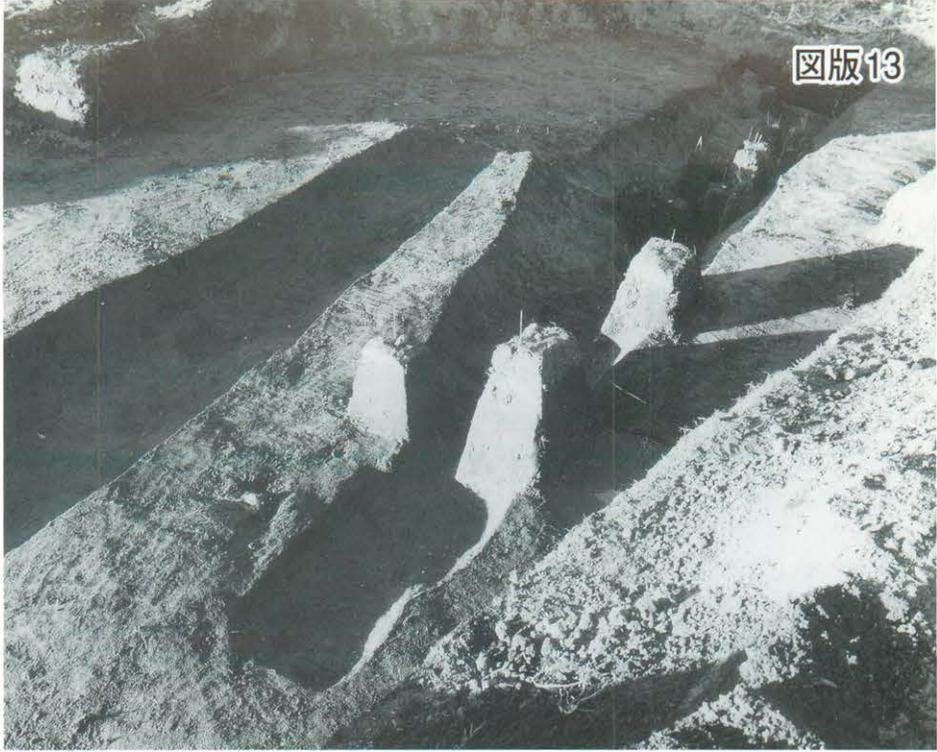
049土坑



021溝



020溝



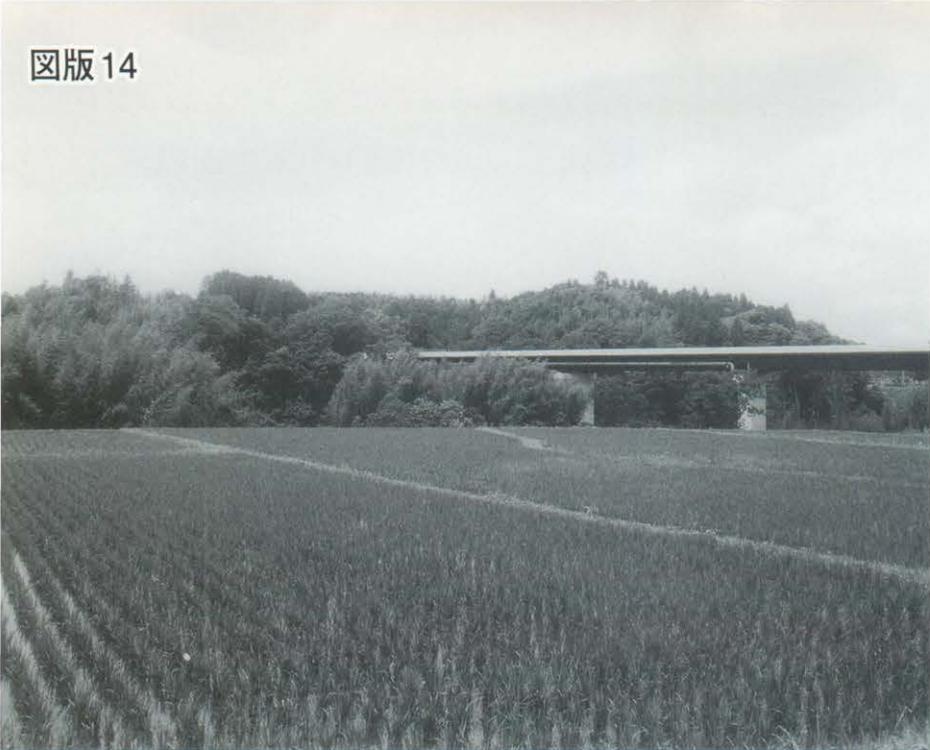
061溝



059溝



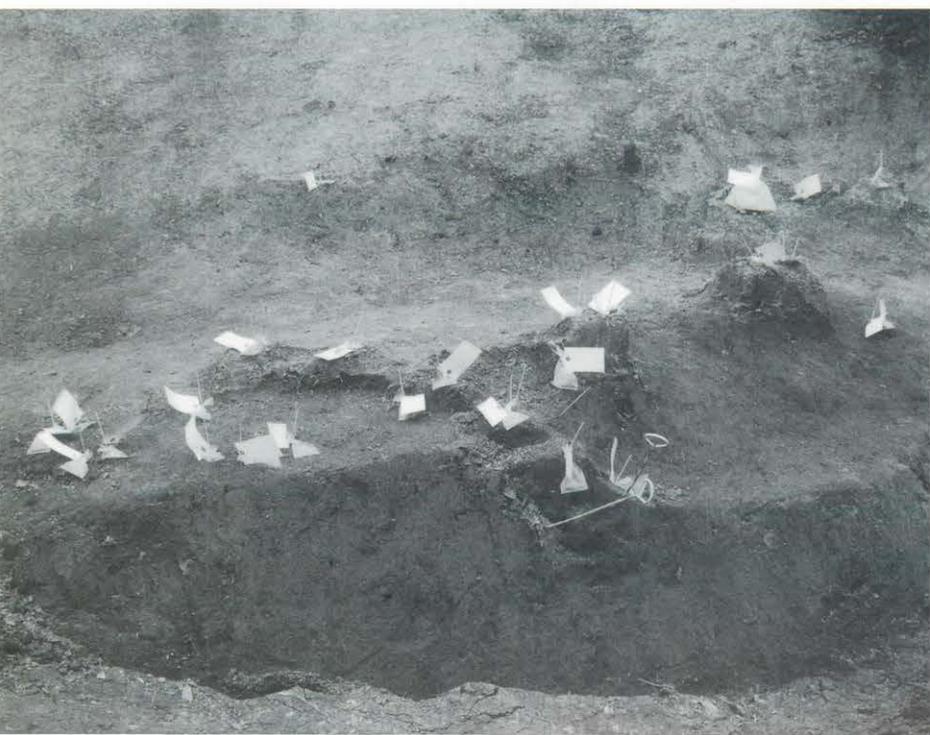
048溝



山口城跡
遠景



トレンチ調査



土器集中地点

大和田遺跡群
遠景



大和田遺跡群 (1)
トレンチ調査



大和田遺跡
3トレンチ





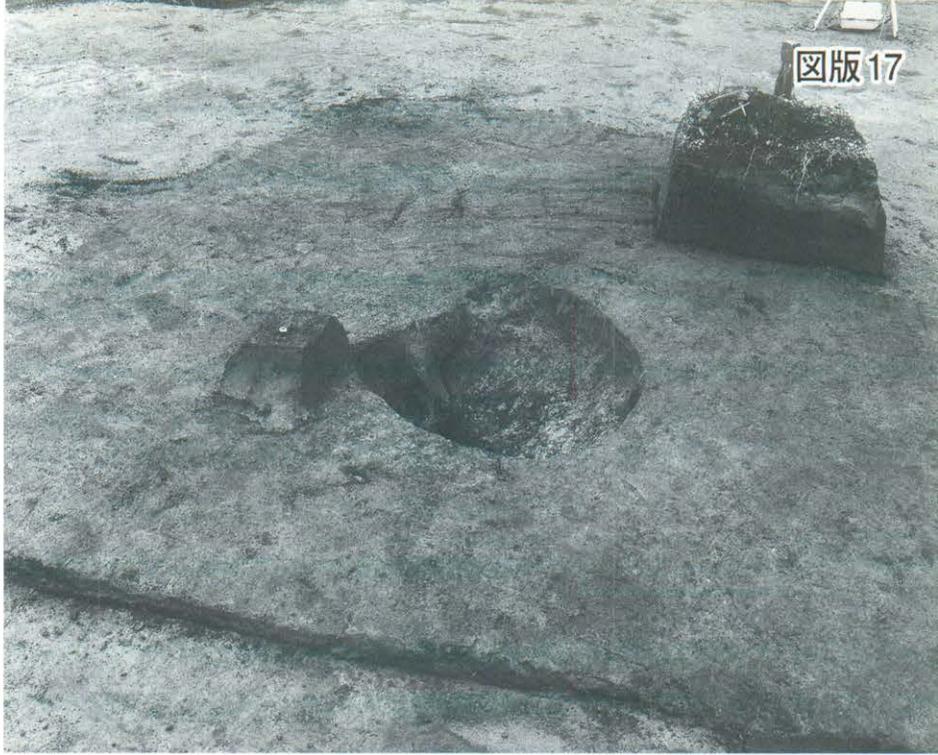
本調査A区



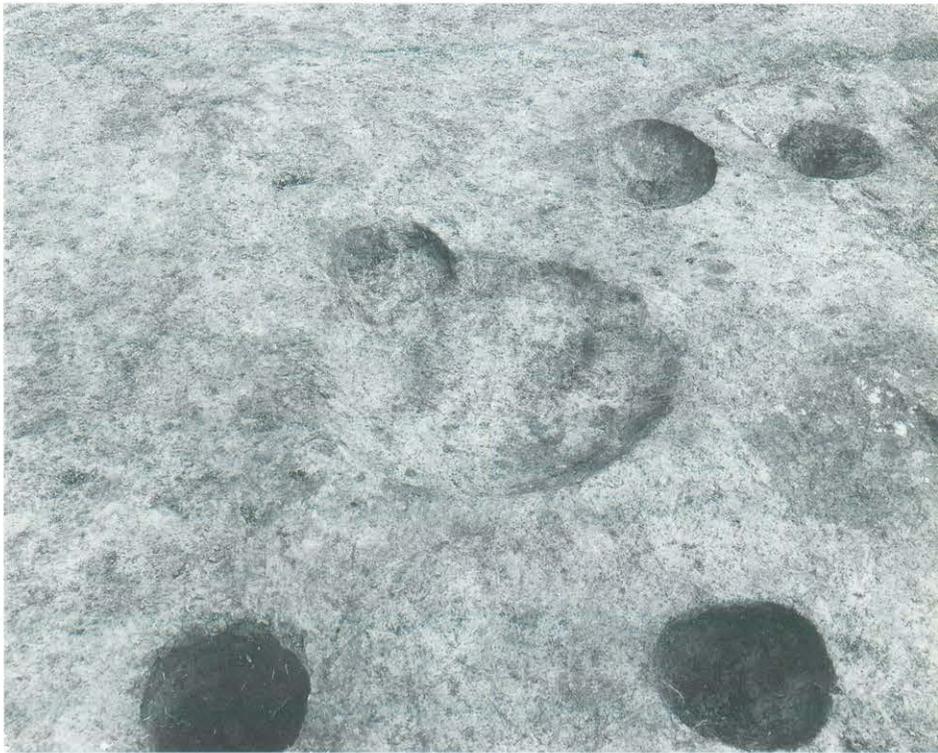
SK001土坑



SK002土坑



SK003土坑



SK004炉穴



SK005炉穴



本調査B区



大和田遺跡群 (2)
調査前風景



001横穴

001横穴
奥壁

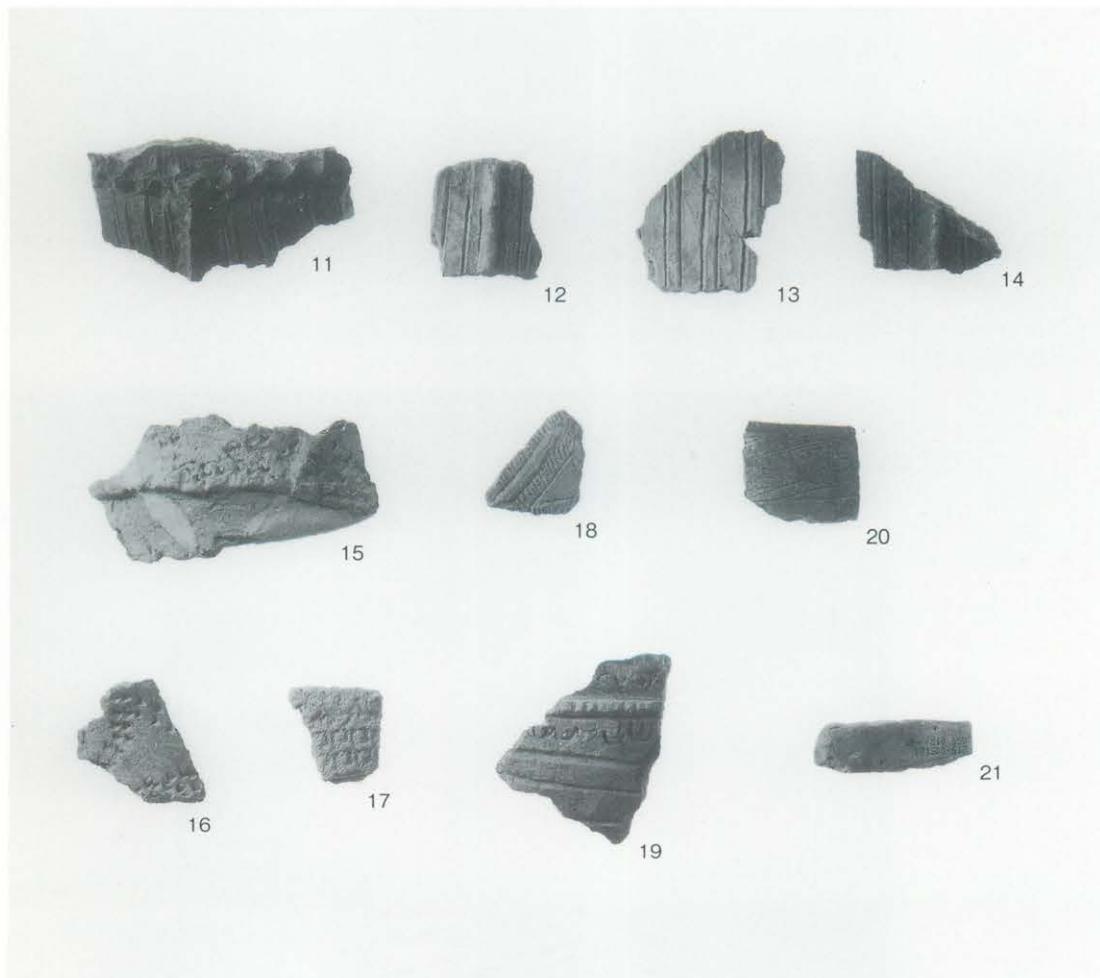


002横穴

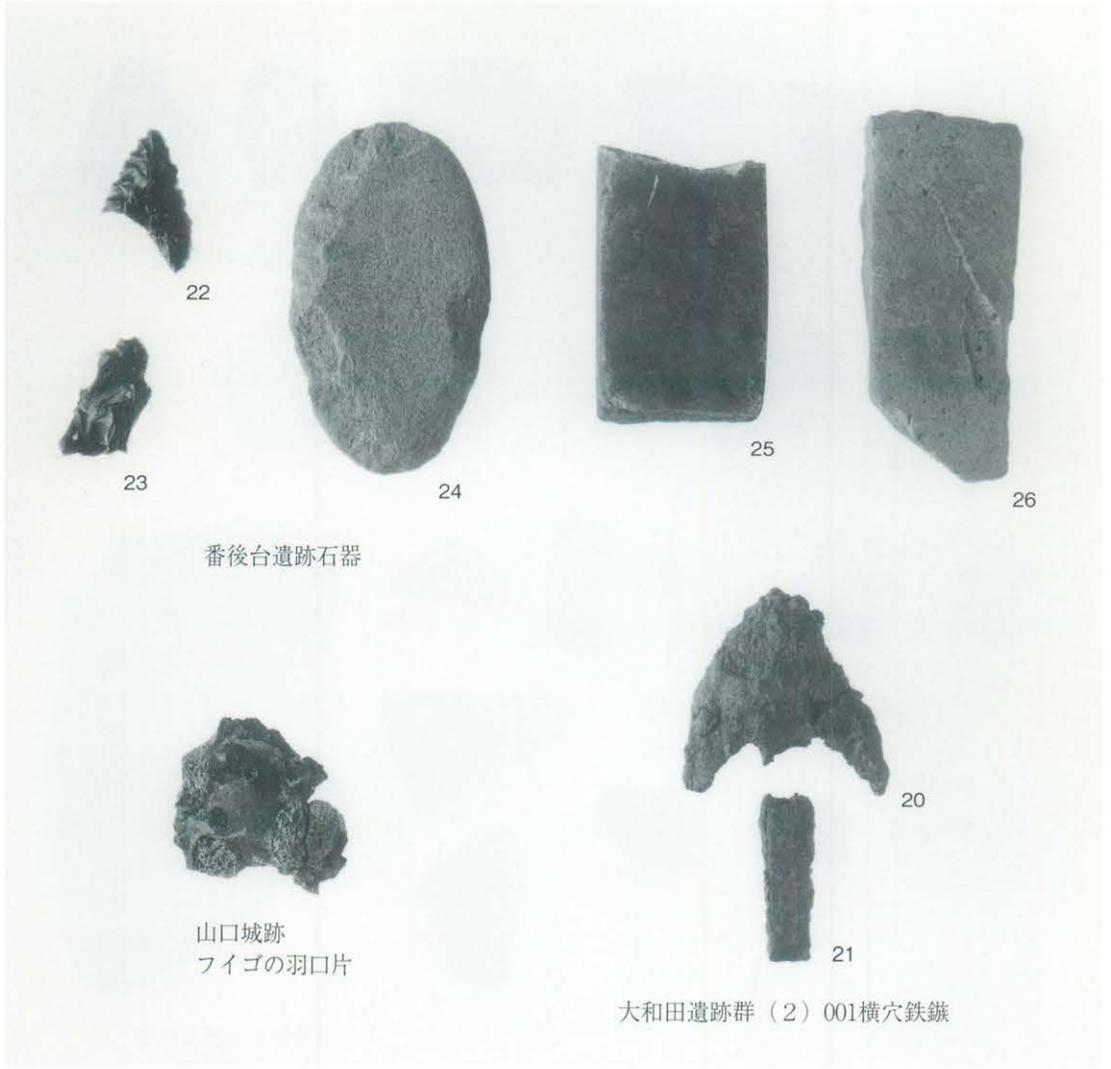


横穴群





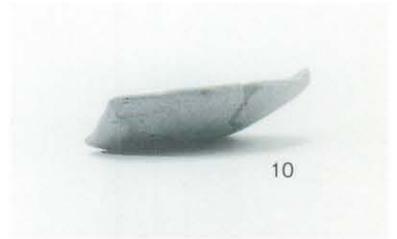
番後台遺跡出土土器



番後台遺跡石器

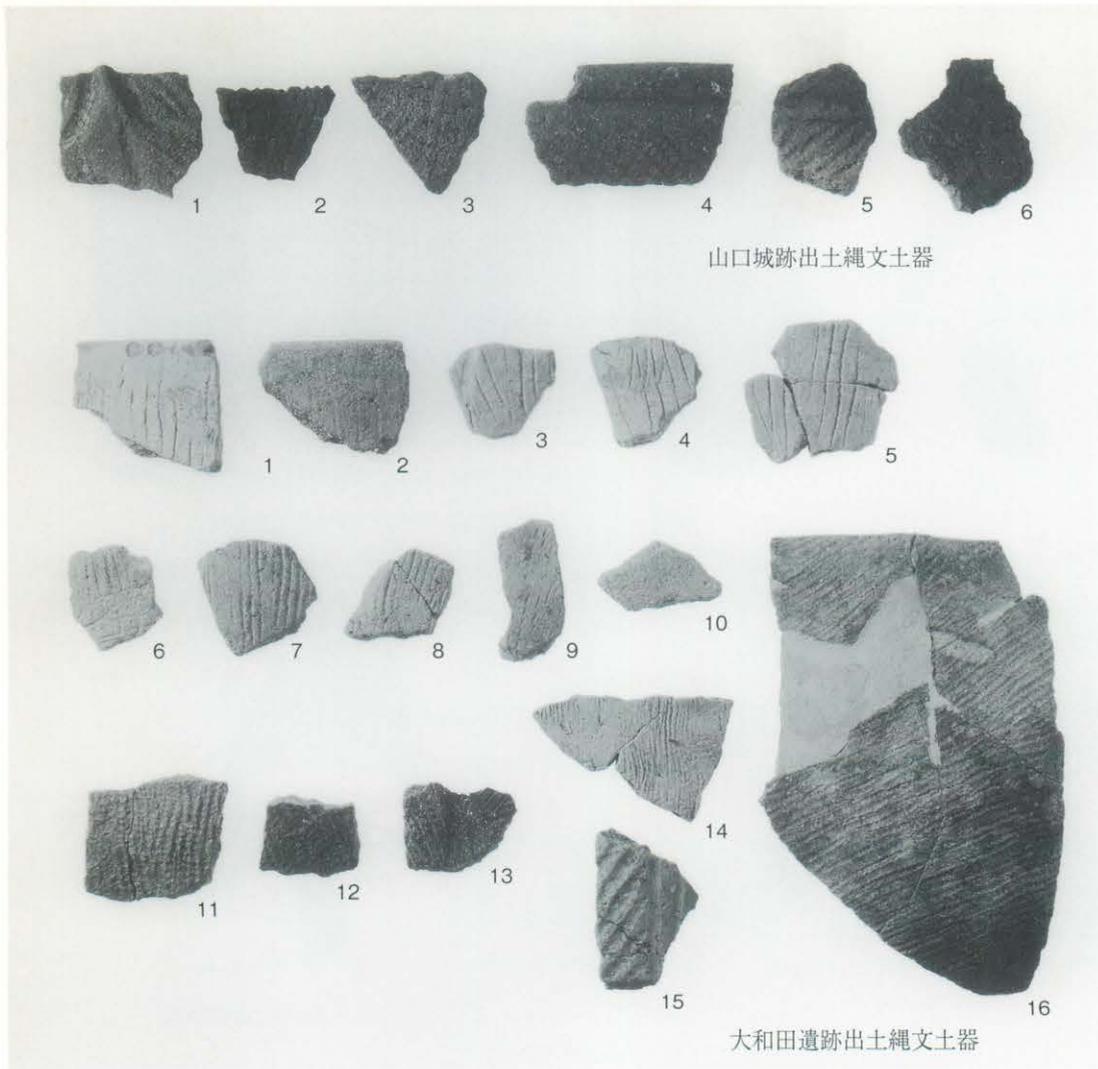
山口城跡
フィゴの羽口片

大和田遺跡群（2）001横穴鉄鏃



山口城跡土師器

番後台遺跡、山口城跡、大和田遺跡群（2）出土遺物



山口城跡、大和田遺跡出土遺物

報告書抄録

ふりがな	しゅとけんちゆうおうれんらくじどうしゃどうまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書
副書名	市原市番後台遺跡・山口城跡・大和田遺跡群
巻次	21
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第704集
編著者名	森本和男
編集機関	公益財団法人 千葉県教育振興財団 文化財センター
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 TEL 043-424-4848
発行年月日	西暦2013年3月8日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
番後台遺跡	千葉県市原市養老番後740-3ほか	12219	005	35度 21分 36秒	140度 9分 4秒	20051101 ~ 20051222 20061106 ~ 20061127	12,972.61㎡	道路建設に伴う埋蔵文化財調査
山口城跡	千葉県市原市山口字後田254-1ほか	12219	087	35度 21分 39秒	140度 8分 27秒	20060925 ~ 20060929 20070409 ~ 20070427	46,600㎡	
大和田遺跡群	千葉県市原市大和田字緑岡378-19ほか	12219	089	35度 21分 33秒	140度 9分 45秒	20070129 ~ 20070228 20090302 ~ 20090326 20090401 ~ 20090420	11,500㎡ 横穴3基	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
番後台遺跡	包蔵地	縄文時代 古墳時代 中世	小竪穴16基、土坑7基、陥穴1基 方形周溝状遺構1基 土坑37基、溝6条	縄文土器、縄文時代石器	
山口城跡	包蔵地 城館跡	平安時代	土器集中地点1か所	縄文土器、歴史時代土師器、 フイゴの羽口片	
大和田遺跡群	包蔵地 横穴	縄文時代 古墳時代	遺物包含層1か所、土坑3基、 炉穴2基 横穴3基	縄文土器、縄文時代石器、古 墳時代土師器・須恵器、鉄鏃	

要約	<p>番後台遺跡、山口城跡、大和田遺跡群は、房総半島のほぼ中央を南から北へ流れる養老川中流域の市原市高滝湖北岸丘陵に位置している。</p> <p>番後台遺跡では縄文時代中期の小竪穴、古墳時代の方形周溝状遺構、中世の土坑群などが検出された。</p> <p>山口城跡は、城館に関連する遺構・遺物が検出されず、城跡と認定するのは困難となった。</p> <p>大和田遺跡群では、縄文時代早期の撚糸文系土器をふくむ遺物包含層が検出された。包含層の遺物の大半は礫で、しかも焼成を受けたものが多かった。縄文人が繰り返し火を利用したことによって、大量の礫片が遺存したと考えられる。その他に、約25年前に調査された大和田横穴群に連なる横穴3基が調査された。</p>
----	---

千葉県教育振興財団調査報告第704集

首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書21

－市原市番后台遺跡・山口城跡・大和田遺跡群－

平成25年3月8日発行

編集 公益財団法人 千葉県教育振興財団
文化財センター

発行 国土交通省関東地方整備局
千葉国道事務所
千葉県稲毛区天台5丁目27番1号

公益財団法人 千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡809番地の2

印刷 大和美術印刷株式会社
木更津市中央1-1-6
